

先祖由緒帳

御馬廻

御清水町

村越持

大井田權右衛門由緒

一、大井田名字、新田之一俗里見之系図、曾祖父大井田入道、女子

式人、聲名跡嶋倉平右衛門大井田繼、長尾喜四郎様為座上之入道

聲二御成、大井田名字被為名乗候、已後御乱心被遊、清水内蔵之助二御預ケ被成候、只今之清水七左衛門覺申儀二御座候

一、大井田平右衛門御忠信申上ル儀、宗心様御半年之時、上田後室様依御頼奉入、懷中御五ツ年迄坂戸山二而守立申、以後 謙信様御意を以春日山江奉移、御前不去御奉公仕候

一、三郎様御館江御逃御取合之時分、同所館丸田伊豆屋敷大場口二而

初鑑初高名之儀、福崎彦左衛門為存儀（二御）座候

一、新発田因幡御敵申時、同所ニ而発鑓初高名仕候、大茂山ニ而無比類初

鑓仕、尻高十五左衛門共ニ兩人ニ而走廻高名仕候 ▲新潟船西楼、新発田

巖責申付、大井田平右衛門、嶋倉孫左衛門両大将ニ被 仰付、西楼江加

勢被遣候刻、平右衛門儀、信国之脇指を抜、敵之番所ヲ切破、丸外張ヲ

作り竹羽ヲ切払、船中ニ入候時西楼ニ火矢当火事出来之時、青帷子

着男無比類働火ヲ消候、平右衛門儀も同前ニ走廻り火ヲ消候、 宗心様

右之青帷子男ヲ何者ト御尋候得共、行衛知不申候、不審成働ト御

感被遊候、敵上陣之時、船之両口ニ而、孫左衛門儀、十文字鑓ニ而足を被掛

手負候、平右衛門鉄炮ニ而両股打貫、水中江落、錠之綱取付夜ヲ明シ、

敵ト物別仕候、然共御預ケ被成候玉菓は船中之勢江相渡由ニ候、未ノ白山

嶋ニ松木岩見居、平右衛門、孫左衛門無比類働能見届、其時之証拠人ニ候

一、乱橋ト申所ニ而御人数敗軍、敵方ニ而橋を引、宗心様御逃可被成方無

御座処ニ、平右衛門働を以、夫馬之荷物ヲ切落道を作り、御馬ヲ通シ

笹岡之城迄御逃被成候、其時之御供、大井田平右衛門、嶋倉孫左衛門八騎、

小簾持之城ニ居候佐野清左衛門三ニ御座候、夜明新発田押掛、巳ニ

危御座候処ニ、一番ニ直江山城走廻、家来兩人、志田、渋谷、二番大石播磨、

三番ニ平岡取テ返、大井田無比類働、右之面々見届候、就中小倉伊勢守

具成見届候 ▲大井田家之小簾は地黒ニ二ツ引両、金之輪貫之打物ニ而、

代々走廻候、關東御出馬長詰御軍之時、先軍ト小簾大将御馬廻ヲ引廻候

得と被 仰付、地黒ニひ垣ノ御小簾拝領仕、則河中島御合戦為御持

被為打勝任御吉例被下置由被 仰含、到拜領、于今右之小簾御座候

一、仙北由利庄内 一揆蜂起之時、平右衛門儀庄内 二而打死仕候、男子弐人

之内惣領大井田弥太郎、後平右衛門と号、只今之大井田兵右衛門親成、

隆心様御代 二大井田先祖忠信御尋 二付、其時分某兵右衛門若輩 二御

座候間、慥を覚不申、鉄上野覺を以引合、右之文言相認、寛永十年

十月廿二日三俣九兵衛を以、御前江差上申候、但大井田兵右衛門、七右衛門卜

申時成、某親平次郎 八兵右衛門親、平右衛門弟 二御座候、各別 二知行弐

百石被下置、宗心様御近習頭御膳番、大井田平次郎、齋木内蔵之丞

兩人 二被 仰付候、大坂両御陣御供、御上洛 二も供奉仕候、以後死去仕、

直子某九少年家督仕ル、若輩 二御座候間、拾七之年迄三俣九兵衛 二

御預ケ、十七已後は代々御なしみのものに御座候間、御近習ニ可被召遣と被 仰含、九兵衛組ニ罷在候、御広間御番六、七度仕候、某十弍之年、宗心様御遠行、同年 隆心様御国入、同年より御近習ニ被召遣候、其後御小姓頭、御膳番、新御手明五拾人御預ケ、岩井左京、三俣隼人、大井田将監三人同前ニ被召遣候、某不仕合を以蒙御勘気、三年以後被召出、大小姓之御奉公、後三俣将監組ニ被召加、会津御勢遣馬乗ニ而罷越候、 播磨様御代御使番、同御代三拾人頭、 御当代宰領頭被仰付、御奉公仕候、已上、

蓼沼長右衛門由緒

一、曾祖父本名齋木隱岐と申候、本来相州之内大山之者ニ御座候、

上州佐野之内蓼沼と申所二年久居住仕候、則在名蓼沼隱岐と

申、佐野天徳寺公江奉公相勤罷在処ニ、永禄之頃 謙信様関東

表江御出馬之節、佐野御責落之時、曾祖父父隱岐ト一男藤五郎父子

式人御忠信申上、御前江被召出候節、隱岐一男藤五郎、二男藤七、

三男藤八郎、四男与三、父子五人召連、御陣場江致伺公、御目見仕候、

其より御被官ニ罷成候、隱岐儀は佐野之城杉曲輪ト申二ノ丸ニ被指置、

一男藤五郎儀は御帰陣ニ被 召連、越後江御供仕、永禄十年卯月

三日之御日付ニ而、知行西浜之内寺嶋村被下置、本軍役鎧五挺、糸

毛具足、小箆壺本、金之前後と御書出、祖父藤五郎ニ被下置候、

于今所持仕候、御帰陣之御跡ニ而一揆起り、隱岐儀は杉曲輪大手ニ而

討死仕候、已後以上意隱岐後家子共越後江被為呼、藤五郎

弟共も所ニ被召遣候、拙祖父藤五郎、後掃部之助と官途被

仰付候、永禄十年より天正六之三月迄数度之御忠節仕候

一、景勝様御家督被為成、天正六之九月朔日之御日付ニ而御加増

之趣、山村藤三分、多羅沢分、倉賀野左衛門分三ヶ村之御朱印

于今所持仕候、天正七ノ正月、三郎様と御一戦之刻、三郎殿方之

侍と祖父掃部鑓を合、於御眼前頸討捕候、為御感状于今拝

持仕候 ▲祖父掃部、天正十年ニ越中魚津之城江被遣候節、一ノ外

張ニ中条越前と罷在候由、其時之掃部宿江越申状、于今所持仕候、

同年之六月三日ニ討死仕候、跡式一男太郎丸ニ右之知行無相違

家督被 仰付、藤五郎と名を改、十五之歳新発田江御出馬之

御供仕、虎口之御番等人並ニ相勤申候、其後 太閤公御代ニ罷成、

景勝様御上落之御供致、京都ニ而死去仕、兄之跡式弟長右衛門

被召登、知行無相違家督被 仰付、御下向之御供、親長右衛門

十六之歳仕候、越後より会津米沢江御供仕、大坂両御陣相勤候

一、定勝様御代ニ罷成、三手江御加増被下砌、貳百石ニ被成置候、則

亥之年之御上落、騎馬ニ而御供仕候、其已後御足輕鉄炮五拾人

被 仰付候 ▲綱勝様御代ニ三拾人頭五人ニ被成候時、親長右衛門ニ被

仰付候、跡式実子某ニ貳百石安堵仕候、則十人頭、酉ノ歳江戸

大火事之節御留守番被 仰付、其後御使番ニ被召加、御城廻

惣堀被成直シ之御普請大奉行、某、片桐六郎右衛門、栃本角左衛門、右三人二被 仰付候、当 屋形様御代ニ罷成、拙者三十人頭ニ被 仰付候、以上

土肥弥五兵衛由緒

一、曾祖父土肥但馬二男左馬之助儀、私祖父ニ御座候、 謙信様

御代より被召遣御奉公仕候、 宗心様御代ニ罷成、於府内御錯乱之

時分、頭壺ツ討取、御感状にて拝持仕候、其後も度々走回り御奉

公相勤申付、物成人拾石拝領仕候、越後より会津米沢迄御供

仕候、御当地ニ而打果、実子無御座候間、右之左馬之助舎兄土肥伝右衛門

次男、靱負儀は左馬之助為ニは甥ニ座候、幼少より養子ニ仕、

名跡相讓申候、大坂両陣共ニ私親靱負相勤申候

一、隆心様御代ニ罷成、御使番廿人御定被成候時、靱負御使役相

勤、相果申候、跡式実子某家督被 仰付候

一、蓮心様御代ニ御使番ニ被召加、当屋形様御代、当年百挺

御手明鉄炮五拾人被 仰付候、御当代迄三代御奉公仕候、祖父

左馬之助已前之儀は、惣領土肥伝右衛門所より委細可申上候、以上

一、

渡部惣右衛門由緒

一、謙信様御代より拙者祖父渡部左近御旗本ニ被召仕候、十輪卜

申所被下置、槍七挺之御軍役仕候、其時拝領仕ル御朱印于今所

持仕候、右之左近実子無御座候付而、御馬廻之内富永備中子

彦七郎聳名跡二仕、家督被 仰付、後彦七郎左近二罷成候

一、宗心様御代 二罷成、新発田御陣、高麗御陣迄相勤申、越後より

会津米沢迄御供仕候、大坂両御陣共二相勤申候

一、隆心様御代、右之左近式百石被下置隠居仕候、跡式実子某二

五拾石被下置、後式百石御加増拝領仕十人頭仕候

一、蓮心様御代 二、御足輕鉄炮三拾人御預ケ、三百石被下置候

一、当 屋形様御代罷成、御足輕十人御加被成、四拾人二被成被

差置候、以上

莅戸九郎兵衛由緒

荏戸九郎兵衛曾孫九郎兵衛、段々御引立

治憲公御代明和九年九月八日御小姓頭被 仰付、

天明三年十一月廿三日隱居願之通被 仰付、隱居後

六郎兵衛と改、寛政三年正月廿九日

治広公御代再勤中老被 仰付、御蔵出五百石被成下、

寛政六年閏十一月廿八日被奉行職被 仰付、御蔵出五百石、

加増、享和三年十二月廿五日病死、嫡子八郎改九郎兵衛

寛政二年三月廿四日世子

顕孝公御傳役被 仰付、寛政六年正月五日御逝去後

御仲之間詰、寛政六年六月廿八日

斉定公世子御内約相調候節、御傳役被 仰付、享和

三年六月六日中老被 仰付、文化元年奉行職被

仰付、弍百石江百石御加増被成下、永代御中之間詰被

仰付、七百石御蔵出千石被成下、文化十三年九月中

病死、嫡子孫惣家督之節、永々侍組江被召入、三百石

被成下、孫惣改九郎兵衛と、文政二年六月七日

斉定公御小姓頭被 仰付、文政六年五月

中老被 仰付、文政十二年五月十七日奉行職被
仰付、御蔵出七百石被成下、天保七年六月江戸江召
御加増弐百五拾石被成下、広居出雲次席、分領
家格被 仰付候、□□之上九月中病死

一、曾祖父菟戸九郎兵衛、上越後之内菟戸ニ罷在候、九郎兵衛兄も

菟戸内匠と申候、御館御一乱之時、九郎兵衛惣領ニ六郎次郎卜十四才ニ

罷成ヲ召連、九郎兵衛ニも御館方ニ罷成候得と申置、留守ニ罷出候得共、

九郎兵衛 宗心様江御奉公仕候、六郎次郎城中ニ而疫病煩申ニ付、

城外江捨置申由承取返申候、天正十年ニ内匠一跡九郎兵衛ニ被

下置候、其時拝領仕候御朱印于今所持仕候、其後六郎次郎

家督仕、高麗江も御供仕候、会津米沢迄御供仕、御当地ニ而

無程死去仕候、六郎次郎実子九郎兵衛儀、慶長七年より御奉公仕、初

大坂御陣鞠子御寓江御急被成様ニと 上使御座候付、山城所江

御跡勢引纏急罷登様ニと御使者ニ被 仰付、御跡へ立帰申又

追付申、京都迄御供仕候、小越平左衛門、富取甚九郎、九郎兵衛三人、

其外其時御供相勤申者、両手ニ無御座候、御帰陣ニ罷成、右三

人ニ五拾石宛御加増被下置候、隆心様三手江初而御加増被下置

候時、貳百石ニ罷成、其已後御手明鉄炮五拾人御預ケ、三百石ニ被

成、其後御中之間年寄被仰付、御加増被下置五百石ニ被成候、

江戸御堀御普請石垣御普請ニ四度罷登候、寛永十三年、慶安

貳年兩度、公方様江御目見仕、呉服銀子拝領仕、会津御

勢遣之時も、二百五拾騎之先乗被仰付候、承応貳年相馬境論

之節、関原八左衛門卜両人被仰付、相勤申候、蓮心様御代、御馬廻

之宰配頭被仰付候、親九郎兵衛死去、跡式実子某三百石家督

被 仰付候、当 屋形様御代十人頭仕候、以上

河田五郎兵衛由緒

一、景勝様御代 二拙者祖父河田平左衛門儀、河田伊豆舎弟河田源之丞

実子ニ御座候、源之丞相果、平左衛門幼少ニ付、叔父河田伊豆養育

仕、取立、 景勝様江御奉公ニ出シ申候、

一、太閤様御代 二伏見御船入御普請為奉行、嶋倉孫左衛門、平林

蔵人、河田平左衛門、舟橋名兵衛、山田修理、右五人ニ被 仰付、越後より

会津江御移被成候時、仙道七郡之内田村郡之郡代、河田平左衛門、

跡部外記兩人ニ被 仰付、森山ニ被差置候、米沢江御移被成候時、

伊達信夫之郡代ニ平林蔵人被 仰付、福嶋ニ被差置砌、百姓共仙

台江逃散仕、伊達信夫荒所ニ罷成候付、右仙道之郡代在々所々ニ

被差置、百姓共召帰シ取立荒地開発仕候付、其村方之代官ニ被

仰付候、平林蔵人米沢之郡代被 仰付、此跡役河田平左衛門、跡部外記

兩人ニ被 仰付、福嶋ニ被指置候、河田平左衛門相果、実子九郎左衛門弐百

石安堵仕、三千石之御扱所、御足輕十人御預ケ被成、御軍役等は御馬廻

並ニ被 仰付、本多上野介殿流人之時最上江も御勢遣ニ罷立候

一、隆心様御代、亥之年之御上落ニも騎馬ニ而御供仕候、此以後御

代官持数多御座候を被召放五人ニ被成、八千石宛御預ケ被成候、其已後

福嶋御代官、川田九郎左衛門、栃本弥左衛門兩人ニ被 仰付候

一、蓮心様御代 二河田九郎左衛門隠居仕、跡式実子某 二弍百石被下、
其上八千石之御代官 二被 仰付、御足輕十人御預ケ被成候

一、当御屋形様御代 二罷参御馬廻 二罷在、十人頭 二而御奉公申上候、以上

林部金左衛門由緒

一、拙者先祖并親林部主馬、御奉公仕ル品々、名字之物惣領同姓右京

所より書上申通 二御座候 ▲隆心様御代、拙者儀御小姓之御奉公申上候

一、蓮心様御代 二大小姓並 二御奉公仕候内、親主馬隠居仕時分、家督

惣領八右衛門 二三百石被下置候、八右衛門儀は 隆心様御手水番仕候 二付、

新知弍百石被下置候を、八右衛門弟某 二則被下置、其砌中小姓 二被召

加、当 屋形様御代ニ罷成、御馬廻ニ罷在、十人頭ニ而御奉公仕申候、以上

大橋兵左衛門由緒

一、曾祖父大橋若狭、若名弥次郎、後与惣衛門と申候、其時分、

政景宗様江御奉公仕、其後 謙信様江被召遣、沼田之城江被遣、

以後柏葉鉢と申城ニ被差置、其砌証人奉行被 仰付候由伝承候、

高麗御陣之時、御供仕由申上候得共、大切之地ニ候間無用と被 仰

付、世悴兵衛門拾六才、名護屋迄罷登、 御目見仕、御帰陣之御供

申罷帰候、以後越後より会津江御移之節、信州従参事候砌、若狭

最上御陣ニ罷立討死仕候、若狭跡式実子兵左衛門ニ家督被

仰付、会津米沢江御供仕、大坂兩陣相勤申候、其後御手明鉄炮

五拾人被 仰付、宗心様御代、兵左衛門惣領平右衛門儀、御小姓二被召

仕、御遠行以後御馬廻被召加、隆心様御代御中之間へ御入被成、新

地百石拝領仕、後式百石被下置候、其時代祖父平左衛門隠居仕候節、

惣領平右衛門三百石二被成置、三拾人頭共二直二被 仰付候、其以後

福嶋之御郡代被 仰付候、某儀 蓮心様江御小姓二被召遣、平衛門

死去仕、跡式実子某百石安堵仕候、御遠行已後、御馬廻江御入被成

御奉公仕候、以上

山田八左衛門由緒

一、為景様御代、曾祖父本名聶飯地式部と申候、後山田修理二

罷成、景虎様御代迄古志郡三尾之地ニ被差置候

一、景勝様御代、御錯乱之節御忠信申上ニ付、其時之御感状并知行付之

御朱印ニ通于今拝持仕候、修理死去致、跡式祖父家督仕、則修理ニ

罷成候▲太閤公御代、伏見御舟入之御普請之時、為大奉行、嶋倉孫衛門、

平林蔵人、河田平左衛門、舟橋名兵衛、山田修理此五人ニ被仰付候、会津江

御移之時、高指之御城御普請奉行も仕候、米沢江御移被成候時、惣屋

敷相渡申候、江戸桜田御屋敷御請取、御普請奉行、楠川左京、山田

修理被仰付候、祖父修理死去仕、跡式実子右京ニ家督被

仰付、大坂両御陣相勤申候▲定勝様御代、親右京御使番廿人ニ被成

立初二被仰付候▲綱勝様御代ニ御中之間年寄ニ被仰付候後、築

川江御横目ニ被差置、御足輕十人御付被成候、其時之御黒印于今所持
仕候、親修理隱居仕、跡式実子某家督被 仰付、御馬廻江御返シ
被成候、御奉公相勤申候、以上

朝岡弥右衛門由緒

一、祖父朝岡助左衛門郡代被 仰付、本地五百石之内、貳百石次男弥右衛門ニ
被下置候、大小姓之御奉公仕候 ▲弥右衛門跡式、実子某貳百石無相違
拝領仕候 ▲先祖由緒品々は惣領家朝岡吉左衛門申上候、以上

今清水主税由緒

一、今清水越中嫡子今清水掃部、本名泉ニ御座候、泉彦六郎、泉

六郎次郎、同越中、後ニ今清水ニ改ル、掃部童名源花丸と申候、生国信州、水内之郡常岩、中条、東広郷知行仕申候、岩井備中同国

飯山之地ニ被差置刻、城下ニ居住可仕旨被 仰付、從其飯山ニ罷在候

從 謙信様之御書于今取持仕候 ▲今清水掃部嫡子今清水市衛門、

生国信州、会津御国替之時分式百石被下置候、大坂御陣之刻蒙

御勘気、其後 隆心様江兩度迄御目見申上候、知行安堵は不仕候

一、今清水市左衛門嫡子今清水少左衛門、初は大小姓並ニ被召遣、後ニ御馬廻

並ニ御奉公申上新地拝領仕候、其後 生善院様御守役被 仰付、

三百石被下置、江戸定詰仕候、 蓮心様某若輩之頃より御小姓並ニ

被召遣、御遠行已後御中之間江被召加、当 屋形様御代ニ御抱

守被召仕、新地五拾石被下置、其後御馬廻江被召出候、当年親少右衛門
隱居仕候付、跡式嫡子某百石被下置候、少右衛門ニ五人扶持隱居扶持
被下置候、已上

上野四郎左衛門由緒

一、上野九兵衛、天正六年御錯乱ニ猿毛之城を乗捕、城代志宮と申
者討取御忠信仕候、此時 景勝様御書拝領仕候、同九年ニ
越中金山為在番、須田相模守、黒金上野、岩井備中、菅名但馬、
楠川出雲、上野九兵衛被差遣候、此時御書拝領致于今持伝申候、
実子無之二付、宇津江九右衛門弟上野内膳聳名跡ニ罷成、御国
替、会津米沢迄御供仕候、実子上野四郎兵衛 隆心様御代ニ

御使番二被召仕候、蓮心様御代二三拾人頭被仰付候、無実子二付、河田九郎左衛門四男上野四郎左衛門聲名跡二仕候、同御代二御近習二被召遣候、御入部之上大小姓御奉公仕候、四郎兵衛跡式二罷成、御馬廻二御奉公申上候、已上

平岡吉右衛門由緒

一、景勝様御代先祖平岡隼人佐、於登岩相稼之段被為御感、御感状壱通于今所持仕候 ▲其後御醫役被仰付候節、知行被下置候、覺西浜之内月山分同分、苅羽郡之内浦分并頸城郡之内大藏宗瑞分、ノ三ヶ所被下置候、御朱印壱通所持仕候、其後方々御陣等無懈怠被召連候 ▲景勝様御遠行以後、法体

仕休齋と申候、実子無之二付而、跡式孫大蔵家督三百石被 仰付、

大蔵跡式実子庄三郎家督被 仰付、庄三郎実子無御座候間、五十

騎組之内登坂作衛門子名跡二被 仰付、平岡一跡相続仕候、以上

宇津江九右衛門由緒

一、某先祖宇津江九右衛門儀 景勝様御代二越後上田之庄坂戸之

城御一乱之砌、深沢和泉、栗林肥前同前二籠城仕、御忠信申上候付、

御感状拝領致候、某持伝候、其後御右筆二被 仰付、御近習二被召仕候

一、右之九右衛門、直子無御座候付、弟上野内膳世倅名跡二仕候、 景勝様

御代二大小姓二被召仕、其後御右筆被 仰付、御奉公申上候

一、右之清左衛門実子某、幼少ニ御座候ニ付而、赤見伊賀世倅主水ヲ

聲名跡ニ仕、隆心様御代ニ大小姓ニ被召仕候、其後御馬廻江

被召出、蓮心様御代小道具組被仰付、其已後三十人頭

仕、後町奉行被仰付候、実子無御座候付、某を名跡ニ仕候、大小姓

被召仕、其後御中之間ニ被召仕、御当代様ニ罷成、御馬廻江被

召出、御奉公仕候、以上

山岸庄助由緒

一、私祖父山岸右衛門儀、越後黒瀧之御城代ニ被仰付被差置候、

景勝様高麗御帰陣之刻、於半途病死仕候、実子忠兵衛幼稚

二而、上意ニは、其身代と云、場所と云、家来計ニ而幼稚之世倅

取立申儀如何と思召候間、深沢中務ニ名代被 仰付、後家をも

引添、右衛門世忰取立可申旨被 仰付候、内々様子御座候而、後家

女儀故手と身ニ而世忰召連引除罷在候を、母方之伯父同姓民部

養育仕、会津迄召連差置申時分、無程最上陣御座候、民部

年頃若輩ニは御座候得共、存ル旨御座候間、此度之真将被 仰付候は

相当之高名仕歟、不相叶仕合ニ御座候は遂討死、二ツ壺ツ之御用ニ

相立可申候、若存命ニ首尾を仕罷帰候は、親宮内先祖より高地被下置、

越後屋彦之城ニ被差置、数度之御用ニ相立申候得共、時之表裏を以

私家督少知行ニ被 仰付候間、本地被下置様ニと山城所迄申立

候得は、乍若輩先祖より忠信之筋目と云、神妙成申様ニ候間、

大役^ニ候得共真將被^レ 仰付候而本望^ニ存、御忠信仕罷歸候は右之

通御取立可被下置候段被^レ 仰付、罷立候処^ニ、十月朔日之御陣^ニ揚

際之砌、日頃之所存故大軍^ニ返シ合討死仕候、此節組之御足輕

小野塚名兵衛と申者深手負、其外も御足輕数多手負等御座候、

從傍輩中何も為存儀^ニ候、民部儀実子依無御座、跡式甥忠兵衛^ニ

被^レ 仰付、会津より御供仕米沢江罷越候、大坂両御陣^ニも罷立、

隆心様御代御加増拝領仕、弍百石^ニ罷成十人頭仕候、御四代御奉公

相勤隱居仕、直子某^ニ跡式被下置候、右衛門^一跡之儀は深沢相続

仕候付、先祖より所持仕候御書御感状、中務相伝申候得は拙者所持不仕候、

父方母方一名之儀は、右衛門重縁^ニ取組申付而、右之通^ニ御座候、已上、

小田切弥五左衛門子孫小田切藤四郎、安永年中

平米御蔵預り一件二付打首名字断絶

桃井弥惣左衛門由緒

一、曾祖父之親刑部、越後境富坂と申所手勢ニ而責落候処ニ、則

其地ニ被差置候、刑部実子右馬之丞家督仕、高麗御陣御供申、

名小屋ニ而死去仕候、跡式実子刑部右之地所無相違被 仰付候、越

後より会津へ御移之時、富坂之地より御供仕候、会津米沢江参事、

大坂両陣共ニ相勤申候 ▲定勝様御代御上落之時、騎馬ニ而御

供仕候、刑部実子無御座候付、甥千坂弥惣衛門養子ニ仕置候、

一、綱勝様御代刑部死去、跡式養子弥惣衛門弍百石無相違家督

被 仰付、後十人頭仕候、弥惣右衛門跡式実子某家督仕候、以上

小田切弥五左衛門

一、某祖父小田切安芸儀、会津先方者ニ御座候、然は御当家様

從越後会津江御移之上ニ五百石ニ而御奉仕、信夫五万石之御

仕置被 仰付、福嶋之城ニ被差置候、其砌正宗兩陣ニ籠城堅固

御忠信仕ル付、其時被下置候御感状于今所持仕候

一、三拾万石之御代ニ罷成、何も知行三ヶ一宛ニ罷成候得共、安芸儀

右之御忠節故、被為御感、本地五百石其俣ニ而被下置、其後瀬ノ上

村亡地之所開作仕、三百石則拝領、本地開共ニ八百石被下置、瀬之

上ニ罷在候、 隆心様御代亥ノ年之御上落ニ、安芸ニ御供之儀蒙

仰候処、歳寄申ニ付御訴詔申上、名代ニ内膳千石役ニ而御供仕、

御下迄無恙相勤申候処ニ、志駄修理御郡代ニ被 仰付、米沢御

仕置被致候ニ付、八百石知行六百石被召上、親内膳二百石ニ被 仰付、

五人並ニ御代官ニ被成候 ▲蓮心様御代ニ内膳信夫表御郡代

被 仰付、其後隱居仕、実子某ニ家督被 仰付、御馬廻ニ御奉

公仕候、已上

左近司七兵衛由緒

一、曾祖父左近司喜左衛門、天正之頃於御錯乱遂籠城ニ付而、吉田

美濃分と申所被下置候、右之御感状惣領左近司茂助所持仕候、

一、祖父助右衛門、慶長拾九大坂御陣無足ニ而召仕、老人召連御跡より罷立候付而、御

歸陣之上被為 御感、新知六拾石拝領仕候、弥御奉公道

嚴重ニ相勤申候 ▲定勝様御代、弍百石御加増被下置、十人頭仕、

其後 綱勝様御代三百石ニ被成、御使番被 仰付候、死去仕、跡式

実子庄兵衛弍百石家督被 仰付、庄兵衛跡式実子某五十石

家督被 仰付候、以上

林部右京由緒

一、拙者祖父林辺主馬、本族西方次郎右衛門三男ニ御座候、

定勝様御代、西方八右衛門と申時分、御中間江被召加、新知百石

被下置候、其後御使番廿人ニ御定候時分、其内ニ被 仰付、三百石ニ被成、

御使番相勤申候 ▲越後御譜代之内、林部美濃実子若松迄御

供仕罷越候、若松ニ而名字断絶仕候、美濃儀は祖父八右衛門為ニ

母方之伯父ニ御座候付而、林部名字為御取立と祖父八右衛門ニ被 仰

付候、右之美濃御奉公仕候儀は、若松二而名字断絶致候故、何二而も覺

無御座候 ▲林部名字被 仰付、以後福嶋御奉行国分左馬之助

跡役、祖父林部主馬五百石ニ被成置、福嶋江被遣候

一、蓮心様御代ニ福嶋奉行役は身代不肖ニ候故、以来大名組中より

被差遣候付而、奉行役御用捨被成、小国之御城江被 仰付、其後

小国より被召返、御中之間年寄ニ被 仰付候節、隱居仕、跡式一男

八右衛門ニ三百石被 仰付候、養父八右衛門儀 隆心様御代御小姓仕、

御手水番ニ被召仕、新地式百石拝領仕候、御遠行已後大小姓並ニ

被召仕候、当 屋形様御代ニ八右衛門儀御使番被 仰付候、死去仕、実子

無之付而、林部金左衛門次男某、叔父八右衛門聲名跡ニ被 仰付候、以上

草間六左衛門由緒

一、景勝様御代御錯乱之節、某曾祖父草間庄左衛門忠信仕候

付、赤川新兵衛分、五十嵐式部分被下置候、御朱印于今拝持仕候、

其後度々ノ御陣嚴重ニ相勤申、高麗御陣ニも御供仕候

一、從越後会津米沢迄御供仕候、御当地ニ而無程死去仕、跡式実子祖

父六左衛門家督被 仰付、大坂兩御陣相勤申候

一、定勝様御代、亥之年之御上落之節、京都迄御宿割被 仰付候、

綱勝様御代ニ死去仕、実子庄左衛門ニ跡式式百石被下置候、其後御

使番ニ被召加、三百石被下置候、死去跡式実子某家督仕候、已上

築地彦太夫由緒

一、定勝様御代、祖父築地彦太夫隱居仕、嫡子民部二百石、二男

親築地五兵衛二六拾六石五斗五升被下置、綱勝様御代二御加増

被下置、貳百石二被成置十人頭仕候、祖父彦太夫隱居仕候、以後先祖

二而拝領仕ル御書之内、七通我等親五兵衛二讓置申候、于今拝持仕候、

親五兵衛当春死去、跡式某家督被 仰付候、已上

蓼沼利兵衛由緒

一、実父半左衛門儀、本名池上二而御座候、定勝様御幼少之時分、御

歩行之御奉公二罷出候時、母方之名字蓼沼を名乗御奉公二罷

出候、旅御作事並江被召遣、其後新地五拾石拝領仕、御馬廻江被

召加、其後貳百石二被成置候、

一、綱勝様御代 二三百石 二被成置、御手明鉄炮五十人御預々被成候、
親半右衛門跡式実子某家督被 仰付候、以上

諸越惣兵衛由緒

一、謙信様御代祖父諸越彦七郎、於越後小黒村之谷と申所

知行 二被下置、則居住仕候、証文于今所持仕候、新発田其外方々

御陣等嚴重 二相勤、高麗御陣御供仕候、越後会津米沢迄御

供申、無程死去仕、跡式男子無御座候付而、小黒式部嫡子外記

聲名跡 二罷成、家督被 仰付候、 定勝様御代御加増式百石 二

被成置、御上落之御供騎馬 二而相勤、外記跡式実子某 二家督被

山田庄衛門跡六郎左衛門、右跡庄衛門代、宝曆三

七月九日乱心ニて妻を切殺、其身自害致候故

名字断絶ニ被 仰付候、此庄右衛門ハ実村山七郎兵衛

三男ニて男式人女子一人有候

此山田庄左衛門男子式人女子壹人在りト付札在り、

男子式人之内壹人出家致、文政年中林泉寺

ニ職被 仰付候節、村山源六四男以八郎御手明江

被召出、其後猪苗代組江被召入候、今之山田八郎之也

一、仰付候、以上

山田庄左衛門由緒

一、曾祖父本族大石彦右衛門と申候、直峰と申城ニ被差置候、山田

帶刀ト申人相果、実子無之ニ付而山田一跡大石ニ下置、夫より山田

彦右衛門と申候、同城ニ罷在候、庄田彦六兄弟御館方ニ罷成候処ニ、庄田

兄弟討取春日山江御忠信申上候、依之上郷之内鷹分、田中助兵衛分、

御料所之内平井分被下置候、御朱印一通御書一通ノ式通于今

所持仕候、山田彦右衛門無程相果、跡式実子山田与五郎ニ無相違被

仰付候、翌年正月為御年頭御太刀一腰献上仕候時、御内書

尅通于今所持仕候、天正七年御錯乱之節、頭尅ツ討取御感状

壹通拝持仕候 ▲高津と申城は御館方ニ御座候を、春日山より

御責被落候時分、走廻御忠信仕候 ▲右之山田与五郎、越中魚津ノ

城ニ而討死仕候、跡式実子依無之、彦右衛門ニ家督無相違被 仰付候、

其後越後より会津米沢迄御供仕、大坂御陣嚴重ニ相勤、無程

死去仕、跡式実子彦右衛門安堵仕候、 隆心様御代ニ加増仕忒百

石ニ被成、十人頭仕相果、実子依無之、山岸忠兵衛次男伊之助妹ニ

取合名跡相続、御奉公仕候、以上

鈴木六右衛門由緒

一、先祖鈴木玄蕃、越後より代々御馬廻ニ御奉公仕候、從越後会津

米沢迄御供仕、無程相果、玄蕃実子依無之、曾根弥左衛門弟ニ

鈴木一跡被 仰付候、鈴木市左衛門某祖父ニ御座候、大坂両御陣相勤

申候、市左衛門跡式、実子善兵衛家督被 仰付候、善兵衛跡式、実

子某家督被 仰付、只今御奉公申上候、已上、

佐野清左衛門由緒

一、景勝様御代、於越後八騎箆持之城ニ被差置候、御錯乱之砌、敵

数多討捕御忠節仕ル付、御褒美之御書所持仕候、同心之内西村

隼人佐、同五郎右衛門、近藤甕次郎右衛門、此者共相稼候、御書在右之

巷大切之地ニ御座候間、其後取上仕候处、蓼沼藤七郎被遣候、兩人江

被下置御書式通所持仕候、佐野清左衛門実子善蔵、此子弥次郎

迄無相違跡式被 仰付候 ▲景勝様御代ニ弥次郎御近習ニ

御奉公申上刻、傍輩中二而討果、実子無御座候付而久々名字

絶罷在候処二、隆心様御代二御訴詔申上、佐野清左衛門孫二御

座候間、瀧口次郎右衛門子二佐野名字被仰付、御馬廻江被召加、

祖父より四代某迄御奉公申上候、右前々之御書拾壹通于今拝

持仕候、已上

秋山三郎兵衛由緒

一、景勝様御代、越後之内落ル水卜申所之御城二、秋山式部被差

置候時、天正六年之頃被下置候御書御朱印三通所持仕候、其後

糸魚川之城江被遣候時、右之式部、秋山伊賀二被成被差置候節、

天正十壹年度々之御書御証判九ツ于今所持仕候、内式通伊賀

次男秋山孫衛門所ニ御座候、会津江御国替被成候時、知行千石被下置、二本松之城ニ被指置候、石栗子孫覺申候、

一、米沢江御移之時、萩生村、鴨生田村、俎柳村合三百弍拾石九斗

六升九合被下置候時、慶長六年也、平林藏人印判于今御座候

一、伊賀儀米沢江御移之年、京都海上と申所御普請奉行、大瀧

新五郎、秋山伊賀兩人ニ被仰付、足輕五拾人宛御預被成処ニ、御

普請御急ニ御座候ニ付、夜普請被仰付候、足輕共夜扶持

被下置候処ニ御訴詔仕候間、山城所へ取次仕候得は、御勘氣ニ被

仰付候、無程被召出、伊賀実子五郎兵衛ニ三百石被下置、景勝様

御代より定勝様御代迄三十人頭被仰付、死去仕候、跡式孫某

五十石家督被 仰付候、已上

大瀧九左衛門由緒

一、曾祖父大瀧宮内左衛門、後土佐と申候、元龜之頃より天正八年迄、

武田信玄公、同勝頼公御代迄甲州家ニ罷在候、信州之内大瀧と

申所ニ罷在候 ▲景勝様天正十年ニ信州表江御出馬之節、御

目見仕、御帰陣之砌越後江被召連、信州之知行分諸役御

免許之御朱印于今拝持仕候、天正十年八月、最前より弥厲軍

功候と被為御感、為御加増越後之内菅村被下置候御証判

共ニ式通于今拝持仕候、右之通御当家様江御奉公申上、越後より

会津迄御供仕、無程死去致、土佐跡式実子新五郎千五拾石

無相違被下置、米沢江御移之年三百三拾石ニ罷成、其頃京都海

上之御普請奉行、秋山伊賀、大瀧新五郎兩人ニ御足輕五拾人宛

御預ケ被仰付処ニ、御急ニ付夜普請被 仰付候、御足輕共御訴

訟仕ル間取次仕候得は、御勘氣ニ被 仰付候、御勘氣之内死去仕、

其後某親孫右衛門被召出、五拾石被下置候、大坂両御陣相勤申候、

孫右衛門跡式実子某安堵仕候、已上、

本間蔵右衛門由緒

一、祖父本間蔵右衛門跡式、子主水家督仕候、主水次男某

定勝様御代五十石拝領仕、御馬廻之御奉公仕候、以上

小倉半兵衛由緒

一、曾祖父小倉伊勢次男半兵衛、新地二百石致拝領候、

景勝様新発田御出馬之刻、伊勢ニ被下置候御感状一通所

持仕候、相残ル数通有之候御書御感状、小倉方兵衛所持仕候

一、半兵衛実子無御座候ニ付而、朝岡助左衛門三男甚助養子ニ致候、

其後半兵衛ニ罷成候、御領所御役儀被 仰付、其後死去仕、嫡子

甚助ニ家督被 仰付、無程死去仕、実子無之付而、弟某ニ家

督被 仰付候、已上

曾根逸兵衛由緒

一、祖父曾根弥左衛門嫡子大膳、 定勝様御部屋住之時より御步行

小姓ニ被召仕候後、祐筆役被 仰付、新知百石被下置候、其後

二百石二被 仰付、御中之間ニ召仕御番頭仕候、祖父弥左衛門家

督之儀は、右之大膳弟弥左衛門二被 仰付候、大膳死去仕、実子

伊折二百石被下置候処、無程死去仕申ニ付而、大膳弟弥左衛門次男

某二家督被 仰付、御奉公申上候、先祖之儀は同名主馬所より

委細可申上候、已上

小黒権十郎由緒

一、祖父小黒式部三男盛之助、 隆心様御代ニ御小姓之御奉公

仕、新知五十石被下置、無程死去致候、実子無之付而、弟権左衛門ニ

跡式被 仰付、権左衛門跡式実子某家督被 仰付候、祖父式部

御忠節仕拝領致候御朱印之儀は、旅御作事衆之内惣領小黒

伝左衛門所ニ拝持仕候間、書上申ニ及不申候、以上

戸沢角兵衛由緒

一、祖父戸沢縫殿之助ニ男角右衛門儀、隆心様御人之御歳より

御奉公仕、新知五十石被下置候、其後二百石ニ被成置、死去仕、跡式

一男角右衛門ニ百石家督被仰付、四年過二百石被下置候、無程死

去仕、跡式実子無之付而、弟某五十石家督被仰付候、先祖

委儀は惣領戸沢権左衛門可申上候、已上

高山金兵衛由緒

一、祖父高山弥左衛門、知行百石被下置、隆心様御代ニ御膳部頭仕候、

蓮心様御代ニ御馬廻江被召加候、其後弥左衛門死去、嫡子与惣衛門ニ

繼目五十石被下置、則御馬廻ニ被 仰付候、御当代ニ与惣衛門隱居
仕、実子無御座候付而、五十騎組之内今泉治部次男某家督被
仰付候、已上

片山久之丞由緒

一、景勝様御代より祖父片山惣左衛門御譜代ニ罷成候処ニ、御膳部江
被召加、越後より会津米沢迄御供仕候、祖父惣左衛門、実子無御座候
付而、御馬廻之内鰐淵忠右衛門弟十左衛門と申候を名跡ニ相定、家
督被 仰付候、 定勝様御遠行已後、根本御馬廻ニ御座候と
被 聞召上、御馬廻江御返シ被成候、親十左衛門隱居仕、某家督被
仰付、御当代様迄御二代御奉公仕候、已上

山田半七由緒

一、綱勝様御代、山田修理次男拙者大小姓並ニ被召仕候、御番頭

被 仰付、其後御馬廻江御入御奉公仕候、修理先祖之儀は、同姓

八左衛門書上申通ニ御座候、已上

大瀧角右衛門由緒

一、祖父大瀧新五郎次男与右衛門、定勝様御代竹俣美作御

奉行之時、御取成を以、親与右衛門新扶持御切米被下置候、御馬廻江被

召加御奉公仕、江戸御城御普請之時、小奉行ニ被 仰付、罷登相勤

申候、与右衛門跡式実子某家督被 仰付、先祖委儀は惣領

大瀧九左衛門所より可申上候、已上

朝岡次郎右衛門由緒

一、祖父朝岡弥右衛門三男源左衛門、若輩之時分御馬廻新小姓之御
扶持被下置候、其後山城小姓並ニ奉公仕、大坂兩御陣ニ供仕候、
定勝様御代ニ御歩行五十人頭ニ被 仰付、当 屋形様御代ニ罷成、
御馬廻江被召加、源左衛門死去仕、跡式実子某家督被 仰仕候、
先祖委儀は朝岡吉左衛門所より書上可申候、已上

宮嶋勘兵衛由緒

一、曾祖父宮嶋平作儀、根本甲州武田信玄公江御奉公仕候、同勝頼公
御代ニ信州之内飯山之地ニ同心五十人引回罷在候、勝頼公之御判
ニ通于今所持仕候、勝頼公没落已後、御当家様江伺公仕、少知行

被 下置、平作死去仕、跡式実子李斎家督致、岩井備中同心ニ被

仰付候所ニ、大坂御陣之時分、李斎知行被召上、以後被召出三人扶持ニ

七石被下置、無役ニ被差置候、李斎跡式林部主膳次男半右衛門、伯父

松齐名跡ニ罷成候、御馬廻江被召加御奉公仕候、親半右衛門跡式実

子某家督被 仰付候、以上

菫戸新左衛門由緒

一、祖父菫戸六郎次郎次男与兵衛、無足ニ而罷在候、定勝様御代五人

扶持被下置、御馬廻江御入被成候、名跡無之ニ付而、与兵衛弟菫戸所左衛門

子某、伯父与兵衛跡式家督被 仰付候、先祖委儀は惣領菫戸

又五郎子孫何れ頃御呵ニ相成候哉、今は
座候、天保年中断絶ニ相成候、竹俣与吉は
知行者也、此又五郎は御扶持取也、然は竹俣
与吉先祖とは相見得不申候、未ニ在り、

本来は右頁の竹俣家の所にあつたものか。

撮影時は剥がれており、挟まったままの状態で撮影。

九郎兵衛所より書上可申候、已上

竹俣又五郎由緒

一、景勝様御代、祖父竹俣藤三郎御近習之御奉公仕、死去致、実

子与吉ニ家督被 仰付、御中之間之御奉公被 仰付候、右之与吉

男子無御座候付而、同名善五郎子某聳名跡ニ罷成、御馬廻江被召

加、御奉公仕候、先祖委儀は竹俣七郎左衛門所より書上可申候、已上

渡部清左衛門由緒

一、綱勝様御代、御貝役被成立候ニ付而、荏戸九郎兵衛宰配頭之時分吟

味仕、渡部惣右衛門三男某被 仰付、御扶持切米共ニ拜領仕、御馬

廻並ニ御奉公相勤候、以上

小山田甚五兵衛由緒

一、拙者親小山田多門儀、大猷院様御代ニ、定勝様江御預ケ

被成、数年罷在候内、親死去仕申候、当公方様御代ニ拙者儀御

赦免被仰付、綱勝様御代ニ御当家江被下置候付而、被召抱

知行三百石拝領仕候而、御馬廻並之御奉公仕罷在候、以上

浅羽半之丞由緒

一、拙者儀大猷院様御代ニ定勝様江御預ケニ罷成、数年罷

在候処ニ、当公方様御代ニ御預ケ御赦免ニ被仰付、則綱勝様

御代ニ御当家江被下置候付而、被召抱知行三百石拝領仕、御馬廻並之御奉公仕罷在候、已上

浅羽右京由緒

一、拙者儀、安田治部次男ニ御座候、右は大小姓之御奉公仕罷在候処、八ヶ年已前ニ浅羽半之丞聲名跡ニ被仰付、御馬廻並ニ罷成、右之御扶持拝領仕罷在候、半之丞家督相続仕迄はニ之御丸御番相勤御奉公仕候、已上 〆四十五人

佐田舎人由緒

一、官領様越後江御移之節、曾祖父佐田六郎左衛門御供仕罷越之所、蒲沢、わんなふ、村松三ヶ所之地被下置被召仕、其身年寄申故

無程隱居仕候 ▲六郎左衛門嫡子佐田惣左衛門ニ跡式無相違被下

置、御奉公申上処、 謙信様関東御出馬之御供仕、厩橋ニ而敵

陣ニ馬を入討死仕候 ▲惣左衛門嫡子佐田舎人ニ右三ヶ所之地無相

違被下置候、其身幼少ニ御座候付而召仕、嶋崎甚助と申者ニ御預ケ

被成、甚助甲代仕申候、成人之上 謙信様、景勝様方々御出

陣之御供仕、米沢江御打入之上加増拝領仕、大坂両御陣ニも騎

馬之御供申上候、其後 定勝様御代ニ三十人頭被 仰付、其後高

畠之城主被 仰付、高畠ニ而病死仕候、実子拙者ニ家督被 仰

付、御馬廻江被召返、 定勝様御代より御奉公申上候、 綱勝様御

代ニ加増拝領仕、 御当代様ニ御槍御足輕組五十人被 仰付、其

後三十人頭被 仰付、御奉公申上候、已上

今泉与五兵衛由緒

一、越後今泉ことんニ入道、板木山ニ罷在候、越中御陣於千段野ニ

討死仕候、其子能登ニ家督被 仰付、同所板木山ニ罷在候、其後

相水之地ニ差置候、其子左馬之丞板木山ニ而蒙御勘気、其後御

赦免ニ御座候得共、本知之儀安堵不仕候、慶長六年会津江

御国替之節御供仕罷越候 ▲最上御陣ニ今泉左馬之丞、後ニ

外兵衛と申候、小黑将監と右両人ニ猪苗代組宰配頭共ニ御預ケ被成

罷越候而、討死仕候 ▲定勝様御部屋住ニ被成御座候時より、御奉公ニ

罷出、元和九年御上落之御供仕罷帰五十石拝領仕、御中之間

御奉公仕、其後御馬廻江被召出二百石被下置、承応二年二三百石

被下置、御鉄炮御足輕組五十人御預ケ、只今迄六十年御奉公相

勤申候、以上

河田市郎右衛門由緒

一、拙者祖父志賀新兵衛儀は御馬廻ニ罷在候而、越後会津迄御供

仕候、年罷寄ニ付而隠居仕、跡式私親志賀八左衛門ニ被下置、此方江

御移之時分、知方二百石被下置、大坂両御陣ニ馬上ニ而御軍役仕候

一、名字河田ニ罷成候、子細は河田豊前ために右之志賀新兵衛儀は

妹聳ニ御座候、私親八左衛門儀、豊前従弟ニ御座候、越中之内松

蔵之城ニ被差置候時分、信長方より佐々内蔵之助差向申候節、豊前

手走ニ証人内蔵之助方江差越申候ニ、実子無御座候ニ付而、従弟之

八左衛門を子ニ仕、河田と名乗相渡申候由承伝申候、隆心様

江戸御定詰之時分、拙者親御番将ニ罷登、千坂安芸所迄申

様は、拙者弟先志賀九郎衛門知行拝領仕、御馬廻ニ被召加候、志賀

名字名乗申付而、右河田之子細を申、安芸取成を以河田ニ

罷加、御祝儀差上、御目見仕罷下申候、私親相果申候時分ニ、

二百石之内五十石被下置、一、三年御奉公仕、私之儀十五歳ニ而御小姓ニ

被召仕、一兩年過加増被下置御奉公仕候、然は会津御勢遣之

翌年百石之加増被下置、二百石ニ而御奉公申上候事

一、蓮心様御代ニ御使番ニ被召加、御当代様迄十四年相勤、四年

已前二御足輕鉄炮組五十人被 仰付罷在候、毎々之儀委細は幼少
故承伝不申候、以上

宇佐美勘助由緒

一、祖父宇佐美藤左衛門、甲州信玄家来馬場美濃名跡相続申

処、甲州乱以後、直江山城引立を以、本名宇佐美藤右衛門二被成、

御奉公仕由承伝候、其後 隆心様御幼少之御時分、御付被成

御奉公仕候由承伝候、其後子次兵衛儀も 隆心様江御近習之

御奉公仕、其後大小姓組二被 仰付、以後御馬廻江被召加、御奉公相

勤申候、次兵衛儀男子無御座二付而、私儀土肥伝右衛門弟二御座候を、

宇佐美聲名跡二罷成候而、三十年御奉公相勤申候、已上

益田与右衛門由緒

一、祖父益田九助、越後二而四百石御知行被下置候而、軍郡法之御役仕候、

九助儀、女子一人御座候付而、益田民部、遠江之種村と申者

次男二御座候、九助所江聲名跡二罷越候、其後男子甚衛門誕生

仕二付而、右之民部各別二御奉公仕、定勝様軍法之御師匠仕、

二百石御知行被下置、御近所御奉公仕候、民部実子無御座二付而、御

馬廻之内戸狩左門三男二御座候、十四之歳養子二罷成、十五之歳跡

目被 仰付、十八之歳御馬廻江被召加、二十一之歳会津御勢遣騎

馬二而初而他国懸之御軍役仕候、当年迄三十八年御奉公仕候、以上

若林作兵衛由緒

一、曾祖父父若林右近、於越州御馬廻ニ被召仕、先年御館御取合ニ

嫡子從類共迄為□人被召取候付而、次男喜六幼少ニ御座候故隱

置申候、夫をも相捨春日山江在詰御奉公申上候付而、御感狀被下置

于今所持申候、其後新發田最前之御出馬之時分、於御眼前、天正

十年九月二日八幡口と申処ニ而討死仕候、就夫曾祖父跡式右之

喜六ニ被 仰付候、若輩故先祖之様子委不存候申伝候

一、祖父九郎左衛門御奉公之儀は、新發田落城之時、実城橋を引申

処ニ、堀を越諸勢之先掛仕ル、其節ニは九郎左衛門十八才ニ候、証人

鉄孫左衛門存候、其後仙北鍋倉之地御責被成候時分供奉仕、堀堀

最前ニ越働申候、証人小倉民部存候、又奥御陣菅名へ御馬被為

寄候時、二重之堀越本丸江人先ニ押込働申候、証人富所隼人

其外傍輩中存候、大坂両御陣不及申、右数度相働之処、先年

祖父代ニ御尋ニ付、元和二年ニ証人を以書付差上申候、祖父跡式

之儀、二百石次男源兵衛ニ被 仰付候 ▲親作兵衛儀、九郎左衛門

嫡子ニ御座候、大坂先之御陣立之時、無足ニ而罷立申ニ付、御帰陣之上

被為 御感新知被下置、其後加増被下置二百石ニ被 仰付候、

親相果申、実子拙者ニ家督被 仰付、 定勝様御代より御

奉公申上、 綱勝様御代ニ加増被下置、 只今迄四十七年御奉公

之儀相勤申候、以上

歌川加右衛門由緒

一、祖父歌川新左衛門、本来関東かなすきと申所之城ニ居申候、

氏直江出仕申候、其後 謙信様関東御手ニ入申、越後江御

供仕参候、 謙信様御遠行被遊、 宗心様御代ニ罷成候而、

長尾小四郎頼景と申、 宗心様甥子様ニ御座候、越中四郡被

進候時分、牛喜と申者と歌川両人頼景様江御添被成、越中

四郡之奉行被 仰付砌、長尾之御幕之御紋被下置候而、

越中江被遣候由申伝候、頼景御逆心故なきものに被為成候故、

越後江罷帰候而、蔵王郡、石地、名立三ヶ所之御知行被下置、槍

十丁之御軍役仕罷在候、其後年寄申付而隠居仕候

一、祖父新左衛門女子一人持申ニ付而、本田岩見次男ニ而御座候右近ヲ

村山七右衛門子孫村山善左衛門、天保年中
与板杭寺沢与捻次御蔵預い一件ニ付改易
其後猪苗代組江被召出候

聲名跡ニ仕候、右之右近、高麗御陣と奥州御陣御供申、若

松より米沢江參候而、大坂両御陣ニ罷登候、其後西方次郎右衛門預り

申、八百人之御足輕之内二十人宛山城被申付候、其後 隆心様

御代ニ御足輕五十人ニ相定、御足輕組被 仰付候、其後三十人頭

被 仰付、 播磨様御代、年寄申ニ付而隠居仕候事

一、右近跡式百石、拙者被下置、其後本郷 御前様御守ニ被

仰付、加増式百石被下置、四百石ニ罷成候而本郷江被遣候、已上

村山七右衛門由緒

一、曾祖父村山善左衛門、後安芸と申候、 謙信様御代ニ本領之

外、黒川、鑓百挺、手明拾人、馬上拾騎之跡被下置候、景勝様御

代、黒川伊達正宗を頼打入申候を、安芸打ちらし申付而かいつけ

と申所二城を構、正宗馬を入申候、其後城之外張為開不申候二

付、本庄を頼聳二罷成、屋形様江御侘申上候付、村山二其地を

本庄二渡、可罷越由被 仰付候間、則相渡罷帰、三条へ向、卷和納二

城を仕立罷在候処、左近司伝兵衛為御使、春日山を守護可申

由被 仰下候間、人数召連春日山二有詰御奉公申上候、於鮫尾之

城二も御館三郎様御志るし村山手江討取、勸賞二上条 一跡

被下置候、其後卷和納之城江罷越候処、能登より長与一、関根と

申者差越、普代之者引付三条と云合、黒瀧之城乗取申処ヲ、

其夜之内ニかへり責ニ取返、与一普代之者共悉刎首、此度御馬

不被出候は、米山より東へ御手を被延候儀、罷成間敷段申上候得とも、

村山ニも御氣遣被遊候付而、子共弑人召連罷越、証人差上御供仕、泊より

三拾里、猿登馬場と申所を越、舟引地藏堂之渡りを越、福田迄

押詰候故、其夜敵七ツ之城を明、皆三条之城江逃入申ニ付而、蔵王

堂之城をも明渡申候、其後栃尾江御馬被為寄、下田へ御勢遣、栃

尾より蓮沼と申者を差置候処、服部と申者討取忠信仕候、其より

栖吉江御馬被為寄、長嶋清右衛門御退治被成、三条之大崎江焼払、

其より本庄守口江御出張、町廻輪焼払御馬被寄付、本庄清七郎

不叶会津江退散仕候、三条之儀は、椎名、神保心替り仕、諸

廻輪焼払御忠信申上ニ付而、残党悉降参、金丸切腹仕候、村山

忠信ニ而奥郡一遍仕候御書御感状拾四通被下置、于今所持仕候、

其後 太閤様江御無事之御使被 仰付候ニも、大石播磨両

人ニ而御無事相調御上洛被遊候、其子孫五郎、後善左衛門と申候、

家督仕、若松御錯乱之時分も諸敵之中を罷登、伏見ニ而御

前様江御奉公相勤罷下申候、父七右衛門儀は、越中水橋山城

孫阿波守子ニ御座候、跡部新五左衛門養子ニ仕、村山聳名跡ニ

罷成、 定勝様御代御加増被下置哉、百石ニ而相果申候、実子

拙者儀跡式相続、承応元年より三十ヶ年ニ及御奉公申上候、以上

富永平太夫由緒

一、謙信様越後ニ被成御座候時は、先祖富永備中儀と黒金安芸

右兩人、佐渡ニ被差置候由申伝候 ▲備中越後ニ而鎗廿挺程之

役儀仕候由承伝申候 ▲備中相果実子家督仕、富永治部卜

申候、其後男子無御座故、御馬廻之内上野内膳弟名跡ニ

罷成、富永四郎左衛門と申候、会津より此地江参、知行六拾石被下

置候、四郎左衛門男子無御座ニ付而、三侯将監弟聳名跡ニ仕、富永

治部と申候、隆心様御代ニ加増被下置、貳百石ニ罷成候、治部相

果申、実子拙者ニ家督被 仰付、綱勝様御代ニ加増被下

置、貳百石ニ罷成申候、私御奉公、当年迄三拾九年相勤申候、御馬

廻之内富永二名御座候、私惣領家之由段々申伝候、已上

小越平左衛門由緒

一、曾祖父小越平左衛門儀、役鎧十六挺之御軍役仕候、長尾紀伊、

小越平左衛門兩人ニ古志之軍法被 仰付、委は同名平兵衛所より

可申上候 ▲小越平左衛門三男小越与六兵衛儀、私祖父ニ御座候、

御奉公之儀は、越後能登越中ニ而はせの働高名仕候、高

麗御陣之御供相勤、其後隱居仕候、嫡子平左衛門家督仕、大坂

両御陣御軍役相勤、御帰陣之上加増被下置、寛永十三年信

夫江被遣、其後親平左衛門隱居仕候、跡式私ニ貳百石被下置ニ付、

蓮心様御遠行迄福島ニ罷在候、私御奉公之儀は当年迄廿八年

相勤申候、已上

安江小右衛門由緒

一、曾祖父安江五郎左衛門已前之儀は、証文なき物語、不分明品々不申

上候

信夫奉行仕ル生国越後

五郎左衛門嫡子生国同

権兵衛嫡子生所信夫

安江五郎左衛門

同権兵衛

同権兵衛

林与惣兵衛由緒

一、先祖林左近と申者、関東之佐野より罷出申候、謙信様

御時代越後ニ而、卅騎衆と申身立ニ而御奉公申上候、左近儀は私

養父三郎左衛門親ニ御座候、右之三郎左衛門儀、男子無御座候間、拙者儀

与板組之内三瓶大蔵三男ニ御座候を、聲名跡ニ名字相続申候

一、宗心様御代ニ左近儀、於米沢無役弍百石知行被下置、御奉公

仕候、其後隆心様御代、寛永六年ニ左近死去仕候、即本知弍百石

三郎左衛門ニ被下置、其後 蓮心様御代、正保三年之春百挺御

手明鉄炮組五拾丁被 仰付、百石之加増被下置三百石ニ罷成

申候、後三郎左衛門病人ニ罷成、寛文元年之春隠居仕申ニ付而、弍

百石被召上、私家督百石ニ被 仰付候 ▲隆心様江私十一歳

之時、寛永十九年より御近習ニ御奉公申上候、 蓮心様御代ニは

大小姓組江被召加、後ニ寛文弍年之冬中小姓ニ被 仰付候、

蓮心様遠行已後、御馬廻江被召加候、已上

石口善兵衛由緒

一、拙者四代以前、石口勘解由入道と申候、越後藤井ニ罷在候、

断絶

被仰

大沼

楠川

勘解由入道、惣領ヲ采女と申候、一男ニ而御座候、内匠三男兵部、

四男大膳と申候、右采女は某曾祖父ニ御座候、采女知行所

柏崎之内久米、別又両所ニ持伝申候、謙信様御代、北条安芸

被差添、関東厩橋之地ニ罷在候、然処天正六年 謙信様

御遠行ニ付而越後江罷帰、天正十年信長より越後江御勢遣之刻、

兄弟四人、供馬上七騎、都合拾壹騎、越中大津城江被差遣、六月

三日討死候事 ▲采女惣領ヲ監物と申候、拙者祖父ニ御座候、

越後より御国替之節、会津江御供仕、夫より米沢江御供仕、五十石ニ而

御奉公仕候、慶長十七年九月病死仕候ニ而、亡父大膳ニ監物跡

式五十石被下置、大坂御陣等ニも罷立、其後 隆心様御代、寛永十

七年二月御加増被下置、弐百石ニ罷成五拾九年御奉公仕、寛文九年

七月病死仕候、同年八月中拙者家督五拾石被 仰付候事

一、御先祖様御感状数通御座候得共、 隆心様御代上覽被遊

付而、三侯將監を以差上申候、其砌將監所ニ留置、大火事之時分

類火仕ニ付而、右之御感状將監御感状同前ニ火失仕候、焼残之分

宗心様御書御判形、近年三侯五郎右衛門見出、二、三通相返シ申候、

于今所持仕候、以上

楠川四郎兵衛由緒

一、曾祖父楠川左京、後に出雲ニ罷成候、生国野州楠川より罷出候

於関東 上杉御名字江御奉公申上候、 官領様越後江

御移被成候刻、供奉仕候而罷越候、永禄七年には輝虎様関東

佐野之地御出馬之刻、曾祖父左京、御先手仕相働申二付而

輝虎様御感状二月十七日二被下置、所持仕候、其後根智之城二被

差置 ▲天正六年御館御一乱之節、国中忽劇之处、抽忠信無

比類之段、御感状從 景勝様五月十六日二被下置候、于今所持仕候、

同年六月廿八日、御館於大場口御合戦之刻、頸討取申二付而御感

状被下置所持仕候、同八年三条之城主金鞠御対治之砌、春日山

御勢は矢沢江被遣、楠川出雲実城二被差置候处二、新発田因幡可

罷移之由二而城際迄押寄候处二、村山同心致打散申候、同九年越中

之国金山之城為在番、須田相模、黒金上野、岩井備中、菅名但馬、

楠川出雲、上野九兵衛被遣相勤申候、同十年新発田乱之内、西方二郎衛門、

楠川出雲兩人御手明之者仕配仕ニ付、七月十六日從其刻出雲

討死仕候、故実子弥六郎ニ家督被 仰付、後ニ左京ニ罷成候、文禄

元年高麗御陣御供仕候、其後会津江御供仕候

一、慶長五年最上陣江罷立候、同十九年大坂御陣之刻、深沢平右衛門、

楠川左京同役被 仰付、從家康公より諸家中江兵糧御

配当ニ付、下役人ニ秋山茂兵衛御付被成、兵糧請取申候、外ニ足輕

五拾人宛百人御預ケ被成候而相勤申候、其後御上洛ニも御供仕候

一、景勝様御代三十人頭初而被成立候ニ、左京ニも被 仰付候、

定勝様御代ニ御中之間年寄並ニ被召仕、五百石被下置、御歩行

組四拾五人御預被成申候、其節中務ニ罷成候、其後病死仕候、実子

無御座ニ付而、富所伯耆次男八郎右衛門聲名跡ニ仕所ニ、家督被

仰付三百石被下置候而、大小姓並ニ被召仕候、無程御使番被 仰付候、

綱勝様御代ニ三御上使ニ御付被成、其後小国之城主ニ被遣候、御

黒印之御条書被下置、所持仕候、拾弍年相勤、病氣故隠居仕候、

跡式之儀実子ニ而御座候拙者ニ被 仰付、御奉公申上候、以上

村田次郎右衛門由緒

一、謙信様より祖父村田次郎右衛門ニ被下置御書、于今所持仕候

一、曾祖父村田大隅、於越後雷之城主被 仰付、二ノ丸ニは祖父

次郎右衛門被指置候、同国之内菅名之城主菅名孫四郎、幼少ニ付而、菅名之城主ニ右之大隅被遣候、其節も次郎右衛門儀は二ノ丸ニ被指

置、於越後次郎右衛門儀、鎧七挺之御軍役仕候、会津ニ而御足輕御預ケ被成、最上江御勢遣ニ被遣候、米沢江御移之後迄御足輕頭仕候、男

子無御座候故、縁者之娘ニ申合聲名跡ニ仕候 ▲親久兵衛御

足輕頭仕、其後三十人頭被 仰付候而御奉公申上候、久兵衛相果、実

子拙者ニ家督被 仰付、当年迄御奉公仕候、以上

築地武左衛門由緒

一、越後築地之城主築地兵庫資忠、其子彦七郎忠基、後二

修理と申候、一定実様兇徒御退治之砌、忠功付而、永正四丁卯

年蒲原郡荒川保内下条分、為忠常賞力被下置候、御感状所持仕候、

此外数度走廻二付而御書三通被下置候 ▲絞竹庵様御書

三通所持仕候、諸所江相働申二付而如此候 ▲為景様御代、中条、

築地、於上田口、八条左衛門殿、石川、飯沼以下之逆徒千余人

打取、其外於水原之戦功、向鮎川之一戦方々相働付而、御書

御感状十通被下置候 ▲謙信様御代ニ修理入道死去仕、

実子弥七郎儀、後二修理資豊と申候、家督被 仰付、即築

地之城ニ被差置候、数度忠功仕候 ▲景勝様御代御館御錯乱

之砌、首数多打取御感状被下置、其後新発田一乱之時、度々

高名仕、御書御感状共二廿六通被下置、惣而四拾三通之御書

御感状、于今所持仕候、其後佐渡御陣、高麗御陣共二相勤、会津江

御移、慶長四年伊達正宗出張二付、築川之城主須田大炊之所へ為

加勢、築地資豊二同心三百人差添被遣候、大炊之頭同意之働相勤、

信夫之内長倉二罷在候、米沢江御移後鮎貝之城主中条与次

相果申付而、其跡江築地資豊城主二被遣、資豊相果申付、其子

彦太夫家督仕、御足輕頭被 仰付、大坂御陣等二も罷立申候

一、定勝様御代、御馬廻組之三十人頭被 仰付、其後二相果、実子民部

名跡相続、其後修理と申候 ▲綱勝様御代二修理御鑓御足

輕組五十人被 仰付候、拙者儀大石主馬二男、大小姓組之御奉

公仕申処、修理男子無御座ニ付而聲名跡ニ罷成、延宝弍年より御奉公申上候、以上

田中三左衛門由緒

一、尉大蔵代、先祖覚書仕候を以申上候、田中名字、儀昔時何方之
国より罷出候而御奉公仕候哉、五代已前之儀御座候得は覚不申候

一、私四代以前、尉田中式部と申候、彼者ハ謙信様御代より御奉

公仕候、御館陣之時分 景勝様江忠信申上ニ付而、川口村、和納津

拝領仕候、御判私持合仕候 ▲同式部儀、河井之城代被 仰付

居城仕、彼地より往還之舟御関所御免之御朱印持合仕候

一、同式部、天正十弍年老死仕候、其子二人御座候、惣領は大蔵と申候、

式部跡式無相違被下置、河井之地ニ居城仕、長柄拾五挺鉄炮五挺小旗弍本之役儀相勤申候、証文持合仕候、弟八田中八郎次郎と申候、彼者幼少より 謙信様被召仕、景勝様御代新知被下

置、各別之御奉公相勤候 ▲天正十八年関東御陣之時、大蔵事

前之年佐渡御陣ニ而手負病氣与尔無之付而、弟八郎次郎陣

代被 仰付、御陣之御供仕候、其節八王子之城御当家ニ而御責

取被成候付而城番被差置、其刻八郎次郎ニ物頭被 仰付、騎馬之衆

三拾一人鑓鉄炮御預ケ、彼地ニ番頭相勤候、其節泉沢河内奉

行ニ而武数之帳面ニ物数御書添河内判形持合仕候

一、同大蔵右之手疵ニ而、同年之冬四拾余歳ニ而死去仕候、彼大蔵事、

大石播磨聳ニ而御座候、右之腹ニ三歳之男子御座候、幼少故伯父

八郎次郎ニ大蔵妻縁組被 仰付、世忤成人迄陣代仕筈之処ニ、

翌年右之男子死去仕候、同腹ニ文禄三年之冬、私尉大蔵誕生

仕候、親八郎次郎ハ翌年十月三十才歳ニ而病死仕候、大蔵ニ歳幼少

故、後家同前大石播磨ニ御預ケ置被成候 ▲御一乱ニ付而諸国より牢

人御集被成候、慶長四年之冬從加州長尾権四郎御呼被成、八郎次郎

後家権四郎妻ニ被 仰付、大石播磨聳ニ被成候、大蔵六歳之

時より権四郎養育被致、於米沢成人之後、御馬廻組相勤六十石之

地、御国移之時被下置、平林蔵人書出シ持合仕候 ▲尉大蔵鉄炮

組五拾人被 仰付、右之役儀相勤五拾九歳ニ而病死仕候

一、尉大蔵丞、承応元年十月朔日相果、同年十二月初親新右衛門

貳百石之地被下置、十人頭相勤、寛文九年之九月病死仕候、私事

同年十月下旬新右衛門跡式五拾石被下置、如此御奉公仕候、以上

山本伝之丞由緒

一、祖父山本右近、福島之奉行被 仰付、知行五百石被下置相勤候

処二、病死仕、実子次男民部ニ隆心様御代ニ五十石被下置、御

馬廻之御奉公仕候、蓮心様御代ニ貳百石被下置、後右近と

申候、寛文十一年十月六日ニ病死仕、実子私家督被 仰付、

五拾石被下置候、祖父右近より已前之儀ハ惣領家ニ御座候間、山本

次郎左衛門可申上候、以上

北村庄兵衛由緒

一、親太兵衛北村孫兵衛二男二御座候、隆心様江御近習之御

奉公仕候、須田左衛門名跡二被 仰付、百石被下置、御馬廻二而二、

三年御奉公仕候、然所二須田後家 一類述懷之御訴訟企仕候付、

一列不仕右之品々申上、須田名字差上申由言上仕候、其時本

名北村二被 仰付、無相違百石被下置、右之身立被 仰付、其

後会津御勢被遣候時分、騎馬之御軍役相勤申候、其後

蓮心様御代 二百石加増被下置候而弍百石二被 仰付候、同御代二

御中之間江被召加、御当代 二番頭被 仰付候、延宝元年 二私 二家

督五拾石被 仰付御奉公申上候、先之儀委は同姓孫兵衛

可申上候、已上

関仙右衛門由緒

一、曾祖父関越前、信玄公家中ニ罷在候時分、信州長沼之内

関之城ニ罷在候、即在所ニ御座候、其後信州没落ニ付、信濃本

取山ニ陣取罷在候処ニ、直江山城守所より本領無相違可被下置と申

付候故、御当家江属御手、景勝様御代ニ罷越砌、本領

無相違安堵之御朱印、于今駒沢所ニ持申候 ▲関越前病死

仕、実子右京ニ跡式被 仰付御軍役相勤死去仕候、実子

主膳ニ弍ツ少年跡式被 仰付、成生之後御奉公仕候而病死仕、其

子藤右衛門ニ跡式被 仰付、病人故隱居仕、拙者聳名跡ニ被

仰付候、拙者之儀須崎隱岐次男ニ御座候、当年迄御奉公廿六年

仕候、已上

嶋倉太兵衛由緒

一、謙信様越後ニ被成御座候時分、曾祖父嶋倉孫左衛門、能登

之甲城代ニ被差置候、 謙信様御遠行之刻、孫左衛門春日

山江可罷越旨 宗心様江申上候得共、大切之地ニ候間必無用ニ候由

上意ニ付、無是非留り、次之年春日山江罷越、三月十三日御命日ニ

御焼香仕、御供と申切腹仕候、男子式人持申候、惣領吉蔵ニ

右之跡式無相違被下置、孫左衛門ニ罷成、春日山江參御奉公仕、

其後黒金名字被 仰付候、次男太兵衛ニ嶋倉名字被

仰付本領之内被下置候、即御朱印于今所持仕候、大坂両御陣

御上洛御供仕御奉公申上候、 隆心様御代ニ祖父太兵衛相果

申、其子太兵衛と申御奉公仕、是も死去仕候、 蓮心様御代ニ

跡式私ニ被 仰付、于今御奉公仕申候、已上

北村茂助由緒

一、父北村茂助、越後古志之郡ニ罷在御奉公申上由承伝候、拙者

幼少之時親相果申ニ付、委儀は承伝不申候、前々之儀は

猶以存不申候、越国より会津米沢迄御供仕、大坂両御陣ニも

御供仕、其後加増被下置弍百石ニ而御馬廻組十人頭仕候、実子

私名跡相続、寛永十四年より四拾年余り御奉公申上候、已上

宇加地名兵衛由緒

一、私より三代已前、宇加地少右衛門死去仕、実子無之付而橋爪加右衛門弟

後家入仕、名字相続申候、同六右衛門ニも子持不申候故、右之

後家私従弟ニ而御座候間、拙者ヲ名跡ニ仕、寛永十九年より

御奉公申上候、拙者之儀西方次郎右衛門次男ニ御座候間、宇加地名

字由緒存不申候、以上

北村孫兵衛由緒

一、曾祖父北村孫兵衛、往昔何方之地ニ居申候哉不存候、天正

六年六月十一日、大場口御合戦ニ忠信仕候、景勝様御判形

于今所持仕候、同年極月朔日、直嶺之地ニ而忠信仕、景勝様御

朱印所持仕候、其身分限不存候、右之御書ニ水吉之内上倉

下総分被下置之由ニ御座候 ▲祖父孫兵衛御馬廻ニ而弍百石

被下置会津江御加勢之節、弍百石馬上ニ而参候、其後築川馬

上ニ被 仰付、三、四年罷在相果申ニ付、親孫左衛門ニ家督五十

石被下置、親相果、私十一才之時家督無相違五拾石被下置、

段々実子ニ而名字相続申候、已上

関利兵衛由緒

一、 関留之助跡式ニ、 芹沢彦左衛門次男私罷成候、 名字之由

緒、 同姓専右衛門委可申上候、 以上

庄田甚五右衛門由緒

一、 謙信様より先祖江被下置候御書四通、 于今所持候

一、 先祖惣左衛門、 於信州河中嶋御一戦之時、 馬を入候而討死仕申候事

一、 謙信様加州江御出陣之砌、 惣左衛門子庄田惣左衛門、 越中となミ

之郡之内柴野五郎左衛門城御責之時、 是も討死仕候事

一、 惣左衛門子右京、 越中太田之庄今泉之城主ニ被差置、 其地ニ而

是も討死仕候事 ▲右京子惣左衛門十八歳、 関東御陣ニ罷

立、 其後奥州御陣、 大坂両御陣御供仕御奉公申上、 其後惣左衛門

死去仕、惣領市兵衛跡式被 仰付候而、市兵衛相果、実子無御

座二付而、弟弥次兵衛二名跡被 仰付、御奉公仕相果申候、

実子無御座候付、私儀五十騎組之内志賀善左衛門世忰二御

座候、養子二仕二付而、弥次兵衛跡式被仰付十三ヶ年御奉公

申上候、以上

嶋田武兵衛由緒

一、信州更級郡嶋田と申所、代々持伝申处、甲州信玄公二被

亡、越後江罷越御奉公仕候、祖父嶋田庄左衛門より以来之儀計存、

先々之儀は委存不申候、以上

吉田次右衛門由緒

一、於越後、拙者先祖吉田美濃と申候、見立不動山之城ニ被差置候、

知行之儀ハ直嶺と申所ニ御座候、御軍役之儀は鎧五十挺御役儀

相勤罷有候、吉田美濃相果、嫡子与吉郎ニ跡式被 仰付、会

津江御供仕、与吉郎相果、嫡子次右衛門ニ跡式被 仰付、其後

米沢江御移被成候節、機分悪敷御座候付、御跡より罷越候付、本知

被下不申罷在候処ニ、定勝様御七ツノ御年より御部屋住之御

奉公申上候、御上洛之御供仕、其後庭坂江居役ニ被差置、其後

米沢江被召寄、御鷹部屋被 仰付、新知五拾石拝領仕、御

奉公申上候、次右衛門死去仕候而、実子某ニ跡式被 仰付、御馬廻江

被召加、無相違五拾石被下置、三十ヶ年以来御奉公申上候、以上

関口与五右衛門由緒

一、関口名字先祖之儀、覺無御座候、併聞伝申分申上候事、

関口大蔵 右大蔵代ニ栴生在城被 仰付候時、ふなう分

知行ニ被下置、 景勝様御判形頂戴、于今所持仕候、牛加嶺杉

沢と申所引足迄被下候と申伝候事 ▲会津ニ而幕之内村、

藪神村、雀之宮三ヶ村之内ニ而知行被下置、御馬廻ニ被召仕候

と申伝候事

右大蔵実子

民部実子

大蔵実子

同民部

同大蔵

同権之助

右権之助死去仕、子無御座ニ付而、岩井大学六男某関口名字

相続申候、已上

長吉十郎由緒

一、越中国魚津城ニ而討死仕候長与次一門ニ御座候、長左門、山岸忠兵衛

番代仕、忠兵衛成人致於後左門儀与次甥ニ御座候故、小御扶持

拝領仕、長之名字名乗罷在候、実子無御座候間、与板組之

内岡茂左衛門子養子ニ仕、長清吉と申候、蓮心様江能登

御奉公申上ニ付、御馬廻組ニ被 召加新知五拾石被下置、其後

相果、実子拙者ニ家督被 仰付、御奉公申上候、已上

藤卷利兵衛由緒

一、藤卷惣八郎御馬廻より御膳部江被召加、実子無之故、村田惣助

子聳名跡二仕、藤卷清兵衛と申、知行五拾石家督仕、私曾

祖父二御座候、清兵衛実子無御座故、山田源七郎子聳名跡二

仕、家督被仰付藤卷惣左衛門と申、右之御馬廻江被召加候、

惣左衛門実子無之故、祢津甚左衛門弟聳名跡二仕、同惣左衛門

と申候、家督仕御奉公仕、其後隠居仕、実子拙者二家督被

仰付、御奉公申上候、以上

高橋八郎右衛門由緒

一、祖父高橋蔵人、春日山御城下北谷と申所二罷在候、謙信様

御代、越後所々之城代衆より証人御取被成、蔵人二御預ケ被成二付而、

証人奉行仕候、景勝様御代迄一騎之役儀相勤、年

寄申二付、実子又五郎二家督被下置候、後平左衛門と官途申候

一、名護屋御陣之御供仕相勤申候、若松江御国替之時分も

騎馬之役儀相勤申候、米沢江御移已後廿五石二被 仰付、

大坂冬御陣二御供相勤、翌年之御陣二、年六拾前後之者は

米沢御留守居相勤可申段被 仰出候刻、是非罷登可申

由三俣九兵衛を以申上候処二、一旦被 仰出上は 上意次第尤候、

身立之儀ハ帰陣之上、御供仕者御留守居之者も同前二御

引立可被成由、直江山城奉二而被 仰付候間、無是非罷在候、

然二、御帰陣之上諸組共二加増被下置候刻、御留守居仕者二は追而

可被 仰出旨趣、平林藏人被申渡候、已後三俣九兵衛を以申立候処、日外序を以可被 仰付段、直江山城被申、無程右之山城死去故、諸傍輩並之知行安堵不仕候

一、平左衛門隠居仕、実子拙者ニ家督被 仰付候、親平左衛門ニ式人扶持相果申迄被下置候、私廿五石之役儀仕、寛永十弐年より当年迄四拾弐年相勤申候

蓼沼伝十郎由緒

一、先祖之儀、同姓伊左衛門書上申通ニ御座候、某儀、蓼沼造酒三男ニ御座候、幼少之時分より御近習御奉公仕、只今御馬廻之御奉公仕候、以上

本田源右衛門由緒

一、甲斐信玄公之御国境、飯山之城主ニ本田右近被差置候、其時

御団御宰配被下置候、同姓八右衛門所ニ御座候 ▲同右近氣分之時分

御直筆ニ而御書被下置候、同姓八右衛門所ニ所持仕候

一、於河中嶋信玄公と御取合之時分、敵味方敗軍被成御一騎

被為成、御向後無御座処ニ、右之右近耆人尋申上候得は、御落

馬被遊、敵二重三重ニ取巻申候処ニ、右近耆人敵中乗張防

申候、其身馬共ニ七ヶ所手負申候得共、右之敵防申内ニ、牢人

須田尾張と申者立会申、御馬ニ奉乗セ、右両人御供仕、無程御帰

陣被遊候上、被召出御感状被下置候、同姓八右衛門所ニ所持仕候

一、本田右近、後ニ官途仕石見と申候、嫡子は弁丸と申候ヲ、

謙信様御前江被召出元服被 仰付、仮名本田孫七郎ニ被成、

長之御一字被下置、并御脇差被下置、右之証文同姓八右衛門

所ニ所持申候 ▲石見、田切之城代被 仰付候時分、関東より森

勝藏と申者大将ニ而一、二万之人数ニ而責申候処、馬上数多討取

申、右之城相抱御忠信申上候 ▲石見留坂之城主ニ被差置刻、

謙信様御逝去ニ付而、三郎様 宗心様御取合之時分、祖父源右衛門

三郎様へ証人御取被成処、子を捨御忠信申候は、本領其外可被下

置候段、 宗心様上意御座候付而、実子相捨御忠信申上候

一、祖父源右衛門、新発田陣、高麗御陣、大坂両御陣ニ罷立申、先

年会津江御加勢ニ罷立申候、親修理儀も大坂御陣ニ罷立候

一、隆心様御部屋住より御歩行御奉公仕候、其時分も番頭被

仰付、其後御中之間江被召加相勤申候、修理隱居仕、跡式

嫡子八右衛門ニ被 仰付候、拙者儀は八右衛門跡御扶持被下置、御馬廻ニ

御奉公申上候、已上

大田三郎兵衛由緒

一、先祖越後ニ而御馬廻之御奉公申上候

右式部嫡子 右修理嫡子

大田式部 同修理 同喜四郎

一、右喜四郎次男大田甚左衛門、新御扶持被下置、御馬廻之御奉公申上候、

男子無御座付而、御納戸組之内山田甚五兵衛世悴聳名跡ニ罷成、
名字相続御奉公申上候、已上

東弥五左衛門由緒

一、祖父東名左衛門儀、牢人者ニ御座候間、先祖如何様ニ御座候哉
様子不存候、親弥五左衛門、河野与右衛門弟ニ御座候を、聳名跡ニ
罷成申候、弥五左衛門死去仕候而、実子某ニ家督被 仰付、御
奉公申上候、以上

歌川安右衛門由緒

一、拙者儀明曆三年酉ノ年御貝役被 仰付、即式人御扶持御
切米八石被下置候、此外之儀は同姓加右衛門委可申上候、已上

新小姓

小森沢仙右衛門由緒

一、 田中太郎 七郎藏人 小森沢右近藏人 信濃守 信濃
重経 経氏 儀胤 政俊 経俊

越前 中条惣地頭孫次郎 四郎左衛門 主計 刑部
宗俊 儀実 景俊 俊秀 政秀

長秀 又四郎、後刑部

此又四郎親刑部政秀儀は

越中於小出之地討死仕候、依之本領

之儀は不及申、新知行被下置、新知行之分は諸役儀免許被成

下候、御判形于今所持仕候、此又四郎若名鍋麻呂と申候を、

景勝様又四郎二被成、長之御一字被下置、長秀と被 仰付候、即

其時分之御書御判、于今所持仕候、又四郎後刑部と被

仰付候、謙信様御一代、景勝様御一代働忠功御奉公仕候

付而、右両御大将様御書御感状十四通、是も于今所持仕候、

右之又四郎実子小森沢又五郎、病人ニ御座候故、弟監物ニ知行

讓、監物無子ニ付而、弟茂左衛門ニ知行讓申候処ニ、乱氣仕無故

死ヲ仕候故、知行被召上、拙者親又五郎ニ助御扶持式人扶持被下

置無役ニ罷在候、拙者儀又五郎実子ニ御座候故、御半地以来壹

人扶持ニ罷成、御堂御加用役相勤、新小姓並ニ罷在候、以上

武頭

三拾九人

古海又左衛門由緒

- 一、古海儀越後御譜代 二御座候、御馬廻之御奉公申上、所々二而御用二相立申由承候得共、委細之儀は存不申候 二付而書上不申候
- 一、祖父越後より会津江御国替之砌、御厩御預ケ御奉公相勤申候、子共兩人御座候、惣領は監物、次男又左衛門儀は直江山城守所江奉公仕候、慶長五年最上陣 二而高名仕由承候、祖父年寄申 二付御訴訟申上、右之御厩差上隠居仕候、監物病死仕故、親又左衛門家督被 仰付、御奉公仕候、大坂両御陣御供致、其後江戸御城石垣之御普請奉行両度被 仰付、罷登相勤申候、已後病死仕候、 隆心様御代寛永八辛未年、某家督被

仰付候、五三年御奉公申上候内ニ御加増被下置、貳百石ニ罷成、
無程御使番被 仰付、御加増被下置三百石ニ罷成、十ヶ年御奉
公申上候、 蓮心様御代ニモ十貳年右之役ニ而相勤申候、其後

山田清兵衛ニ御預ケ被成、御小道具組被 仰付、江戸御番御

用捨ニ而御中之間六人年寄並ニ相詰、五六年御奉公申上候、

其後留守十郎右衛門跡役三十人頭被 仰付、御奉公申上候、以上

山下九郎左衛門由緒

一、山下名字、本来越中之山下ニ御座候、越後江被召寄御被官ニ
罷成、其砌餅月之御紋之御旗拝領、于今赤地ニ餅月之紋ニ

仕申候由承伝候、此外委細之儀は存不申候、山下采女と申

者御座候由承申候得共、越中より参事候哉、是も委存不申候

一、太郎兵衛儀、関川名字三男ニ御座候、山下は他名続申由

承候、関川惣領は今程真田伊豆守殿御家中ニ罷在候と

承伝候 ▲私儀本名は武藤ニ御座候、武藤清右衛門名跡被

仰付罷在候、右之太郎兵衛は私舅ニ御座候、惣領相果名

跡無御座候付而、御訴訟申上候得は、私を 名跡ニ被 仰付候、依

之武藤名字ハ私姉婿武藤甚兵衛ニ被 仰付候、私明暦

三年より御奉公申上候

附、山下太郎兵衛儀は右山下玄蕃と申候、元和乙卯年段母衣

御鉄炮組式拾を三十人ニ被成立、拾五人を太郎兵衛ニ被 仰付、

拾五人を本間主水ニ被 仰付、其後参拾人共ニ太郎兵衛ニ被

仰付、右之年より明暦三丁酉年迄四拾三年相勤申候、同酉年

隠居仕申ニ付、組之儀は山田清兵衛ニ被 仰付候、私継目式

百石被下置候、五年目辛丑年、山田清兵衛六人年寄被 仰付、

組之儀は拙者ニ被 仰付、当年迄十七年相勤申候、以上

百束又兵衛由緒

一、謙信様御代先祖御奉公仕候、越後之内古志之郡ニ被指置候、

于今百束と申処御座候由承及候、拙者之儀若輩ニ而親

果申候得は、先祖委存不申候、覺申候分は、先祖実子

無御座ニ付而、小越平左衛門二男左馬之丞名跡ニ被 仰付、百束

左馬之丞と申候、会津御当地迄祖父左馬之丞、御馬廻ニ而御奉公

勤果申候、親若輩より 宗心様御近習ニ被召仕候、其時分御

膳番御扈從衆御番頭共ニ弍番ニ而、大井田、斎木兩人ニ被 仰付

被召仕候、大井田相果、跡役親新六郎ニ被 仰付、斎木、百束卜

被召仕候、大坂御陣ニも御供仕候、 宗心様御他界ニ而一兩年御

馬廻江罷出候、 隆心様御中之間組を被成立候時も、斎木

同前ニ御中之間御番頭被 仰付被召仕、寛永十一年御上洛之

御供仕、翌年親百束又兵衛相果、拙者被召出家督百石ニ被

仰付候、若輩故御中之間ニ罷在、寛永十七年三月廿八日より

御馬廻江被召加御軍役仕候、寛永十九年四月江戸江御供仕

老年相詰、翌年会津御勢遣之時分、江戸ニ有詰御供仕

罷下候、蓮心様御代御中之間江被召加候、寛文弐年三月

九日二百石之御加増被下置、弐百石ニ罷成候、翌年之極月廿日御

中之間御番頭被 仰付候、御当代四年已前二百挺御手明

鉄炮五十人之組御加増共ニ被 仰付候

内藤三郎左衛門由緒

一、親柰之助、越後以来御馬廻並ニ御奉公申上候、其身年寄

申付而十ヶ年余り江戸御番御用捨被 仰付罷有候、然は

先年会津江御勢遣之時分、毎度より二百石相当之人馬差

置申候故、拙者儀を今度会津江指越申度由、三俣将監所

迄申入候得は、右之通被申立、拙者之儀何も之並ニ会津江

罷越候、其翌春空之助隠居仕、即拙者ニ家督被 仰付候、

以上

土肥伝右衛門由緒

一、曩祖土肥美作子土肥但馬儀、越中ニ在国仕候、土肥、椎名、

依田、神保、越中四郡代々古来より簀頭之由承伝候、

一、御当家江罷出候儀は、永禄年中越中江御出馬被成所、

上意之通ニ不入御手ニ付而、永祿九年從 謙信様但馬御

預ニ付而御供仕、越中四郡 上意之僣ニ御退治被遊候、此時より

御被官ニ罷成候事 ▲土肥但馬、於越後病死仕候、実子伝右衛門ニ

跡式被下置候、弟左馬之助迄被召出 御目見仕候

一、謙信様御代、祖父伝右衛門関東御陣之時分、敵城江働入

黒地ニ白色蔵鑰之紋之小簀奪取候処、 上意ニ而奪取候

小簀之紋、自分之小簀ニ仕候得由被仰付、于今其紋相伝候

一、祖父伝右衛門、於越後走廻働之儀、萩田、三侯同前ニ御座候由、傍輩

中存候 ▲祖父伝右衛門、会津江御供仕、知行千五拾石

被下置候、子共数多御座候故、子共右之知行之内御訴訟申上候而

分知二仕、銘々二御奉公仕候、会津より佐渡庄内江為御仕置、祖父
伝右衛門、左近司伝兵衛、三俣源三郎被差添被遣之旨、自他共二
存候、佐渡一乱之節、河原田之城主川村彦左衛門惣領兵蔵、証
人請取、庄内東禅寺江籠城仕、和睦仕罷退候

一、祖父伝右衛門、米沢二而病死仕候、直子伝右衛門跡式被下置、親

伝右衛門御奉公之儀、大坂兩度之御陣御供仕候、隆心様御代

亥之年之御上洛二百挺御手明鉄炮五拾人御預ケ、御上下御供

仕候、其後御使番被 仰付、御奉公相勤申候、組廿人御使番御

取立已前二、右之御役被 仰付候而、相果申候、跡式直子某被

仰付、但馬代より私迄四代、某儀、当年迄四拾五年御奉公相勤候、

以上

山本次郎左衛門由緒

一、謙信様御代、拙者曾祖父山下左京御奉公仕、越後ニ而相

果、実子山下右近本方ニ家督被 仰付候、越後より若松御当地迄

御馬廻ニ罷在、大坂両御陣御足輕組被 仰付、相勤申候

一、景勝様初而御馬廻三十人頭被成立候ニ、祖父右近一番組被

仰付候 ▲定勝様亥之年之御上洛ニ、祖父右近三十人頭ニ而

御供仕、其後築川御城代ニ被差置、以後福島御奉行被

仰付、五百石被下置相勤病死仕候、実子与三兵衛、右近在世之

内より大小姓ニ被召仕候、江戸御番度々相勤、五月御下向之御供

仕、御下着之上右近跡式惣領与総兵衛ニ三百石被下置、右之大

小姓ニ被指置候処、同年八月親与惣兵衛相果、実子拙者ニ家督

被 仰付、御馬廻江被召加、寛永十八年より当年迄三拾六年

御奉公申上候、已上

小田切孫助由緒

一、会津ニ而曾祖父小田切但馬代、祖父豊前代迄津川之城主

被 仰付候、豊前身立之儀、御馬廻之御奉公申上候、米沢江御移

被成候砌、百三拾石之知行被下置、内四拾弍石信夫之地ニ而拝領

申候分、悪敷故指上、八拾八石ニ而罷在処、御加増被下置、大坂

両御陣ニも騎馬之御供仕申候、豊前死去仕、嫡子平右衛門ニ弍

百石二家督被 仰付、平右衛門儀、先年会津御勢遣之時分、御足
輕五拾人御預ケ被成被遣申候、先祖二而忠信申上候証文、同名
半之丞所二所持仕申候、私儀若林作兵衛三男二御座候、平右衛門
実子無御座二付而跡式相続仕、当年迄三拾老年御奉公相
勤申候、毎々之儀、拙者若年二而平右衛門死去仕申故、委儀承
伝不申候

富所八郎兵衛由緒

一、曾祖父富所伯耆、枇杷島之城主上条殿二相付罷在候処、
謙信様より 上意二付而春日山江罷越、御奉公仕候、上条殿御逝去
之後、枇杷島鍛鍊之者二候とて伯耆二同心数多御付被成、枇

杷島江被遣候、伯耆次男凶書、謙信様御近習ニ被召仕、御

腰物持申役仕候、景勝様御代、天正九年北崎分御加増被

下置候、其子凶書、越後より会津米沢迄御供仕、大坂兩御陣相勤、

御帰陣之後五拾石御加増被下置、百石ニ而御奉公申上候、定勝様

御代弍百石ニ罷成、其子半右衛門ニ家督百石被下置候、子無御座相果

申候付、拙者兄之名跡被仰付、五拾石被下置候、綱勝様御

代、万治三年二月御加増拝領仕、弍百石ニ罷成、其翌年福島江

被差遣三年相勤申候、御当代延宝四年四月鮎貝江被仰付

罷越候、寛永九年より当年迄四拾六年御奉公申上候、以上

朝岡吉左衛門由緒

一、曾祖父朝岡弥右衛門、本国三河朝岡と申在所二代々罷在候

一、永禄三年 謙信様関東御出馬之砌、御奉公ニ罷出候、其刻於

越後小浦之地拝領仕候 ▲謙信様永禄七年川中嶋御出陣

之刻、高名仕小篋之紋白地ニ胴黒之紋を拝領仕候

一、下越後於黒川一戦之刻、数ヶ所疵負無比類働仕証文御座候

一、宗心様御代ニ花前平七郎分致拝領御書所持仕候

一、弥右衛門実子無御座候付而、中条梅坡娘幼少之時分養子ニ仕、山本

左京次男善左衛門聶名跡ニ仕候、右御奉公之品、天正廿年

高麗御陣罷立、文禄三年伏見御普請奉行相勤、慶長五年

会津かうさし御普請ニも奉行被 仰付候、其年病死

仕候、右之跡式、三俣式部次男祖父助左衛門家督相続仕候、右御奉
公佐州為御横目、土肥伝右衛門、左近司伝兵衛同前ニ被遣候、後一
乱有之付、河原田城主川村彦左衛門惣領兵藏証人ニ請取罷退、

庄内東禪寺江籠城仕所、最上中御抱之城地数ヶ所落城

仕候、乍尔東禪寺堅固ニ相守候処、和睦扱有之罷退候、其節

其節逆徒取籠申時分、馳向討取申候 ▲慶長拾九年大

坂両度之御陣ニ罷立御帰陣被遊、後御手明式拾人被 仰付、新

知式百石拝領仕候、元和五年三拾人頭、其已後宰配頭被 仰

付候、然ル時御馬廻中江戸御番転遠近出入有之、就夫蒙

御勘氣、無程御赦免被遊候後、百挺御鉄炮頭仕、六人年寄郡代

一、親吉左衛門、慶長廿年大坂御陣二十七歳ニ而罷立候、御帰陣被遊本

地被下置候、隆心様御代始而加増被下時分、傍輩中

同前ニ致拝領、御上洛御供相勤、其後御使番ニ被召加并六人

年寄宰配頭被 仰付候、吉左衛門跡式無相違拙者ニ被

仰付候、已上

古海甚兵衛由緒

一、親古海勘左衛門十四ノ年 隆心様御近習ニ被召出、廿三年御

奉公申上候、其内御知行百石被下置候、其已後も御加増百石拜

領式百石ニ被成、御手水番之並ニ被 召仕候、御遠行之砌、御馬廻江

被召出、四年相勤申候 ▲蓮心様江も御抱守被 仰付、

御近習ニ被召出、御加増百石被下置三百石ニ罷成、十一年相勤候、

其後古海又左衛門ニ御預被成候、御小道具組、神山金右衛門、古海勘左衛門

兩人ニ御預ケ被成候、御当代様迄十二年相勤申候、其後相浦源右衛門

跡役御手明組被 仰付、御中之間年寄ニ被召加、御加増五拾石

拝領仕申候、翌年病死仕候、実子某家督百石被 仰付、御

馬廻並ニ御奉公申上候 ▲祖父以前之儀は古海又右衛門惣領ニ御

座候得は委細可申上候、以上

市川彦兵衛由緒

一、謙信様御代、先祖曾祖父市川梅林、信州長沼之城ニ被差

置、田子之郡、石村之郡被下置罷在候、梅林斎相果、実子市川

庄左衛門家督被 仰付、二ノ丸とうしやう車と申所ニ被差置候、

本城ニは嶋津下賀斎被 仰付被差置候、会津江御国替之時分、

嶋津左京妹聳ニ被 仰付被召連候、御当地へ御移之時分、

信夫之内名倉と申所ニ而百三十拾石被下置候、罷在候、庄左衛門相

果、其子七右衛門無相違家督被 仰付、江戸在番ニ罷登相果、

実子無御座故、七右衛門弟市川掃部ニ跡式無相違被下置候、此御地江

親掃部引越、二、三ヶ年過七十石之御加増被 仰付、二百石ニ罷成

御奉公申上候、病氣故隠居仕、拙者跡式百石被 仰付、御奉公

申上候、已上

一、隆心様江親新貝喜兵衛御近所之御奉公申上候、其後御手水番二被召入、御加増拝領弍百石二被 仰付、御奉公申上候

一、隆心様御遠行之砌、御馬廻江被召出、其後御中之間江被召入御

奉公仕候、喜兵衛病死仕、私兄左門二跡式百石二被 仰付、御中ノ

間二被差置申候、左門病死仕、跡式無相違百石拙者二被下置候、

五三年程御中之間二被指置、其後御馬廻江被召出申候、前々之儀、

私幼少之時分親喜兵衛病死仕候故、先祖之儀委承伝不申候、

拙者御奉公之儀、当年迄拾七年二御座候、以上

室高勘之承由緒

一、室高左京、關東上州之内沼田と申所ニ罷在候、上州信州甲州

三ヶ国之境わりか嵩之城ニ而討死仕候 ▲官領様越後江御出

被成候以後、左京子六才之時、御跡をしたひ罷下候、謙信様御

前^江被召出、重家来扶持分ニ知行五百石被下置候、幼少之内は

照陽寺御預被差置候、御館御一乱之時年十五ニ而高名仕候付而、

十五左衛門と官途被下置候、家官故其後左京ニ罷成、御足輕百

五拾人御預ケ被成候、御国替ニ而会津米沢江御供仕、於御当地ニ

病死仕候 ▲左京子新六郎 宗心様御近習ニ被召仕候所ニ、

蒙御勘気牢人仕候、隆心様御代ニ被召帰御、馬廻江被召加

新地六十石被下置、十郎兵衛ニ罷成候、其後御使番被仰付候、

隆心様御遠行之翌年、江戸御城役被 仰付、無程病死仕候、

跡式嫡子奎之助式百石被下置候、御馬廻ニ御奉公仕候、其後御使

番ニ被 仰付、十郎兵衛ニ罷成候、其後御奏者番被 仰付候、

蓮心様御遠行之後、病氣故隠居仕、跡式拙者ニ被 仰付、

御奉公十ヶ年余り仕申候、以上

曾根主馬由緒

一、鼻祖曾根備中、越後御普代ニ御座候、越中於仙段野

為景様御生害之刻、御供切腹仕候、其子曾根是言齋、

謙信様御在世御近習之御奉公相勤、其後古志之郡ニ罷在隠

居仕候、実子曾根源左衛門ニ家督被 仰付、御奉公申上候、

於越後病死仕、実子大膳ニ家督被 仰付、会津江御移国之

節御供仕罷越、米沢江御移之已後、官途仕候而弥左衛門ニ罷成候、大坂

両御陣御御供仕候 ▲定勝様御代ニ鎧足輕五拾人被 仰付、

三百石被下置候、寛永十一年之御上洛ニ御鎧足輕預り御先乗仕候

一、寛永廿年会津江御勢遣、五十人之将被 仰付罷越候、其已後

病死仕候、一男大膳儀者御右筆仕、各ニ貳百石被下置御奉公

申上候ニ付而、次男親弥左衛門ニ家督被 仰付、貳百被下置候、

御当代ニ御弓組五拾人御預ケ御奉公相勤申候

一、某儀は 綱勝様御代ニ御小姓御奉公仕、其後御手水番御奥

組之御奉公申上候、 綱勝様遠行故御馬廻江被召加、親弥左衛門

在世之内、各二御奉公仕、江戸御給仕二も三度罷登相勤申候

一、親弥左衛門病死仕、実子私家督被 仰付、御奉公申上候、以上

佐田源右衛門由緒

一、隆心様御代、親源兵衛右筆役被 仰付、其已後御中之間江

被召、加新知百石被下置候、源兵衛死去、直子拙者二家督被

仰付、御馬廻江被召出、拾弍三年軍役相勤申候、先祖委細之

儀は同姓舍人申上候、以上

三瀨利右衛門由緒

一、三瀨掃部、下越後荒川条と申所二居申候、信州於下米宮

甲州御取合之時、朝伊奈左京、武田飛驒守両上下一千余、諏訪

部次郎右衛門と先祖掃部兩人討取御奉公申候

一、嫡子出羽、同所ニ罷在候、庄内大宝寺御取合之時、一方之将を被

仰付御奉公仕候、右之御書所持仕候 ▲儀輝公方より 謙信様

御一文字御拝領被遊時分、右之御使者ニ被 仰付罷登、從

公方様肥州国吉之御刀致拝領、于今所持申候

一、嫡子左近、伊達庄内之境鐘子之嶺と申所ニ新御城を御取立

被指置候、其刻私庄を御取合之節、忠功仕之御書尔今所持申候、

会津御国替ニは米沢高畠之御城代一両年相勤、其已後同所

小国之御城代被 仰付候 ▲嫡子式部、御馬廻江被召入、大坂両

戸狩三郎右衛門子孫戸狩捨左衛門、天保年中

平米御蔵預り一件ニ付断絶

御陣之御供之時分、種子嶋百挺御鉄炮被 仰付、御帰陣以

後御馬廻三拾人頭被 仰付、其已後六人年寄迄ニ御引立、其後

御改易ニ被 仰付所、罷出病死仕候 ▲嫡子清兵衛、親式部ニ

かゝり居候得共、大坂御陣御供仕付、新知五拾石被下置、以

後御使役六人年寄迄御引立被召仕候 ▲親勘右衛門儀、清兵衛

実子無御座付、甥ニ御座候故家督仕、大小姓之御奉公仕、其

已後御馬廻江被召出、御当代様ニ御使役被 仰付候、勘右衛門儀

与板組之内立岩舎人二男ニ御座候、親病死仕候付、直子某ニ家

督被 仰付候、以上

戸狩三郎右衛門由緒

一、本名上倉ニ御座候、嫡子上倉治部太夫儀、飯山之城就ニ被

差置候、次男采女母共ニ越中江證人ニ御取上被差置候、其已後信

州之内戸狩と申所新知行ニ被下置候刻、在名を名乗申様ニ被

仰付候間、戸狩宋母と申候、段々御奉公申上候、采女母儀年寄申ニ

付而会津ニ隱居仕、嫡子左右衛門ニ家督被 仰付候、 定勝様

御代本地六拾石ニ御座候処、百四拾石之御加増被下置、式百石ニ

罷成候、其已後年寄隱居仕候処、嫡子七兵衛ニ則式百石被下

置、近頃迄御奉公相勤病死仕候、跡式直子某ニ被 仰付、御奉公

申上候以上

卯千代

石栗卯之丞由緒

石栗卯千代子孫善左衛門、延享元年

御使番被 仰付、同二年不調法之儀有之

閏十二月廿七日改易、大舟村江遠嶋被 仰付候、

宝曆四年組附御扶持方江被召出候、後御勘定頭

被 仰付、御馬廻組江罷被帰候

窪嶋十兵衛子孫窪嶋半兵衛、文化年中

差引一件二付改易被 仰付、其後猪苗代組江

被 召出候、其子掣七文、政年中御勘定頭被 仰付候、

弘化年中御中之間年寄被 仰付候節、子孫永々

御馬廻組江被召帰候、

一、石栗將監、信州之城ニ罷在候時分、武田信玄公より御書被下置候、

于今所持仕候　▲景勝様御代越後江罷越御奉公仕候、会津江

御移被成、二本松安達之郡ニ被差置候砌、川俣表ニ而数度高名

仕、直江山城感状三通所持仕候、米沢江御移被成、伊達信夫之

郡代ニ平林蔵人被指置候、其節百姓共仙台殿退候付而、伊達信

夫荒地ニ罷成ニより、仙道之郡代七人之者在々所々ニ被差置候間、

百姓共呼返シ取立荒所開発仕候刻、其村方御代官被　仰付、

知行之外御足輕十人宛御預ケ被成候、御軍役之儀者御馬廻組並

仕候、將監死去仕、其子勘解由家督被　仰付、同役儀之御

奉公申上候、本田上野介殿流人之時分ニも最上御勢遣ニ罷立候

一、定勝様亥之年御上洛之御供、騎馬ニ而仕候、其後代官仕候

者共御放被成候、八千石宛御領被成候、勘解由相果実子助之丞

跡式相続、同役之御奉公仕候、助之丞相果、弟善七名跡ニ罷成

同御奉公仕、寛文四年米沢江罷越、御馬廻組之御奉公仕相

果申候、実子某家督相続仕、寛文八年より十ヶ年御奉公

申上候、以上

窪嶋十兵衛由緒

一、高祖父窪嶋豊前、曾祖父日向、本国甲州信玄御家中ニ而

足輕大将知行百貫被下置候、宗心様江信玄公御姫様

被為入、御輿ニ付而日向御家中江引越参候、日向於信州抽御忠信ニ

付而、從 宗心様御感状、天正十壬午年六月一通頂戴仕候、尔今

取持申候、同八月五日御感状壹通頂戴仕候、日向越後江被召連

付而、信州知行分諸役御免、祖父十左衛門日向跡式安堵仕候、

文祿壬辰年之高麗御陣、壹騎一挺ニ而御供仕候、大坂兩御陣御供

仕候、親齋兵衛 隆心様御部屋より之御奉公、別而御扶持御切米

被下置、御步行ニ而寛永十一甲戌御上洛御供候、正保三年之暮、

十左衛門跡式無相違式百石被下置候、才兵衛家督直子某ニ被

仰付候、名字代々直子ニ而相統申候、以上

山本太左衛門由緒

一、拙者祖父山本右近相果申節、五百石之内、三男山本縫殿右衛門二
五拾石被下置、御馬廻江被召加候、江戸御番手二罷登詰申二、病
死仕候、実子無御座二付而 隆心様御代二、留守十郎右衛門次男
某二、右之縫殿右衛門甥二御座候付而、跡式被 仰付候、以上

大峡与惣右衛門由緒

一、大峡織部、信州之者二御座候、信州御手二入越後江御奉公申上候
砌、御弓組五十人御預々被成、高麗御陣二名小屋迄御弓大将仕
罷有候、会津江御国替已後、祖父織部相役大峡太郎右衛門被
仰付、御弓組百人御預々被成候 ▲慶長六年米沢江御移之

時分、御城下之明屋之番仕刻、御訴詔仕申候、廿五人宛日替ニ被召

仕候は、非番之者共居置之始末仕候、米沢へ引越申度由申ニ付而、

三俣九兵衛を以御奉行衆江申立候得は、不罷成、同九月廿六日迄

相勤申家々請取渡シ相濟申所ニ、右之足輕猪苗代ニ百姓田地

年貢地ニ抱作り申候、百姓共年貢取切可申ニ而算用仕候、

逗留仕埒明させ、同十月五日桧原口人留ニ而女童部通シ不申ニ

付而、福嶋へ罷出、同廿六日米沢江参着仕所ニ、被 仰付候日限遅々

仕候処、蒙御勘気、長手村江引込荒地ヲ開手作罷在候所、

定勝様御代ニ大峽名字御尋被成所ニ、池田八兵衛委細言上被

申候刻、織部被召出御知行五拾石下置候、祖父織部、実子

新右衛門ニ家督被 仰付、御奉公相勤申候、新右衛門直子無御座ニ
付、拙者聲名跡ニ罷成、三十年餘り御奉公仕候、拙者之儀は
与板組之内青柳隼人孫ニ御座候、以上

歌河孫兵衛由緒

一、祖父歌川源左衛門、本名森山と申者にて次男ニ御座候、歌川
右近躰頼ニ御座候ニ付聲ニ仕、男子持不申候は末々は跡式ニも可
仕由ニ而、直江山城守江得其意候処、一段可然由被申付、聲ニ仕差
置申候、其身手立申ニ付而、丸田九左衛門弟子ニ罷成、鉄炮壺流
芸古仕、御家中江指南仕候由、山城守取成ニ而五十石御知行別而

拝領仕候 ▲江戸石垣御普請之時分、尾形勘解由、歌川源右衛門

兩人罷登御普請割仕候、其後 隆心様御引立被成御使番ニ被召

加、御加増三百石被下置、其已後江戸御堀御普請之大奉公被

仰付罷登候、以後病死仕候 ▲右之源右衛門直子左兵衛ニ跡式被

仰付、江戸江罷登候後病死仕候ニ付、古海又左衛門次男源左衛門

孫ニ御座候間、拙者跡式被下置候以上

内藤信五左衛門由緒

一、内藤左近入道伯父関川左衛門、信越堺田切と申所ニ被指越候、

謙信様上意ニ而春日山御城下へ被召寄、上田様御追落ニ被成御

企ニ而、関川子共之内関ノ谷佐左衛門、并宇佐美、古志之庄田三人ニ

被 仰付候 二而、御 一家と申、其恐不少候由堅辞申候得共、

再三之 上意故、無是非御請申上候、永禄四巳未年七月五日、野尻之池江御舟遊事よセ、御遊興最中、船底之しやう目を

抜、水中江沈申罷帰候、已後為御加増むしう長浜小坂分被下

置候、謙信様上意 二而御生害被遊候得共、御憤と恐入、子共皆々

他名 二仕候、一男者黒金安芸守名跡 二仕候、黒金日向と申候、

次男与三郎を左近名跡 二仕り候、内藤佐左衛門と申候、名護屋御陣 二も

御供仕候、慶長弑年伏見御舟入御普請 二も御奉公被 仰付相

勤候、会津 二而御馬廻組之御奉公仕、其直子次郎左衛門 二家督

被 仰付、米沢 二而大坂両御陣、元和三年御上洛 二も御馬廻 二而御供

相勤、寛永廿年会津江御勢遣ニも罷越候、慶安四年迄五拾七年

御奉公申候て、直子久左衛門ニ家督無相違百石被下置、十ヶ年御奉

公仕相果申候、子無御座ニ付而、拙者ニ兄之名跡被 仰付、当年

迄十六年御奉公申上候、從 謙信様左近入道ニ被下置候はちの

御刀、代々持伝申候、米沢ニ而 景勝様在世中差上申ニ付而、

則内藤八卜札を御付させ、御納戸江納申由ニ候、以上

室伏太兵衛由緒

一、曾祖父室伏伊賀、関東之者ニ御座候、関東御手ニ入御馬廻江

被召加御奉公仕候、其已後 景勝様御代御膳部頭被 仰付、

御奉公相勤申所、祖父儀与惣衛門病死仕、親市左衛門二家督被

仰付、右之御馬廻へ被召返御奉公仕候、親市左衛門儀、若輩二御座候而

家督請度申候故、先祖之様子委細承置不申候間、書上不申候、

実子二段々継来申候、市左衛門寛文十二之年病死仕、直子拙者二

跡式被下置、御奉公仕候、以上

市川次郎兵衛由緒

一、祖父市川孫兵衛儀、越後より罷出代々御馬廻二御奉公仕候

一、祖父孫兵衛、越後より会津米沢迄御供仕、大坂両御陣相勤罷帰

病死仕候、直子無御座付而、大日向柰右衛門後家入二被 仰付御

奉公仕、已後隱居仕候、三俣久兵衛二男伊春直子某、市川孫兵衛

駒沢権之丞子孫、御馬廻ニ今は無し

孫ニ御座候付而、家督被 仰付、御奉公仕候、以上

駒沢権之丞由緒

一、於信玄家、長沼之山之内簷頭仕候、駒沢之城ニ罷在刻、駒沢

山城と申候、隱居仕法名常閑、此の跡式直子主税之助相繼、右之

駒沢之地ニ罷在候、其後信州没落 ▲直江山城守より本領

無相違可被下置由御奉書被下候ニ付而 景勝様御代ニ御当家江

罷越候節、本領弥無相違安堵之御書、于今所持申候、信州之簷

下江御連書ニ而御朱印、主税之助ニ被下候、于今所持仕候、其砌虚空

蔵山御陣之時分討死仕候、其刻嶋津淡路所へ直江山城守より

御奉書之趣、老方討死を以数百人を助候と被御感候、御奉書于今所持仕候、主税助弟源五郎、若輩ニ御座候間、隠居之常閑を

被召出、是も庄内ニ而討死仕候、右ノ源五郎跡式被下置、越後より

会津へ御供仕候、此跡式直子与兵衛、大坂御陣之時分討死仕候、

其弟与惣兵衛ニ跡式被下置候、其跡式実子某ニ被 仰付、御

奉公申上候、以上

町田半兵衛由緒

一、町田太郎佐衛門儀は越後ニ而御馬廻之御奉公仕候而、忿劇之所

遂籠城候、依之会加野分之内頸城被下置候、御感状所持仕候、

柴田御陣之時、二度目之御陣ニ太郎佐衛門致討死候、其後 隆心様

御代ニ、祖父太郎佐衛門御膳部江被召入、御奉公仕候所ニ、親太郎佐衛門、蓮心様御代ニ右之御馬廻り江被召加候、親隱居仕、直子某家督被仰付御奉公仕候、代々太郎佐衛門と申候、以上

夏井小兵衛由緒

一、平田重阿弥五男玄蕃、会津夏井之在城ニ罷在候、則夏井ヲ

名乗候、嫡子勘右衛門御当地江罷越、侍組江被召加、新知四百石

拝領仕候、勘右衛門嫡子監物、御祐筆被仰付、新知二百石拝

領仕候、親勘右衛門相果申ニ付、監物ニ家督無相違被仰付候、

監物二百石之地、二男武左衛門、三男勘兵衛二百石宛被下置、大小姓江

被召加、其後知行持之分三手江被召加候時分、親武左衛門御馬廻江

被召加候、拙者迄二代御馬廻之御奉公申上候、以上

留守喜之助由緒

一、拙者曾祖父留守左近、羽州庄内荒田目城主ニ罷在候、

景勝様御代越後江罷越、御馬廻之御奉公仕候、高麗御陣ニも騎

馬ニ而御供相勤、越後より若松御当地迄御馬廻ニ罷在相果申候、実子

留守十右郎右衛門家督被 仰付、大坂御陣相勤申候

一、定勝様戌ノ年御上洛、祖父十郎右衛門騎馬ニ而御供相勤、其後御

足輕大将被 仰付、三百石被下置候、其後三十人頭被 仰付候

一、綱勝様御代十郎右衛門相果、実子左右衛門家督被 仰付、無

程病死仕候、則実子某家督被 仰付、寛文五年より当年

迄十三年御奉公申上候、以上

永井仙太郎由緒

一、祖父永井備前、越後より会津江御供仕、米沢江御移之節、福

嶋江郡代ニ被 仰付、備前子同姓次郎兵衛家督被 仰付、御奉公

仕、大坂兩陣御供相勤、其已後御加増被下置、貳百石ニ而御上洛

之御供仕候、実子弥五助ニ跡式被 仰付、御軍役相勤隠居

仕候、直子拙者ニ家督被 仰付、御奉公仕候、以上

八町作左衛門由緒

一、祖父八町伝介、高山仁助兩人二段母衣組被 仰付、名護屋

高麗、其外 景勝様御出馬之御供申候

一、景勝様より天正十四年二仁助、伝助兩人二御加増被下置、田中

同水下水田野金倉拝領仕候、直江承二而御判形于今所持仕候

一、伝助実子清兵衛、五拾石家督仕、若松より此方江御供仕、廿五石二

被 仰仕候処、直江山城守依計、北村孫兵衛、八町清兵衛兩御陣二

武具鉄炮、京都迄御公儀之駄賃二而御登セ被下候付而、駄賃銀卜

被 仰、拾石之处被召上、算用相濟候は御返シ可被下由被 仰

付之間、翌年御訴詔申上候得共相叶不申、四拾石二而御軍役

相勤申候、清兵衛直子某家督仕、御奉公相勤申候、以上

此屋代は馬苦勞町屋代伝次郎先祖とは不相見得候
上花沢信濃町猪苗代組之屋代忠作先祖と相見得候
何れ之儀候哉

村田仁助由緒

一、先祖之儀、同姓次郎右衛門と同事ニ御座候、則次郎右衛門先祖之様子書上申候、私儀庶子ニ御座候間如此候、惣助儀は御勘定江被召入御奉公候、其後御馬廻江被召加御奉公仕候、惣助病死仕所、実子無御座付、御馬廻之内室伏市佐衛門次男聶ニ仕候、拙者名跡相続仕、御奉公申上候、上

屋代権兵衛由緒

一、私国信州、屋代安芸守子屋代式部、謙信様御近習ニ被召仕、其一男彦六、宋心様御近習仕、別而知行被下置候、後御家中引切、他地邦江罷出申候、次男与惣兵衛、後喜右衛門と申候、

式部名跡被 仰付、高麗御陣之御供をも相勤申候、其已後蒙

御勘気知行被召上、其後御助扶持被下被差置候、其子伝右衛門、

大坂兩御陣、杉原常陸組二而罷登、翌年大津御上洛、其翌年

駿河御供再度なから御馬廻並二御奉公申上候、 隆心様御代

於江戸御堀御普請奉行相勤、其後猪苗代組五十人被 仰

付候、御当代御馬廻組江被召加候、直子某、承応元年より猪苗代

組二而御奉公仕、寛文八年親家督相続仕、三十ヶ年御奉公

申上候、以上

一、景勝様御代、荏戸六郎次郎弟甚五郎と申者、会津より御上洛之御供無足ニ而相勤申ニ付、五人扶持被下置、其上金子壺枚半拝領仕候、其後猪苗代組ニ而御奉公申上相果申候、兄六郎次郎五男所佐衛門名跡相続仕、猪苗代組五千人頭被仰付、御当代御馬廻組江被召加、其後隱居候、実子某ニ跡式被仰付、延宝元年より御奉公申上候、以上

丸田仙右得門由緒

一、丸田伊豆守子式人御座候、惣領は丸田右京と申候、拙者之親ニ御座候、次男は丸田図書と申候而、丸田掃部親ニ御座候、伊豆守越後ニ罷在候時分は、数度之忠信御奉公仕候、栃尾之城、大茂之城、

見付之城三ヶ所被下置候、居城は見付之城ニ罷在候、右之所ニ普代之者共于今数多罷在候 ▲伊豆弟周防は蔵王之城ニ罷

在候、雷を相随、則雷之城を拝領仕、両城ニ罷在候、数度之高名仕、御感状所持仕候 ▲拙者之親右京、高麗御陣之時分、從

太閤様御書被下置候、于今所持仕候 ▲於福嶋ニ先年政宗殿

御取合之時分、福嶋之城ニ相詰、拙者親右京忠信之御奉公

仕候品々御座候 ▲越後菅名中之原之一揆之時分、堀丹後守

殿御取合之砌、拙者親右京被遣候所ニ、上田之内広瀬と申所ニ而

一日二三拾三度之高名仕、首塚石寄下被下、広瀬酒戸と申所ニ

丸田之首塚と申候而于今御座候、其砌右京家来、酒井、渋谷、

丸田右衛門ノ三人死仕候、其外五百余手も負不申引申由
承伝候、以上

岡田権兵衛由緒

一、私祖父岡田権左衛門儀、先同姓次左衛門次男ニ御座候、定勝様

御部屋住候被遊候時分、御歩行小姓ニ召仕御奉公申上候、

御番頭被 仰付、其後御上洛之節、兩度迄京都御供仕、其

已後御馬廻江被召加、御奉公仕相果申候、拙者永井三郎兵衛世悴

右十左衛門孫ニ御座候故、家督被 仰付、当年より御番並ニ相勤申候、

先祖之儀、同姓次左衛門所より委細可申上候、以上

内藤金兵衛由緒

一、私儀、御馬廻組内藤次郎右衛門三男二御座候、明暦三年十二月御

扶持御切米被下置候、御軍配之御貝役被 仰付、当年迄廿

参年御奉公申上候、先祖之儀は兄新五左衛門可申上候、以上

市川市之丞由緒

一、祖父市川杢右衛門隱居仕、後橋懸奉行被 仰付、助御扶持切米

被下置候、病死仕、直子無御座付而、親佐次兵衛は杢右衛門孫二御

座候間、跡式被 仰付、無程病死仕候、直子某家督被 仰付、

御馬廻二被召加、御奉公申上候、以上

小林三右衛門由緒

一、祖父右近、先年越後御替之時分、御当家ニ罷在忠信申上候

一、先年御弓矢之時分、關東方之御使仕、御奉公申上候

一、御当家様江引移申候時、金山と申所三百石被 仰付候を、御

賄ニ申替候 ▲先年御弓矢之時、關東北条代より奉公仕候者共

からくり引移申セと被 仰付候間、關東中才覚仕、真田右衛門ヲ

初二百騎引移申、御弓矢之御用ニ相立、最上川侯宿上、於幡

屋悉討死仕候 ▲祖父兄弟類家之者共尅人も不残引移可

被召仕由、 御上意之間、兄弟共類家之者共六人引移申御奉公

為仕、其上、川侯宿上祖父兄石森源左衛門を初、益田大学、金井

刑部左衛門、蘆田甚六、上泉又次郎、同主水、右六人之者共討死仕、殊

祖父於幡屋数ヶ所手疵負申候 ▲若松より御当国へ御移之時、

祖父被 仰付様は、其方儀惜ニ被思召候得共、御小身ニ被為成、御

普代之者悉被召放候、其上其方儀何方へ参候而も身上余間敷

候間、先此度は何方江も在付可申由、山城守春日右衛門を以

被 仰付候得共、祖父申上様は、御あてかいの儀少成共不苦候、御

家ニ罷在御奉公可申由申上候得共、重而御錠ニは、其方儀何方江

参候而も、先祖と言、其身と云、旁以身上余儀有間敷旨、先は何

方江も有付申、自然何方ニ而も身上有付かね申候坎、又は年も

寄、他国之奉公苦勞ニも存候は、何時ニ不限罷帰候へ、可被召仕由

御錠之旨、山城守春日右衛門を以被 仰付、殊代物五貫文被下置、

早々奉公稼可申由被 仰付候間、最上口へ罷越候得共、先年御情

有難奉存候、御家中江帰参仕候処、三侯九兵衛、平林蔵人を以申立

候処、則扶持被下置、御当代迄御四代御奉公申上候

一、廿七年已前、此書付三侯将監を以差上申所、黒川右衛門所二而

御寄合之上、被為御感にて五石之御切米拝領仕候

一、拾四年已前、此書面 御前江指上申候得は、来御下之上

可被仰付之由二而、御詞被指置候 ▲山内上杉御代々様より取来候

領地無相違、小林右近、関東之内、板鼻、小林、安中、壺万七千三百石

之本地二而、三百騎之同心有り ▲祖父若キ時分走廻り仕場所之

事 ▲武田勝頼と北条氏政と事切之時、上州於平井の地、頭壺ツ

一、新田居城北条被取詰之時、ねこやにおひて頭壺ツ

一、長尾新五郎居城足利被取詰之時、ねこやにおひて頭壺ツ

一、皆川山城守居城大平山ねこやにおひて頭壺ツ

一、武州関東金窪と申地ニおひて北条一戦之刻、頭壺ツ

一、真田安房守居城沼田におひて頭壺ツ

一、先年 景勝様羽柴筑前守殿と御出馬之時、なまの山御陣下ニ

をひて頭壺ツ、右之通心懸仕候儀を、先年関東より被召寄傍輩

共ニ御尋請抛人御引合御尋之時分之御帳、于今御蔵ニ可有之旨

祖父申置候 ▲其已後叔父小林庄三郎 上様より景勝様へ御近習ニ

御付候をも引寄御奉公為仕候 ▲長尾左衛門入道、太田三楽斎、由良

信濃、長尾但馬、高野信濃、祖父小林、遂相談、御当方様卜佐竹殿

御和談之御使者首尾好相調、関東へ御出馬思召之俛罷成候

一、御当地ニおひて身上不罷成由、小林代々之家来しゆう志田六左衛門

承及、祖父小林ニ可罷帰由自古郷度々申遣候得共、一度御忠信申

上、縦本地一倍ニ罷成共罷帰間敷と返答申、御奉公仕詰候、翌

先年 生善院様いあへ御湯治之時分も、彼六左衛門御宿

仕由ニ而、村田久兵衛委伝言申遣候 ▲御当方様より小林御合力分ニ而

罷在內、右長尾権四郎卜同国故、佐竹江之御使者之首尾と云

無残所忠信之者ニ候とて折々見届故、無恙御奉公仕詰候、委細

之儀は長尾権四郎可被存候、以上

武頭ノ三拾九人

志賀九郎右衛門由緒

一、私先祖近江之者ニ御座候、拙者并伯父河田豊前 謙信様

御代從近江被召抱、御引立御仕被成候、私祖父志賀新兵衛儀、河田

豊前と一門ニ御座候間、越国へ豊前跡を慕罷越、幸豊前妹後

家ニ而罷在候付、祖父新兵衛妹聶ニ仕、豊前知行所を致差引

罷在候、其後豊前相果申候付而 景勝様江被召仕、会津

御国替ニ御供仕、会津ニ而祖父新兵衛聶志賀八左衛門ニ、志賀名字ノ

知行相渡隱居仕候、其後若松より祖父新兵衛越後江罷歸候、右

八左衛門儀は米沢ニ而河田名字ニ罷成、祇今之河田一郎右衛門親ニ御座候

一、祖父志賀新兵衛、其後越後より御跡を慕罷越、御当地ニ而死去仕候、

私親兵部儀は 景勝様御一周忌之時分、新地五十石下置候、

隆心様御代御使番廿人被成立候後、廿老人目ニ御使番ニ被召加、御奉公

相勤候内ニ死去仕候 ▲拙者儀十六之年より 隆心様御小姓ニ被召

仕、廿老之歳親兵部相果申付而、家督弑百石被下置、廿四ニ而御馬

廻江被召加候、 蓮心様御代、私ニ拾六ニ而御使番罷成、四拾八之歳

長手御鑓組被 仰付、御当代五十八ニ而三十人頭ニ罷成、只今迄御

奉公相勤申候、以上

原甚兵衛由緒

一、祖父原大和は天正十年六月、信長公御生害以後、信州御手ニ入

景勝様江御奉公仕、候證文之御朱印御座候、嶋津下可濟は

謙信様御代より御奉公有之由、其以後信州御手ニ入信州之内

長沼之城代被 仰付、甲州侍各与力ニ而差添候内、大和儀も同前ニ

罷越候、慶長三年会津江御国替有之、下可濟は仙道之内長

沼之城地ニ被指置、何も右之通相従罷越候、慶長六年会津より米沢江

御越被成候、下可濟は信夫之内荒井村ニ住居仕、大和儀は名倉村ニ

罷在候、其後志駄修理御用人之時分、信夫より何も米沢江罷越候、右之

通ニ承伝申候、拙者親三左衛門儀は香坂采女実子ニ御座候、原大和

名跡ニ罷成候、大和儀は若松ニ而知行千石被下置く候、米沢江御越候上

諸給人並三ヶ一地ニハ三百三拾三石三斗被下置候、親三左衛門在世中
右之知行被下置、先年当番ニ罷登、江戸ニ而病死仕候、拙者若輩ニ
御座候得共、本知無相違被下置、其後御使番被 仰付、近年御弓
組被 仰付候、私儀今年迄三十ヶ年余御奉公仕候、以上

武藤七右衛門由緒

一、武藤名字先祖之儀は武藤伝之丞所より書上仕付、私儀は親武藤
帶刀御奉公之時代より申上候、帶刀儀は武藤清衛門長男ニ御座候、
隆心様御六之御歳慶長十四年、帶刀拾四歳ニ而江戸江罷登候、
御近習之御奉公仕、御入部之時分御供ニ而罷下、新地百石被下置、

其後御加増仕二百石ニ罷越候、初而御中間組被成立候時分、御番頭ニ被

仰付御中間衆ニ罷成申候、寛永十三年右之帶刀相果申ニ付而

跡式拙者二百石被下置、御馬廻組ニ被召加候、会津勢遣之時分も

罷登候 ▲ 蓮心様御代、御中間組江被召加、百石之加増仕弐百石ニ

罷成申候、御当代様ニ至、御中間御番頭被 仰付、其後長手

御鑓組御頭々被成候、御馬廻組江御奉公相勤申候、已上

村山長左衛門由緒

一、越後ニ罷在、村山七郎儀直末村山弥次郎源隆儀、依通

南帝志、新田儀貞承勅定建武元年越後之地頭職拝領

仕、儀貞御判 一通 村山弥次郎

一、尊氏將軍退治御綸旨壹通

村山弥次郎

一、承勅定城口民部大輔貞政御判 一通

同 弥次郎

一、禁中二而承御判四通

同 弥次郎

一、式部卿親王に御含旨 一通

同 右京

一、伊予守承御判壹通

同 熊王

一、駿河守御判壹通

同 右京

一、対馬守定守左衛門尉頼泰打渡御判壹通

同 中務

一、長尾信濃守頼景公御判壹通

同 四郎

一、上杉相模守房定公御判三通

同 中務

一、長尾為景公御判三通

同 越中

一、上杉兵庫守定実公御判式通

同 源六

一、景虎公御判壺通

同 与七郎

一、椎名弾正左衛門長常判壺通

同 与七郎

於先祖五代討死、右之内四代御当方様御用ニ相立申候

一、村山越中討死仕、実子源六家督仕、今井黒岩之一戦ニ宗徒之

者共討取、方々ニ而忠信仕ル故、御書御判頂戴仕、源六実子村山与七郎

私曾祖父ニ御座候、景虎公江黒田慮外仕候ニ付而、与七郎所へ

黒田和泉を可加成敗ニ而 景虎公より御相談之御書被下置候

一、越中錯乱ニ依而、越中之国主椎名弾正長常所江与七郎軍

兵を合力仕證文有 ▲景虎公御代 二右之与七郎実子弥兵衛

家督仕、能登江被遣候節、軍配御团扇拝領于今所持仕候

一、春日御城より矢沢へ御出馬之御留守 二、新発田因幡春日之御城へ罷

向之時、鎧式百鉄炮参拾 二而渡ヲふせき為越不申候、其後天正九年

於越後蒙御勘気、慶長拾弍年於米沢、諸軍役御免身立何之

並共不被仰付百石拝領仕、其後隱居、実子右京 二跡式百石 二被

仰付、御馬廻江被召加候、右京跡式実子拙者 二百石被 仰付候、其後

百石加増拝領仕候、以上

堀江甚五左衛門由緒

一、謙信様御代私曾祖父堀江甚五左衛門、越前より罷越御奉公申上候、

景勝様御代茅原之城ニ之差置、其後隱居仕、実子堀江文之丞

家督仕、会津江御供申御番頭被 仰付、其子堀江久蔵御小姓ニ

被召仕、御膳番被 仰付候、米沢江御供仕、文之丞致隱居候而、久蔵ニ

家督被 仰付、大坂兩陣相勤、其後堀江甚五左衛門と名を改

定勝様、綱勝様御代迄御奉公申上隱居仕候、実子某家督致

相続、慶安四年より御奉公申上候、以上

相浦善左衛門由緒

一、相浦主計、天正六年御錯乱ニ致籠城御忠信申上候、其節 景勝様

御書拜領仕候、其後本庄越前逆心籠城ニ付而、本庄江御使者罷

越首尾能仕ニ付而、御書拝領仕候、右両通之御書于今持伝申候

一、会津より米沢迄御供仕、其後御足輕組被 仰付候、実子与次郎ニ

家督百七拾石被 仰付、其後主計ニ罷成御奉公仕候、実子善左衛門

無相違跡式被 仰付候 ▲善左衛門実子無御座候付而、弟又右衛門ニ

跡式被 仰付、其後加増拝領仕式百石ニ罷成候、又右衛門男子無

御座候間、五拾騎組之内長尾右馬頭四男持右衛門聲名跡ニ罷成、

式百石無相違被 仰付候、其後善左衛門ニ罷成、十人頭被 仰付、御

奉公仕候、以上

鳴津源太左衛門由緒

一、私前曾祖父嶋津尾張守と申候、其節武田信玄公御朱印を以、

信州長沼之地下人并先々有嶋之族等悉集、長沼之地ニ可有

居住之旨、御朱印頂戴仕、右之御朱印于今持伝申候、其子嶋津

孫五郎、本領安堵之上、御書判を以千弍百七拾五貫之处拝領仕、同長

沼之地ニ居申候、右之御書判于今持伝申候、其後名を改嶋津左京亮

と申時分も御朱印頂戴仕于今持申候 ▲天正十年信長乱之

刻、右之左京亮名を改嶋津常盤介と申時分、芋川越前守致同

心越国江御忠信仕、其上常盤助本領持出申所ニ後、從 景勝様忠

信候条、弥本領安堵尤候、追而可加扶持之旨御朱印頂戴仕御

奉公仕候、右之御朱印于今持申候 ▲常盤介女子壱人御座候、

安江五郎左衛藻門、宝曆八年十二月町奉行被

仰付相勤、然所勤方不宜ん二付御吟味之上

明和五年三月四日御役放元知閉門被 仰付、

其後不調法 二付改易被 仰付、其御御扶持 二而

御馬廻江被召出候

甥弥右衛門と申者を賀名跡 二仕差置候、其後佐渡泔手表之

御一戦之時分、常盤介働高名仕、同姓孫右衛門も働手負申候

一、景勝様会津江引越之砌、常盤介浪人分 二罷成、其節直江山城守

状を被越候様子之儀は、山城守書状于今持申候、右常盤介名跡孫右衛門

儀、其刻須田大炊守同国と申梱と申立寄居申所 二言上申、各別 二

知行拝領仕候、其節慶長五年築川乱之時分も孫右衛門働首 二ツ

討取、御横目被遣横田大学、黒井靱負 二為見申候、其後相馬小手

川俣江働之時分高名仕、御横目築地修理 二為見申候、其後

嶋津常盤介知行拝領仕、右之孫右衛門呼寄弥名跡仕候、常盤介

終而後家督被 仰付、嶋津孫右衛門と申候 ▲嶋津孫右衛門相果、正保

三年拙者十六之年其俣弍百石家督被 仰付、私右之孫右衛門養子ノ
孫ニ御座候、某親は駒沢主税子ニ御座候、近頃之駒沢惣兵衛兄弟ニ
御座候以上

安江五郎左衛門由緒

一、安江中務子同五郎左衛門、越後之内萩之やうかいに罷在候、 景勝様
会津江御国替之以後、 五郎左衛門五百石ニ而同心三拾騎足輕百人御添、仙道之
内塩之松ニ被指置候、其後於信夫福嶋弍百石ニ罷成、 八千石之扱被
仰付後奉公仕申候、 元和弍年ニ致隱居、 実子権兵衛ニ家督被 仰付候
一、元和四年ニ河田平左衛門跡役、 五郎左衛門被召出、 新知弍百石致拝領、 福嶋

郡代御役儀被 仰付、 定勝様より御鷹拝領仕御書をも 一通所持

栗田与兵衛子孫友四郎、元禄年中乱心故

断絶被 仰付候処、弟吉兵衛御右筆被 仰付

相務居候二付、貳拾五石之内拾五石音弟吉兵衛被成下

御右筆相勤居候事

仕候、寛永十一年迄無恙御役儀相勤申内 定勝様江度々ニ御馬

七疋迄差上御奉公仕候、其後眼病故御訴訟申上御役儀差上申候、

寛永十六年ニ某親監物家督無相違被 仰付、万治元年ニ監物

病氣故隠居仕、拙者ニ家督御代官共ニ被 仰付、寛文弐年七月

十一日ニ福嶋拾弐万石之御用等傍輩共五人ニ被 仰付 屋形様御

上下之御賄、其外仙台御上使御馬買衆御賄仕候、寛文四年六月

福島上り地ニ罷成付而、同八月十九日築川御上使御越付、御賄拙者ニ被

仰付候、十九日より同廿四日迄御馳走仕、同廿八日ニ米沢江罷越御馬廻江

被召加、御奉公仕候、已上

一、名字之儀は信州山栗田二御座候、祖父栗田左衛門、本名五十騎組之

内登坂金右衛門、先祖之惣領家より栗田を継、子細不分明之条委不

申上候、右之左衛門、足輕組御預ヶ被召仕候、左衛門相果、実子五郎左衛門

跡式百石被 仰付数年御奉公仕、御加増拝領式百石被下置、其

後江戸御留守居番被 仰付、首尾好相勤罷下、御足輕組被

仰付、御加増共二拝領仕候而三百石被下置、其後三十人頭被 仰付、

廿ヶ年余り御奉公申上候 ▲某儀与板組六人年寄之内永井木工之助

次男、右之五郎左衛門甥聳名跡二仕差置候、五郎左衛門相果、継目五十石

被 仰付、延宝元年より御奉公申上候、 景勝様より先祖江被下置

御書老通所持仕候 ▲御先祖様より某先祖江被下置御脇指

一腰九寸五分国信、右之通両様于今所持仕候、末々ニ御座候故、子細不分
明御座候条、委書面ニ不申上候、以上

今井平左衛門由緒

一、囊祖下平修理、越後妻里一庄帝配之地代々知行仕候而、人形

戸屋之城ニ罷在候、其子源右衛門山浦源五国清之一家ニ御座候付而、

山浦殿御取成ニ而今井名跡ニ罷成候節、一字給今井国広と申候、

御館御一乱御静謐以後、山浦源五信州四郡之守護代ニ被遣候付、

笹岡之城江は今井源右衛門城代被仰付候、為証人源右衛門娘八才ニ

罷成候を春日山御城下へ差上申候、新発田逆心ニ付而笹岡之城

敵味方之地半ニ御座候故、大切之由申上ル付而、鉄炮廿挺、片桐内匠

為武主兵糧共 二五月廿日 二被遣候、 七年之間昼夜尽粉骨城を持

詰申 二付而、 数通之御書被下置候、 所持仕候 ▲仙北由利庄内御仕置

之節 一揆起申付、 湯沢之城江今井源右衛門大将 二被成、 御人数被指向候、

其時御持被成朱之御宰配被下置、 于今所持仕候、 其節 一揆三百余

討取忠信仕候、 其後名護屋御陣御供仕、 高麗国之都へ御使者 二

源右衛門被遣候 ▲会津江御国替之節、 猪苗代之城主今井源右衛門 二被

仰付、 同心被指添、 御足輕七十人御預ヶ被成候、 同年十一月源右衛門死去仕、

実子弥十郎 二家督無相違千石被下置候、 以後源右衛門 二罷成、 米沢江

御移三百三十石被下置内、 信夫荒地百五十石指上申、 百八拾石之御

軍役仕、 大阪両御陣罷立候、 其後実子左馬之助 二百石被下置、 御奉公

相勤隱居仕候、実子幼少ニ御座候付、高山仁助三男某ヲ聳名跡ニ
申立候処、百石被下置御奉公申上候、以上

永井三郎兵衛由緒

一、私養父永井勘助儀、御馬廻之内同姓次郎兵衛弟ニ御座候、定勝様

御代ニ御右筆被 仰付、其後新知百石被下置、御中間江被召加候、勘助

儀、私親永井木工之助聳ニ御座候、右之筋目故、木工之助三男某ヲ

養子ニ仕、蓮心様御代ニ家督無相違百石ニ被仰付、御馬廻江被召加、

明暦四年より御奉公申上候、先祖之儀、右之次郎兵衛孫同姓専太郎可申

上候、以上

飯田与五左衛門由緒

一、為景様御代、曾祖父飯田小次郎御奉公申上候、宇津倉根小屋之

戦功、又岩木小屋之城攻落敵数多討取、其外方々相勤申付而、御書

御感状被下置、享祿四年頸城郡夷守郷之内広田小武分、富田与三

分、為加増被下置候 ▲ 謙信様御代ニ与七郎ニ罷成、其後与惣右衛門と申候、

所々走廻り申二付而、天正五年ニ於能州、鈴郡之内細谷村神保越中

守分、伏見村上田紀伊守分被下置候、末子ニ与七郎と申男子御座候得共

かたわものニ御座候付而、蓼沼日向弟与惣を与七郎姉ニ申合聲名

跡ニ相定差置申候、与七郎儀は御当地ニ而御金山小役人ニ罷成申候

一、景勝様御代与惣舅ニ相添無足ニ而走廻申二付、天正十一年三

条料所之内新堀之地被下置候、其後与惣右衛門隠居仕致法体

竹俣利右衛門子孫只今御馬廻無御座候、若哉此子孫ヲ

竹俣東藏と申而安永三年三月五日御兵具藏役頭

被 仰付、同九年不調法之儀有之、九月廿七日式拾五石

之内五石御取上御役放閉門被 仰付候、東藏孫

与吉、天保年中致盜候 二付、宰配頭志賀孫太郎

宅ニおいて打首名字断絶被 仰付

是念濟と申候、其家督与惣相続仕候、則与惣右衛門ニ罷成申候、会津米

沢迄御供仕、大坂両御陣ニも御供ニ罷登相勤申候、男子無御座付而

相浦主計四男与五郎、是念濟孫ニ御座候間従弟夫婦ニ仕、家督

相続仕、後ニ与惣右衛門と申候、定勝様 綱勝様迄御三代御奉公

申上ル付百人御手明鉄炮組五十人被 仰付、実子某家督相続

仕、寛文五年より御奉公申上候、先祖代々頂戴仕候御書御感状共は

飯田与七郎孫与右衛門于今所持仕候、已上

竹俣利右衛門由緒

一、為景様御代、越後竹俣之城主竹俣式部、後高岸齊と申候、

其子筑後守黒瀧之城ニ被差置候 ▲ 謙信様御代右之筑後守

子筑後守東原之城ニ被指置候、其子式部太夫、後筑後守と申候、竹俣

城ニ被指置候、小田原御陣之時一手役被 仰付御先懸仕、御定之

刻より先ニ城中江乗入候付而、御軍法背為申御不審ニ而蒙御勘氣、京

都江登り誓願寺楚仙上人を頼御訴訟申上、帰国御赦免之砌、於

京都病死仕候、其子藤蔵後右近と申候、春日山御城下ニ被差置候

一、景勝様御館御錯乱之時分、忠信仕付而、御朱印被下置于今所持仕候、

右近子内記御馬廻ニ御奉公仕、其子主馬、 定勝様御近習ニ被召仕、

内記相果其名跡相続仕、御中之間組之御奉公申上、後権兵衛と申候、

男子無御座候付而、 綱勝様御代、御近習之内富沢庄兵衛聳名跡ニ

仕候、庄兵衛子無御座候而相果申ニ付而、権兵衛ニ女御座候間、私儀与板組ノ

内北条市兵衛弟ニ御座候、 聳名跡ニ罷成家督被 仰付、 寛文三年

より御馬廻組ニ被召加、 御奉公申上候、 已上

相浦六兵衛由緒

一、 先祖之儀は惣領相浦善左衛門書上之通ニ御座候 ▲相浦主計五男

三郎右衛門、 定勝様御部屋住より御奉公仕候付而、 新地五拾石拝領仕

御中之間へ被召加、 其後御勘定頭被 仰付、 貳百石拝領仕、 綱勝様

御代迄御奉公仕病死仕候、 実子拙者百石家督被 仰付、 御中ノ

間江被召加、 其後寛文五年御馬廻組江被召加、 御奉公仕候、 以上

佐田弥次右衛門由緒

一、祖父佐田舎人子次男ニ御座候、先祖儀嫡子舎人如申上相違無御座候、

親數馬御奉公之儀、年拾弐より 隆心様御代より御近習ニ被召加、新地

百石被下置候、其後大小姓ニ被召仕、已後御馬廻江被召加候、 蓮心様

御代御中之間ニ被召仕、御加増拝領弐百石ニ被成、其後中小姓ニ被召仕候、

御当代様ニ御馬廻江被召仕候処ニ、寛文六年ニ親數馬死去仕、私五

十石ニ家督被 仰付、御奉公申上候、已上

針生市之助由緒

一、拙者曾祖父儀、越後之内針生と申所ニ居城仕、則針生市之正

盛信と申候、其後一之沢之城ニ広居善左衛門、後出雲卜申候、市之正と

兩人被指置候処ニ、北条安芸守、同丹後ニ被責、市之正討死仕候、右之子
又次郎、後市之助と申候、若輩ニ御座候付而、家来之者ニ番代為致
若松迄御供仕申候、若松ニ而直ニ御奉公申上、御足輕組頭被 仰付、
大坂御陣之時討死仕候、其時立合申衆、蓼沼長右衛門、荏戸九郎兵衛
兩人ニ御座候、右之市之助在世之内より、実子彦次郎御近習ニ被召仕候、
彦次郎跡式、則弟与左衛門ニ被 仰付、御奉公仕候、御当代ニ江戸御
番転ニ罷登、鍋掛ニ而病死仕候、実子某家督被 仰付、寛文六
年より御奉公申上候、已上

蓼沼伊左衛門由緒

一、先祖之儀蓼沼藤五郎弟藤七、天正年中三郎殿御一乱之刻、両度

走廻忠信申上候、此時分八崎簷持之城ニ佐野清左衛門被指置候、為加

勢蓼沼藤七被指遣候砌、忠信を申上候 ▲天正年中新発田因幡

逆心仕候付而、木場之城ニ為武主実城ニ藤七被差置、二之廻輪ニ山吉

玄蕃可被指置旨被 仰付御証文被下置候、于今所持仕候

一、木場ニ在城仕内度々抽忠信候付而河井分并林分ニケ所被下置候

御朱印持申候 ▲壹通 景勝様御証文、木場在城被 仰付候ニ

付而 ▲九通 景勝様御感状之内 弍通御朱印、七通御判形

一、弍通 景勝様御直筆之御書、新発田御退治ニ付

一、壹通 景勝様御謀之御書、新発田家来之駿河ニ被下置候

一、三通 景勝様御内書 ▲四通 景勝様御朱印、兵粮玉菓関所

罷通二付 ▲蓼沼藤七儀受領日向二被 仰付、新発田御退治

以後弥木場二在城仕候、会津江御国替之時分、御籜本之宰配頭

被 仰付、米沢迄御供仕候而病死仕候、実子与八郎二家督被

仰付御奉公仕候、与八郎実子無御座候付而、吉見次右衛門二男造酒

契約仕候、与八郎跡式造酒二式百石被下置、御馬廻二御奉公仕、寛

永廿年二御中之間二被 仰付、寛文十一年造酒病死仕付而、則家

督五十石拙者二被 仰付、御馬廻二御奉公申上候、以上

岡田次左衛門由緒

一、私先祖岡田但馬 謙信様御奉公申上、方々御出陣之節御供仕

年寄申付而、実子十左衛門ニ御軍役相渡隠居仕候、十左衛門儀 謙信様

御一代御奉公仕候、北条下総しうと片野将監父子を討取申様ニ

天正六年五月九日某通之者六七人ニ被 仰付候処、御敵をも可仕覚

悟ニ候哉、逃散申候間、拙者壱人身命を不顧候而飛入、将監、同子

七郎兵衛父子某手ニ懸、二ツ之首ヲ堤下へ持参仕入見参候処ニ、御前江

被召出褒美被遊候 ▲天正六年五月十三日之夜、三郎殿御館ニ御座候

節、鉄炮御足軽三十四人被 仰付候間、請取候而とぶり橋ニ陣取居

申所ニ、十五日之夜半東条堤下より火ヲ懸町を焼ふセキ申候間、右之

足軽過半欠落仕、わつかニ相残候を引連働候、其後右之者共召連

小田河より岩戸へ廻り、宮之尾と申所へ懸り、十六日之八ツ時鉢か嶺江罷登り御対面之所江被召出、御具足甲被下置、其上御錠ニ弥以此上身命ヲ不痛忠孝可申段被 仰出候而罷立申候、右之武具先

年火事ニ逢申候故火失仕候、其後日々之御合戦ニ一度もはつれ

不申候故、同年五月廿三日ニ被召出、大関方奏者ニ而御直之御判

被下置候 ▲同五月廿八日愛峯切通ニ而鉄炮合戦、六月十一日ニ小田口

御働之節、大関手ニ罷在候而、右被 仰付足輕共召連高名仕候而、

則入見参候処、此時も御感状被下置候、右之外方々御合戦ニ一日も

無懈怠御奉公申上候故、御書両通被下置候、十左衛門儀、新発田御

静謐之後隠居仕、実子次左衛門ニ御軍役相渡申候、其後会津ニ

御移被成候時、仙台伊達殿白石江馬を被出候節、十左衛門儀も白石江
罷越候、隱居之身ニ御座候得共、每度於越後数度働功者ニ被思召候而、
罷越申様ニ被仰付候、登坂式部方大外張之櫓十左衛門ニ預ケ申候間、
即請取申所ニ、伊達之者共彼地を数万ニ而取卷候、七月廿四日之暮
方より明ル廿五日之七ツ時迄被責申候、某鉄炮を以敵数多打申候へ共、
式部彼地ヲ被破申故無是非、殊十左衛門儀之少成躰ニ御座候故、生
取之様ニ罷成、岩野間と申所二十五六日番を被付居申候得共、兎角
仕候而欠落、相馬江廻り米沢江罷越、御奉行衆へ様子委申上候、
右但馬、同十左衛門ニ被下置候御感状三通御座候を、一通ハ惣助弟十左衛門
所ニ差置候而、先年類火ニ逢申節焼申候、祇今持伝申分御書式通、

御判式通、御掟書老通、合五通于今所持仕候 ▲ 祖父次左衛門儀越

後二而家督仕、会津江罷越、其後米沢江參、六拾石二而大坂兩御陣二

御供相勤、直江方眼前二而働申段見届被申二付而、元和式年九月廿

一日百四拾石之加増被下置式百石二被 仰付、其後御上洛之節、御

弓廿挺被 仰付、京都へ御供候而御下着之後、先祖岡田但馬、

同十左衛門父子於越後數度之働御忠信申上ル品々之儀御尋被成候

付而委書上申、其上御奉行衆へ被召出、口上二而御尋被成候、右之品々は

每度書上申処有増覺申候間、如此書上申候、次左衛門右之書付差

上申後、加増百石被下置候而三百石二被 仰付、御馬廻之三十人頭被

仰付、年寄申二付而隱居仕、実子惣助二式百石被下置候

一、惣助儀 播磨守様新御弓御仕立被成候付而、御足輕五拾壹人

御作事屋ニ而御吟味被成被 仰付、其上知行百石被下置三百石被

仰付御奉公仕、年寄申付而隠居仕候、実子無御座候付而、弟十左衛門

世倅養子二仕、御軍役相渡候 ▲私之儀延宝弍年より御奉公申上候、以上

関六郎右衛門由緒

一、祖父関新右衛門、武田信玄御家中没落之砌、御当方 景勝様江

御奉公仕、知行千石被下置被差置候、会津より米沢江御移候時分、三百

三拾三石三斗三升ニ罷成、信夫ニ居申候、大坂御陣ニは嶋津玄蕃手ニ付

罷登討死仕候、実子喜四郎九才之時家督仕、右之本地無相違

被 仰付、御馬廻江被 仰付、喜四郎後新右衛門ニ罷成申候、其後

彈正様御上洛之御供仕、延宝弐年新右衛門相果、実子拙者ニ五

十石被 仰付候、以上

伝三郎

富永五左衛門由緒

一、富永備中、斎木土佐弟ニ御座候、初は惣八郎と申候、富永備中聲

名跡ニ罷成、遺官備中ニ改申候 ▲景勝様より 太閤公へ御歳暮之

御祝儀ニ為御使者被指遣候、則石田治部少輔より 景勝様江御返

状拝領仕所持仕候処、先年竹俣勘解由御書共之改候時、本書

差上申候、其写所持仕候、右之富永備中実子同五左衛門、御国替

会津米沢迄御供仕候、隆心様御代ニ御加増被下置、実子同甚右衛門

蓮心様御代 二跡式無相違被 仰付、実子伝三郎 二甚右衛門跡式御

当代二被 仰付候、以上

舟橋久三郎由緒

一、舟橋久左衛門次男、於福嶋正保四年御知行式百石被下置、御馬廻二被

召仕候、万治弍年親久左衛門病死仕、実子某二跡式百石被 仰付、

御馬廻 二御奉公仕候、先祖之儀は舟橋庄左衛門申上通 二御座候、以上

岡村兵右衛門由緒

一、謙信様御代、岡村式部と申者、越後古志之郡 二罷在御奉公申上、

其後越中ニ被差置候、男子無御座付、越中之水橋山城次男惣助ヲ

聲名跡仕候、其後越後江罷歸栖吉ニ罷在候、景勝様御代新

癸田因幡、五十公野道入斎逆心ニ付、下条之城江栖吉衆番転ニ而抱

申時分、因幡、道入斎自身丸外張を焼払、堀を乗申時、下条十助、

佐田舎人、岡村惣助門を開突テ出敵ヲ追払申候、其後新潟より

兵糧為御登被成候時分、敵数度追落申ニ付、惣助兵士ニ罷越、無恙

相届申候、新癸田放生橋御立馬之時も御簾本ニ御供申、会津

米沢迄御供仕、大坂両御陣ニ罷立、定勝様亥之年之御上洛ニ

御供仕、其翌年御加増被下弍百石ニ罷成、同年十一月相果申候、其

子之兵右衛門、大坂御陣ニ無足ニ而罷立、其後御部屋之御奉公申上、亥ノ

年之御上洛ニ御供仕候、惣助相果跡式六拾石被下置、隱居仕、実子
某名跡相続仕、明暦弍年より御奉公申上候、惣助御奉公之品は寛永
年中御尋之時分、親兵右衛門書付差上申留書御座候付、如此申
上候、已上

林部藤左衛門由緒

一、曾祖父林部美濃、於越後御籙本被召仕候、其子右近と申御奉公仕
会津米沢迄御供仕隱居致候、其子主膳ニ跡式被下置、大坂両御
陣ニ罷立、其後 定勝様御代御上洛之御供仕付而、即弍百石
被下置御奉公仕、相果申ニ付跡式某被 仰付、 定勝様御代より

御奉公申上候、以上

益岡太郎兵衛由緒

一、越後ニ而益岡孫左衛門 為景様御在世中、永正貳年越中御陣

御供仕処、 為景様佐州江御退散被成御越年、同三年三月二日

益岡ニ御廻文之御役被 仰付、海路ヲ経テ罷越候処、敵舟ニ乗合

無是非御書をさき捨、船中ニ而立腹を切、海中へ飛入申と先祖

申伝候 ▲益岡孫左衛門子孫次郎ニ跡式被 仰付、 謙信様

御代迄御奉公申上ル処、永禄十年越中御陣ニ討死仕候、孫次郎

直子甚五郎ニ跡式被 仰付候、然ニ天正六年三月十三日、 謙信様

御逝去被成付、春日山御城江籠尽粉骨御奉公申上候、

景勝様御感状于今所持仕候、天正六年九月朔日、鹿嶋分御加増二

被下置候 ▲甚五郎実子弥十郎家督被 仰付、会津へ御移之

節御供仕、御馬廻ニ御奉公仕候、米沢へ御移以後官途仕、益岡与惣兵衛

と申候、大坂両御陣ニ罷立、鉄炮手一ヶ所負申御軍役相勤申候、

跡式長男権右衛門ニ被 仰付御奉公仕候、直子無御座候ニ付、兄

之跡式某ニ被 仰付、御奉公仕候、以上

松木久兵衛由緒

一、慶長十一年 隆心様御三歳ニ被為成候、秋中江戸へ御登被成候、

宗心様被 仰付、私之養父松木右近、祖父松木前之岩見

御供仕罷登候、次之年 隆心様江御奉公ニ罷出、十一年御小姓並ニ

右近儀被召仕候、元和四年正月七日右近十八之年、御膳番被 仰付、

其後御登 城之時御刀持役被 仰付、井上宮内、千坂十右衛門、同善四郎、松木

右近四人ニ而弍番ニ仕御奉公申上候 ▲隆心様御廿之御歳被成御

家督、四月御入国被成候、御知行百石被下置候、同年五月御上洛被成ニ

付而、騎馬ニ而被召連段右四人ニ被 仰付御供仕候、源兵衛御上洛之

時分、騎馬ニ而如右之御奉公申上候、其後御下国被成、四月十九日久々

御近習仕ニ付而御免被成、其上百石加増弍百石ニ被成、御書院番ニ番目

番頭被 仰付候、相番安田治部、香坂造酒、大石主馬、仁科図書、

宇津江主水ニ御座候、不仕合を以右近蒙御勘氣、両年引込罷在候、

被召出百石被下置候、御近習大小姓並より数多外様江被召出時、右近

儀御馬廻組江被 仰付候、会津御勢遣 二罷立候、十弍年御馬廻並之御

奉公仕致隠居、直子半左衛門繼目百石 二被 仰付相果申、実子無

御座候間、五十騎組之内榆井六左衛門三男某聲名跡 二仕

蓮心様御代 二江戸定詰六十人之内 二某も罷成相勤申、其後中小

姓 二被 仰付、御当代 二御馬廻組江被召返候、已上

小嶋左助由緒

一、祖父与次右衛門儀 隆心様御八之歳より御扶持 二而御歩行之御奉公

仕、其後知行五十石被下置、御馬廻江被召加候、親久左衛門儀、与次右衛門

存生之時より御扶持 二而旅御作事御奉公仕、其後与次右衛門相果申時、右之御扶持差上、五十石家督被 仰付、御馬廻之御奉公申上候、某儀親久左衛門相果、則五十石家督被 仰付、代々直子二御座候、已上

左近司茂助由緒

一、於越後曾祖父左近司治部左衛門、身代鎧廿五丁之御役儀相勤罷在処二、河中嶋於御合戦治部左衛門討死仕候、其節嫡子之与惣五才二罷成、幼少二御座候付、右之御軍役指上罷在候、其後与惣年立於御錯乱二遂籠城付而、其御感状、天正六年九月朔日吉田美濃分卜申所被下置候、右之御感状于今所持仕候 ▲左近司治部左衛門世倅与惣、後

左近司喜左衛門 二罷成候、喜左衛門直子三人御座候、則嫡子左近司与惣仕候、

次男左近司助右衛門、三男同新助 ▲左近司喜左衛門、慶長三年会津

御国替御供仕、同六年 二米沢御移之御供仕罷越、五十石被下置候

一、喜左衛門長男与惣儀 宗心様御小姓 二被召仕候、年立大小姓 二被召入

新地百石被下置候 ▲喜左衛門次男左近司助右衛門儀、大坂両御陣之

御供相勤付而新地六拾石被下置候 ▲喜左衛門三男左近司新助儀

喜左衛門相果、家督新助 二被 仰付、五拾石被下置候、右与惣・助右衛門

儀は各別 二新地拝領仕故、親喜左衛門跡式新助相続仕候、新助相果、

実子某家督被 仰付、御馬廻 二御奉公申上候、已上

種村專助由緒

一、曾祖父種村大隅入道と申候、桃井讃岐守次男小次郎と申候を、

幼稚之時より養子ニ仕家督相続、種村彦太郎と申候而越中ニ

罷在候、景勝様御館御錯乱之時、御身方ニ参上仕走廻申所ニ、

大隅入道外戚之子種村三郎次郎、同彦五郎、同縫殿之丞、御館方ニ有之

間、手前江引取申候得由被仰付候条上意之趣様々申遣候へ共、

承引不仕、御館御没落之砌、他邦江退散仕付而、兄弟一味内談ニ而

不引付之由讒人有之付、一乱中之働非忠節謀略之由御不審之間、

色々諫状差上候得共無御許容、終蒙御勘氣申候、其後種村半平卜

名を改、舅水橋山城ヲ頼罷在、会津米沢迄御跡を慕罷越、御当地

ニ而相果申候、其子種村孫三郎、元和四年御馬廻五拾騎之両組より

定勝様御部屋付衆被 仰付候時、宰配頭三俣九兵衛申立を以

御部屋ニ被召仕、後次兵衛と申、新地五十石被下置、実子某其名跡相続

仕、寛文六年より御奉公申上候、父次兵衛幼少之時祖父相果申付而、委儀

承伝不申候、已上

佐藤久左衛門由緒

一、曾祖父佐藤五郎兵衛、越後ニ而古志之郡ニ被差置候、祖父同姓新兵衛儀は

越中ニ罷在、竹田伊豆次男ニ御座候、伊豆儀於越中、土肥、椎名、大峽、

竹田四人之侍ニ御座候、越中没落之砌越後江罷越候処ニ、佐藤五郎兵衛

実子無之ニ付而、新兵衛を養子ニ仕候、五郎兵衛会津米沢迄御奉公仕、

年寄申付而隱居仕、新兵衛二家督被 仰付、大坂両御陣共二

相勤、其後相果、実子三人之内惣領之久兵衛は村田次郎右衛門聲名跡二

罷成、村田久兵衛と申候、二男久三郎二家督被 仰付、病死仕候而、三男

親利右衛門家督被 仰付、御奉公仕候、其後利右衛門相果、直子新兵衛

家督被 仰付、無程相果申付、兄新兵衛跡式某二被 仰付候、

寛文八年より御奉公申上候、已上

尾形弥惣兵衛由緒

一、尾形小七郎、於越後頸城郡武士江下曾根村之内、慶長弍年之暮

拝領仕御奉公申上候、小七郎実子無御座故、某祖父行方六右衛門

舍弟小四郎名跡仕候、其跡勘解由於御当地馬上並ニ被召加御奉公

申上候、江戸御普請ニ罷登候節、役儀無勤罷下翌年相果、勘解由

実子無御座故、拙者親六右衛門弟加右衛門ヲ名跡ニ仕申候、世悴牛之助

若年ニ而相果申付、拙者名跡継申候、某行方六右衛門子ニ御座候、

先祖小七郎以前之儀は存不申候、以上

高山弥右衛門由緒

一、先祖高山仁助、於越後段母衣御鉄炮組被 仰付候、仁助儀於五十

公野討死仕候、実子与太郎十六之年家督被 仰付、於新発田御

陣二十八之年高名仕、則仁助組被 仰付、其上御武具一装束致

拝領于今所持仕候、会津江御国替迄御鉄炮組被 仰付、米沢江御

移之時分、不背二罷成二付而右之組被召上、其後慶長十弍年二御加増

被下置、平兵衛二罷成候、新発田御陣、大坂御陣二鉄炮手を負申候、

御帰陣之後御手明鉄炮組之内廿人御預ケ、其後御足輕組之御鉄炮

五十人被 仰付、三百石被下置、御奉公申上相果申候

一、右平兵衛実子無御座付、五十騎之内下平左馬之助子聳名跡二仕、

家督百石二被 仰付候而、仁助と申候、 隆心様御代二御加増被下

置、御使番被 仰付、御奉公申上候、年寄申付百人御手明鉄炮組五拾

人被 仰付、御奉公相勤病死仕候、実子源左衛門二跡式二百石被下

置候処、無程病死仕、実子辰千代二跡式五十石二被 仰付候処、病人二御

座候間隱居仕、名跡某相続仕候、拙者は今井源右衛門世倅ニ御

座候、寛文八年より御奉公申上候、已上

沢八郎左衛門由緒

一、曾祖父沢志摩之丞、越後古志之郡ニ被指置候、謙信様御在世中

御奉公申上、天正六年御館御一乱之節、始中終春日山御城ニ相詰走廻

御奉公申上候、新発田御陣七年之御戦ニも御供仕候、鳴之丞会津江

御国替之節御供仕、御馬廻組之御奉公相勤、慶長六年米沢江御

移国被成、景勝様御代ニ弍百石被下置、実子甚九郎、後次兵衛と

申候家督被仰付、六拾石被下置候、以後寛永六年江戸御番ニ

罷登、江戸ニ而相果申、跡式直子孫次郎ニ被下置、後嶋之丞と申候、寛文拾壹年迄四拾参年御奉公申上候、跡式実子某被下置候、已上

秋山次兵衛由緒

一、曾祖父秋山伊賀、越後之内糸魚川実城ニ被指置候、天正十壹年

卯月廿三日御朱印御書被下置于今所持仕候、越後より会津御国替之

已後、二本松之城ニ被差置候、会津より米沢江御移被成、伊賀三百石ニ被

仰付、嫡子五郎兵衛儀は越後ニ而新地被下置、会津米沢ニ而も各別ニ

御奉公申上、米沢江御移以後、慶長八年伊賀隱居仕付、次男孫右衛門ニ

家督被 仰付、寛永十年迄三十年御奉公仕、孫右衛門相果跡式

九左衛門二被 仰付、延宝弐年迄四十年御奉公申上候、隱居仕実子

某二家督被 仰付、御奉公申上候、以上

戸沢権左衛門由緒

一、曾祖父戸沢縫殿之助親、信州河中嶋御合戦之時討死仕候、右之

縫殿之助儀、直嶺之城二長尾右京と同城二被指置、直峯之地より春日

山之通融切レ申候二、舟路ヲ以夜二紛御注進申上候二付而、御感状并御

書被下置候得共、於越後火災仕候儀、隆心様御代二某ノ祖父

助右衛門弟、同姓角右衛門二先祖之儀御尋付而、寛永十年十月廿一日二

書付を以申上ル趣相違無御座候、某祖父戸沢助右衛門男子無御座候二

付而、拙者親儀は相浦主計次男二御座候、聳名跡に仕相続仕候、親年寄隱居仕、実子某跡式被 仰付、御奉公仕候、已上

中山市郎兵衛由緒

一、拙者四代之祖父中山玄蕃、景勝様御代御 一乱中忠進申

上二付、天正八年二月七日、浜川本領之地御加増被下置候、御書于今持申候、玄蕃実子無御座付而、中沢十内左衛門子之与惣兵衛を養子二仕、中山名字相続仕候、右十内左衛門儀も 謙信様御 一代忠信仕候、景勝様御代、越後と若松之堺枳尾之城二、宮崎三河兩人御国替之年迄被差置候、与惣兵衛実子無座付而、与板之内五十嵐甚五左衛門

と申者、越後より庄内へ罷越知行式百石ニ而罷在候、甚五左衛門相果、其

子市庄衛門米沢へ帰参仕、従弟清水喜兵衛門所ニ居申候、定勝様

御代ニ中山聳名跡ニ罷成、四十年御奉公隠居仕候、実子与惣左衛門

家督仕以後相果、子無御座候ニ付、某儀兄之与惣左衛門跡式被

仰付、去年中より御奉公申上候、已上

山田卯之助由緒

一、先祖山田次郎右衛門、越後須吉罷在候、長尾左馬之助殿、小越与六兵衛

方、河田九衛門方、舟橋名兵衛、其外御馬廻一在所ニ御奉公申上候得共、如何

様之儀ニ御座候哉知行御取上候、其後会津御国替之節、次郎右衛門実子

山田伝内御跡を慕、会津江罷越候節、手明並之御奉公仕、米沢江

御移之節知行五十石被下置、御抱守衆ニ被召加御奉公仕候、隆心様

御代ニ広居、桑原、山田五十騎並江被召加之節、山田儀は先祖御馬

廻馬上並ニ御奉公申上ル段申上ニ付、右兩人は五十騎組へ被召加、伝内儀者

御馬廻江被召仕候、寛永十七卯月十日、信夫江為横目、広居、桑

原、山田三人弍百石被下置候而、隆心様御条書ニ而福嶋へ被遣、十

余年御奉公相勤申候、死去仕、即御条書ニ通所特仕候、某祖父

山田次郎右衛門、則跡式弍百石被下置、十五年御軍役相勤、以後相果

申候、某親権兵衛ニ五十石被下置、廿年御奉公申上、去年隠居仕候、

拙者家督被 仰付候、已上

山崎利左衛門由緒

一、祖父木村善右衛門、越七騎之内二御座候、越衆之内山崎牛助、善右衛門

妹聳二御座候、牛之助実子無御座候故、善右衛門一男久三郎、山崎

牛之助家督被 仰付、山崎久三郎 景勝様御上洛御宿割被

仰付、御下向之刻藤河迄御供仕相果申候、実子無御座候二付而、

久三郎弟利兵衛兄之名跡被 仰付候、山崎利兵衛大坂兩御陣之

御供仕、正保四年迄御奉公仕、実子某家督被 仰付、御奉公

申上候、已上。

小河清右衛門由緒

一、私祖父小川可遊齋、上州沼田罷在候、謙信様関東御陣之

時分、本領沼田小川之地被指置候、其後沼田武田勝頼公御手二入候時より甲州江被召仕候、天正十年勝頼公御他界、武田衆越後江

被召抱候時、可遊齋儀同前二被召抱、越後へ罷越御奉公申上、親茂左衛門儀可遊齋跡式無相違被下置候、高麗御陣御供仕、其後会津米

沢迄罷越、大坂両御陣二相勤、其後御使番役 被仰付、其後鉄炮

御足輕組被 仰付、其後三十人頭相勤、慶安元年二相果申候、

親茂左衛門男子無御座候二付而、北条右近次男茂左衛門娘二取合聲

名跡二仕候、以後拙者之儀誕生仕候、茂左衛門養育を以、御馬廻之

内明御扶持御座候を、荏戸九郎兵衛宰配頭之時分拝領仕、御馬

廻二御奉公申上候、二ノ丸御普請之時分、小奉行被 仰付、両手共二

相勤候、小川先祖ニ被下置候証文共、同姓茂左衛門所持仕候、已上

左近司半助由緒

一、左近司喜左衛門惣領与惣、慶長三年御国替会津へ御供仕、同六年

米沢へ御移之時も御供仕、左近司与惣儀は宗心様御近習ニ

被召仕、其後大小姓ニ被召入、新地百石被下置、与惣相果世忤無御

座候付而跡式不被 仰付候処、蓮心院様御代、慶安弍年ニ与惣

跡式、親助右衛門申立候処、則与惣跡式ニ拙者被 仰付、身立大小姓ニ

被 仰付、御扶持被下置候、今程馬廻被召加御奉公仕候、委細同

姓茂助所より可申上候、以上

長谷川六兵衛由緒

一、越後ニ而は内山左京、越中ト飛驒ト境付之城ニ被指置候、其後飛驒之

新五ト申者夜掛仕付而討死仕候、其後内山左京娘ニ越中甚之助

ト申罕人ニ而罷在申候を、長尾和泉、篠井弥七郎、山岸両三人之被申

上、内山左京聳ニ被仰付、越後ニ而御奉公仕候、会津迄御供仕、会津ニ

而直江山城ト少出入御座候付、右之名字相拾申長谷川左京ト

罷成、篠井預リニ而米沢江罕人ニ而罷越候、同子左助、其後ニ御膳部

御扶持ニ取付申候、同子六兵衛、御馬廻江被召加候、已上

江部七郎兵衛由緒

一、先祖江部内蔵之助、身立越後之内蛛か地申所ニ而、諏訪と申

者と内蔵之助喧嘩仕申故、双方御勘氣被 仰付知行被召上候、

其後御勘氣御赦面被成、御扶持切米ニ而御馬廻之御奉公申上候、寛永

十七年ニ知行五十石拝領仕、小山田多門ニ御付被成所ニ、其年十月

二日、蔵之助相果申ニ付而知行被召上、跡式ヲ長左衛門ニ被 仰付、

御扶持切米被下置、御馬廻知行衆同前ニ江戸御番共ニ御奉公申上候、

小山田多門、大比良左門御付被成候、左門隱居仕ニ付而、跡役承応弍年

江部長左衛門ニ被 仰付、小山田、浅羽兩人ニ御付被成候処、寛文弍年ニ

小山田・浅羽御抱ニ付而、長左衛門右之御馬廻へ被召返御奉公相勤、隱

居仕付而実子無御座候故、秋山三郎兵衛次男拙者ニ跡式被

仰付御奉公申上候、已上

原右衛門由緒

一、曾祖父原豊前、信州山田と申所知行仕、千百石之御陣役仕
罷在候、其上為御加増壁田郷三百貫、田麦郷三百貫、寿徳寺七十
貫、合六百七十貫之処被下置候、御朱印所持仕候、越後御国替之
節芋川越前ニ被差添、白川御城二ノ丸ニ罷在候、其後須田大炊ニ
被指添築川ニ罷在候、祖父原利右衛門庶子ニ御座候故、無足ニ而
罷在候処ニ、隆心様御代ニ安田筑前、香坂四郎兵衛、芋川市之正、
利右衛門先祖御忠節申上候品遂披露候処ニ、被聞召上、所持仕候

御朱印御書共ニ御 上覽被遊、其上新地貳百石被下置、御馬廻被

仰付福嶋ニ被指置、親同姓利右衛門家督被 仰付、即貳百石

被下置候処、蒙御勘気知行被召上申候、某儀は寛文十年ニ

被召出、御扶持被下置、御馬廻ニ御奉公申上候、已上

武頭ノ四拾貳人

長尾五郎兵衛由緒

一、曾祖父長尾市衛門、度々忠信申上候付而、謙信様下田之城ニ被

差置相果申候、家督実子市右衛門ニ被 仰付、御館三郎様と御取

合之節走廻申付而、知行被下置御書壹通所持仕候、栃尾、三条、

新発田表、越中、関東諸所之御陣之首尾ニ逢御奉公申上候、

一、文禄三年三月御上洛 景勝様越府を御立被成付、御供仕罷

登、於京都祖父市右衛門相果申候

一、拙者親市右衛門儀は楠川出雲次男御座候、聲名跡ニ罷成、越後より

会津御当地迄御供仕、大坂両御陣御軍役勤相果申候、実子

拙者家督被 仰付、 隆心様御代ニ御加増弐百石被下置候、無

程御足輕鉄炮組五拾人御預被成、三百石被下置候、其已後百挺御

手明鉄炮五十御預被成、今程三十人頭被 仰付、御奉公申上候、

以上

大橋伝右衛門由緒

一、大橋若狭と申者、若名弥次郎と申、後ニ与惣左衛門と申候、其時

分は 政景様江御奉公仕、其已後 謙信様江御奉公仕、沼田

之城ニ被指置候、其頃拝領仕候知行御書付所持仕候、其後信州

柏葉鉢と申城ニも被指置候、其証文之御書付も御座候、此地ニ

罷在時時分、証人奉行被 仰付、其頃高麗御陣御座候ニ、御

供可仕之由申上候得は、大切之境之地ニ候間、御供無用と御意

被成ニ付而、御跡より世倅兵左衛門、十六之歳名小屋迄罷登、 御目見

仕、夫より御供仕罷帰候、其後祖父若狭、最上御陣ニ罷立、七十七ニ而

討死仕候、其子大橋兵左衛門儀、大坂両御陣ニも罷立、其後百人御

真嶋仙右衛門子孫專右衛門、御中之間被

仰付罷在候処、勤方番頭登差図を

不用度々不届之儀有之二付、天保年中

改易被 仰付候、其後不届至極之儀度々

有之二付下、籠屋敷二而詰籠入二相成候事

手明鉄炮五拾被 仰付、後三三十人頭被 仰付、其内小国江も老年

被遣候、其後年寄申付而、隠居之御訴詔仕申処二百石被召上、式

百石被下居役二而被指置候、拙者儀与板組之内永井金左衛門世倅二

御座候、兵左衛門所へ名跡二罷越、兵左衛門式百石之知行、二・三年過

百五十石被召上、五十石某二被下置候、其後 播磨守様御代二式百

石二御加増拝領仕候、其已後三百石二被成、御使番役被 仰付候、当

年迄十四年相勤申、御足輕五拾人被 仰付候、已上

真嶋仙右衛門由緒

一、祖父真嶋民部、大室左衛門弟二御座候、信州真嶋と申所二罷

在、御奉公仕候品々可有御座候得共、存不申候、祖父民部忠信

申上儀ハ有増書付差上申通、何処如此御座候

一、信州海津之城ニ木曾野山室と申者籠城仕時分、兄ニ御座候大室

左衛門は長沼之城ニ籠り忠信仕候、民部儀は地下鑓を召連、海津ニ

向而手切之放火を上申候、清野、寺尾、西条同前、東条池田之宮ニ而

神水仕、もったい平ニ御陣之時分、連判ニ而忠信申上候事

一、麻績落城之時分、横河孫左衛門と申者討取、御前へ罷出御

目見仕候 ▲信州御手ニ参、其後海津之城村上源吾殿在城之

時分、屋代逆心被仕河中嶋江相働申候時、乗切ニ罷出組討仕、

切疵ニヶ所負申高名仕、則村上殿江罷出候得は、無比類働之由

御前江罷出御太刀拝領仕候 ▲新発田御陣之時分、赤谷落城

之刻、名有侍討取申、星甲もきつけ二致、御前江罷出申候

得は、六具共二懸御目可申之由 景勝様御意被遊、其上為御

褒美御小袖老重被下置候 ▲関東八王寺落城之時分高名仕、

御前江罷出御褒美二預申候

一、祖父民部隠居仕、親専右衛門二跡式被 仰付、宗心様御代二

御上洛、大坂両御陣御供仕走廻申、隆心様御代二御上洛之御供

仕、罷帰候而弍百石被下置、御奉公申上候、隆心様御遠行之年、

親専右衛門隠居仕、則拙者二弍百石被下、于今御奉行仕候、以上

西堀七左衛門由緒

一、先祖飯山之城ニ被指置由及承候、私若年ニ而祖父親ニ別申候故、

委細存不申候 ▲先七左衛門は岩井民部次男ニ御座候、西堀兵部

聳名跡ニ罷成、兵部家督仕、御馬廻ニ被召仕候、御足輕廿人御預被成、

其後御近習ニ被召仕、小道具組五拾人被 仰付、知行四百石被下

置候、親庄蔵儀、若輩より御近習仕、年高大小姓ニ被召仕、先七左衛門

家督式百石被下置候、蓮心様御代ニ御馬廻ニ被召加候、其年

庄蔵死去仕、家督私ニ無相違知行式百石被下置候、以上、

竹俣七郎左衛門由緒

一、為景様御代、竹俣式部、後ニ高岸斎と申候、越後竹俣之城主、

其子筑後守黒瀧之城主ニ被差置候、景虎様御代、右之筑後子

筑後、越後東原城主ニ被仰付、其子式部大夫、後筑後守と申候、

竹俣城ニ被差置候、小田原御陣之時、一手役被仰付御先懸仕、

御定之刻より先ニ城中江乗入候付、御軍法背たる御不審ニ而蒙御

勘気、京都江登、誓願寺素専上人を頼御侘申上、帰国御赦免

之砌、於京都病死仕候、其子藤右衛門、後ニ弥兵衛と申候

一、景勝様御館御取合之時分、忠信仕付而御書頂戴仕、于今所持仕候、

会津より御当地江御越被遊已後、御馬廻三十人頭被仰付候、其子源太、

後ニ弥兵衛と申候、定勝様御代ニ御加増拝領仕忒百石ニ罷成候、

弥兵衛相果候時分、拙者幼少ニ御座候故、為番代長尾五郎兵衛弟

織部入贅仕、則式百石被下置候、織部相果申付而、拙者ニ跡式
無相違式百石ニ被 仰付、承応式年より御奉公仕候、已上

小越平兵衛由緒

一、小越平左衛門儀 謙信様御代、越後之内村松要害攻落刻、上
屋類討取致忠進候付而、御書拝領仕候、其後河田豊前守ニ被
差添、古志郡之諸仕置軍法等、長尾紀伊守、小越平左衛門相役
被 仰付、其已後越中之国江河田豊前被指遣候時、右兩人越中ニ
罷在候、此時御書拝領仕候而通于今所持仕候、実子小越宮内、
実子無御座付而、古志之内よろ山之城代志賀十左衛門三男賀

名跡二致、小越九右衛門二罷成候、御国替会津米沢迄御供仕候、其以後御足輕御預ケ被成候、実子小越与六兵衛、宗心様御近習二被召仕、隆心様御代二御馬廻並二被召出、其後御使番役被仰付候、実子某 蓮心院様御代より御奉公仕候、以上

舟橋庄左衛門由緒

一、舟橋平兵衛、近江之國大津二罷在、佐々木殿没落之時分相果申候
一、右実子舟橋名兵衛儀、従弟河田豊前守御当家様江罷出以後、右之名兵衛知行拝領仕御奉公致、慶長二年伏見御舟入御普請奉行相勤申候、会津江御移已後、仙道之内塩松郡郡代職被

仰付罷在、米沢江御移之後、信夫郡之内飯坂ニ被指置、御扶持方之

者拾人御足輕廿人御預ケ、三千石之代官被 仰付、其以後大

坂御陣ニ罷立申候、御軍役御馬並ニ相勤申候、福嶋へ罷越候刻、

御扶持方御足輕十人被召上、残而十人は普代之者慕罷越候砌、

御公儀様江申上候得は御扶持被下置、足輕並ニ罷成ニ付而、私代迄

御預被成候 ▲右名兵衛実子久左衛門ニ家督無相違被 仰付、

寛永十年二八千石之御代官仕、亥之年之御上洛ニ御供騎馬ニ而

罷立申候 ▲舟橋久左衛門実子名兵衛ニ家督無相違被 仰付、

御奉公申上候 ▲養父名兵衛実子無御座候付而、関原八左衛門次男

拙者聳名跡ニ参、寛文元年ニ家督無相違被 仰付候、已上

大瀧八左衛門由緒

一、私本名上倉 二御座候処 三、曾祖父新兵衛代 二、信濃之内大瀧之城

景勝様御代 二御預ヶ被成候、其節名字をも大瀧 二可被成之由被 仰付候、

右之城 一乱有之時分、遂籠城首尾好働申付而、御感之上

湯浅領被下置候、其御書未持申候 ▲右之新兵衛死去仕、其

世忰伝右衛門家督仕、名を替後 二甚兵衛と申候、其後館山江被遣

御留守居被 仰付、其上仕置并諸口手判等之儀迄、念入可

申付之由 二而御書被下置候、于今持伝申候

一、右之甚兵衛、会津迄御供仕、無間も会津 二而死去仕候、其世忰新兵衛

家督仕後、名替甚兵衛 二罷成、此方迄御供致参、其後窄人仕

他所江罷出申候、 隆心様御代帰参仕候得は五人扶持被下置、

其身望之通与板組ニ被 仰付、一兩年御奉公仕候処、御右筆被

仰付、知行百石被下置候、 蓮心様御代迄右之役儀相勤申候、

然所、年寄御右筆役難勤候故御侘言仕候得は、御中之間江被召

加、其已後病氣故隠居之御訴詔申候所ニ、知行無相違拙者ニ

家督被 仰付、御馬廻組江被召加候、其後、 蓮心様御代ニ中小姓ニ

被召仕候、御遠行以後又御馬廻江被召返、只今迄御奉公仕候、以上

河田四郎右衛門由緒

一、川田入道宗理軒 謙信様御馬廻ニ被召仕候、宗理軒嫡子河田喜三郎、

天正六年二 景勝様御馬廻ニ被召仕候、後ニ番頭被 仰付、慶長

三年ニ会津江御供仕、同六年ニ米沢江御供仕候、河田喜二郎嫡子

河田長吉、是は 宗心様御小姓ニ被召仕候、後川田長吉病死仕

付而、弟川田新兵衛跡式被 仰付、則御小姓ニ被召仕候、 隆心様

御代ニ御馬廻ニ被 召仕、五年御奉公仕候、其已後御中之間ニ被召仕時分、

会津御勢遣何も同前ニ相勤申候、 蓮心様御代ニ御使番被 仰付、

其後病氣故隠居仕、拙者ニ跡式被下置候、以上

室高与惣兵衛由緒

一、室高左京、 関東上州之内沼田と申所ニ罷在、 上州信州甲州三ヶ国

之境わりか嵩之城ニ而討死仕候 ▲官領様越後江御出被成以後、

左京子六才之時御跡を慕罷下候、 謙信様御前江被召出、家

来扶持分ニ知行五百石被下置候、幼少之内照陽寺ニ御預被指置候、

御館御一乱之時、十五歳ニ而高名仕付、十五左衛門と官途被下置候、家

官故其後左京ニ被成、御足輕百五拾人御預被成候、御国替ニ付而会津・

米沢江御供仕、於御当地病死仕候 ▲左京子新六郎 宗心様

御近所ニ被召仕候処ニ、蒙御勘気窄人仕付而、一類之内発知新左衛門

弟右馬之助聲名跡ニ被 仰付、御奉公仕処ニ、百挺御手明鉄炮

組五拾人御預被成候、其已後三十人頭被 仰付候、其時分左京ニ罷成候、

蓮心様御代左京隱居仕候、跡式拙者親喜兵衛相続可申所ニ

病死仕故、祖父跡式私ニ被 仰付、御奉公十四ヶ年仕候

一、参州家康公、甲州信玄公両将より先祖江被下候御書等子細有而

高野清浄心院ニ有之由、被仰越候状所持仕候、以上

若林九郎左衛門由緒

一、私曾祖父若林九郎左衛門、越中之館山と申所之城主ニ御座候、越

中より元龜弍年ニ御手ニ付御奉公仕候、其時分被下置候御書御座候

一、天正弍年十月十日ニ御知行被下置候、ひたの森村之内つの川村、

水品村、大関弥七郎分三ヶ村被下置候目録御座候

一、天正六年ニ働申付而、石坂左近分、河村孫六分、後藤勘左衛門分

被為宛行候御感狀御座候、其已後魚津之城ニ而討死仕候

一、祖父源左衛門と申、実子ニ御座候而御奉公申上、大坂御陣ニも罷立、其

後病死仕候 ▲私親源左衛門と申、是も実子ニ而御奉公仕候

隆心様御代ニ御知行式百石被下置候、其以後病死仕候、某迄四

代実子ニ而家督仕候、已上

芹沢孫右衛門由緒

一、為景様御代ニ芹沢弥四郎ニ御書被下置候趣、於去十日頸城郡

原、対宇佐美一類、柿崎以下数刻之一戦ニ、於眼前碎手突鎧之

条、敵数千人討取上、負鎧手一ヶ所之神妙之至、感之候と被遊、

被下置候御書于今所持仕候 ▲謙信様御在世中数度走廻

御奉公申上候、弥四郎跡実子又次郎、会津江御供仕、米沢迄御

馬廻之御奉公仕候、又次郎実子善七郎後ニ彦左衛門と申候、景勝様

御代ニ御小姓御奉公仕、慶長十七年十二月五日ニ御知行百石、五十川

村、添河村ニ而被下置候、平林蔵人黒印御座候

一、大坂両御陣御供仕、御近所之御奉公仕候、御上洛之御供数度罷立候、

寛永十年ニ親彦左衛門御加増拝領仕、貳百石ニ罷成御中之間之

御奉公仕候而、承応三年御馬廻組付之御足輕五十人御預被成、三百石被

下置六十年余御奉公申上候、彦左衛門跡式実子拙者ニ被仰付、当

年迄十ヶ年御奉公仕候、已上

長尾次郎左衛門由緒

一、曾祖父古志之長尾和泉、從 謙信様御書一通被下置于今持伝申候

一、右之和泉世倅平七郎家督仕、無程相果申候、実子伝兵衛ニ跡式被

仰付、從越後会津御当地迄御供申候、大坂両御陣首尾好相勤

申候、 隆心様御代ニ貳百石被下置、若松御勢遣ニ罷越、御当代

迄御奉公申死去仕候、家督実子拙者ニ被 仰付、御奉公申上候、

越後ニ而打申候幕于今所持仕候、幕之紋左九ツ巴ニ御座候、以上

武藤伝之丞由緒

一、曾祖父武藤小四郎儀、越後直嶺ニ被差置候、拾九歳ニ而高津と

申所ニ而討死仕由ニ御座候、祖父武藤善次郎、右之小四郎討死之後、本
知ニ下曾根村と申所ニ而御加増被下置由承申候、善次郎、後ニ清右衛門と
申候、会津米沢迄御奉公仕候、実子九郎左衛門儀、山下名字ニ罷成ニ
付而、私親甚兵衛は山田彦右衛門弟ニ御座候を聲名跡ニ罷成候、
蓮心様御代二百五十石御加増拝領仕、式百石ニ而十人頭仕相果候、
実子某延宝元年ニ家督被 仰付候、已上

福嶋右兵衛由緒

一、曩祖福嶋清兵衛、於越後從 景勝様析生之地之内被下置
御書并召仕之者五人毎月三度宛諸役所罷通御朱印之通

御判所持仕候、其子主水某為二は曾祖父二御座候、景勝様

御上洛之御供仕罷登、於京都蒙御勘氣罷下、剩腰居二罷成、

老後二相果申由二候、私祖父茂左衛門、右之主水世忤二御座候、

隆心様御代二御右筆二被召加、新知百石被下置、其後御加増拝

領仕弍百石二罷成相果申候、実子茂左衛門二家督無相違弍百石二

被 仰付、御中之間江被召入候、蓮心様御代中小姓御番頭被

仰付、御当代二御馬廻組江被召加候、茂左衛門病氣故去年隱居仕、

実子某二家督被 仰付、御奉公仕候、已上

石口長兵衛由緒

一、石口采女弟内匠と申候、宗心様御籜本ニ被召仕候、然所ニ天

平十年信長公小国江御勢遣之節、越中魚津之城江被差越、兄弟

一同ニ六月三日ニ討死仕候、右之内匠跡式実子与市ニ被 仰付候、

会津米沢迄致御供、無程相果申候、与市男子無御座候付而、女子ニ

与板組之内塩井玄蕃一男久左衛門聲名跡ニ被 仰付、五十石被

下置御奉公仕候、大坂両御陣ニも罷立、其已後 隆心様御代

寛永四年御加贈被下置、貳百石ニ罷成候、正保三年六月病死

仕候、実子半兵衛ニ家督無相違貳百石被下置候、十人頭ニ罷成御

奉公仕、延宝二年二月病死仕而、実子拙者ニ五十石被下置、家

督被 仰付候、委細同姓善兵衛可申上候、已上

岩舟弥市右衛門由緒

一、曩祖岩舟藤左衛門、信州岩船と申所代々罷在候、為景様御

代屬御手 謙信様御在世中数度走廻申付而、御書数通于

今持申候 ▲新発田尾張守府内ニ被指置候節、会津本田、吉江、

高梨、小中、岩舟何も御仕置堅固ニ仕候得由被 仰付候御書両所

持仕候 ▲永禄拾弍年二月六日、岩舟藤左衛門、羽田六助兩人ニ

御軍役被 仰付候御条書ニ、鎧百挺小箆三本繩鍬なた被

仰付候御朱印所持仕候 ▲越中江御横目ニ被遣候、岩舟藤左衛門、河田

定隣軒ニ被下置候御書所持仕候 ▲片山分并水野分兩地郡

司共ニ公役不入ニ被下置候証文、家広、長資兩人居判御座候、

一、越中ニ罷在候節、大関常陸、岩舟丹波入道、黒金上野三人ニ被下置候

御書所持仕候 ▲天正六年九月十六日、丹波入道 一男岩舟彦五郎、

春日山江遂籠城走廻申付而、吉田分被下置候故、各ニ御奉公仕候

景勝様御朱印所持仕候 ▲天正十年七月廿九日、庄田隼人

跡役岩舟彦五郎ニ被 仰付候節、官途仕藤左衛門ニ罷成候、御料

所御仕置同心以下被 仰付候御書所持仕候 ▲岩舟 一策斎ニ被下置候

御条書、大関、広居、丸山、丸田御書面同事ニ被下置候、

一、天正十一年二月、御免舟二艘海河共ニ丹波入道ニ被下置御書所持仕候、

一、越中ニ而祖父藤左衛門、高麗御陣御供仕、其已後会津江御国替、御馬

廻組ニ而慶長六年七月御上洛之御供相勤、米沢江御移已後隠居

仕、実子吉兵衛二家督被 仰付、御奉公仕候、吉兵衛死去仕、実子

無御座付而弟弥市二跡式被下置候、後二藤左衛門二罷成候、蓮心様

御代式百石被下置候、其後鮎貝江被遣候、右之所二而死去仕、実子拙者二

跡式被 仰付候、已上

大井田兵右衛門由緒

一、祖父大井田平右衛門、男子式人之内、大井田弥太郎惣領、後二平右衛門二罷

成候、私親二御座候、宗心様大坂両度之御陣二御供仕、無恙走廻

罷帰候、御上洛之時分、高山平兵衛、大井田平右衛門兩人鉄炮大将二而御

供仕候、其後越後御普請之節横目被 仰付、無何事走廻御奉公

仕候、其已後親平右衛門相果、某兄与十郎ニ跡式被下置候、無間も相果、其上与十郎実子無御座候付而、弟某ニ家督被 仰付候、先祖之儀大井田権右衛門具ニ申上候付而、右之通ニ御座候、已上

藏田佐五之丞由緒

一、天正六年二月二日、北条安芸守入道次男北条近江守を討取

候而、景勝様江忠進仕候、其以後佐渡之國御手ニ入為御横目

波地江被指越住居仕候処ニ、太閤様江為御証人、越後より畠山一庵老

御幼少之時、上方江御登之時、為御守藏田佐五之丞御付添被成罷

登申候、慶長三年会津江御国替之砌、御馬廻之番頭被 仰付候、

殊先祖ニ被下置宰配于今所持仕候、其已前之儀は存不申候、左

五之丞嫡子与三郎と申候、從若年 宗心様御小姓ニ被召仕候、与三郎

廿弍歳ニ而相果、実子左五之丞幼少ニ付而、為番代跡式蔵田喜右衛門と

申者ニ被 仰付候、右之喜右衛門は上野喜左衛門と申者之子ニ御座候、

隆心様御代ニ弍百石被下置候而御使番被 仰付、御奉公仕相果

申候、其以後拙者家督仕候而 隆心様御代より御奉公仕、

蓮心様御代丑寅両年、江戸御城御普請ニ付而、罷登御普請奉

行仕候、其後信夫之地江檢地之御横目被 仰付、両年相詰

郡中檢地仕、其以後二之御丸石垣御普請奉行被 仰付候

処、無恙相勤申候、以上

南七兵衛由緒

一、官領上杉憲政様越後江御移之節、關東より南道閑齋御供仕

罷越候、其後古志之郡之内被指置候、道閑齋実子南七兵衛、若名

定家之助と申、度々走廻高名仕由ニ候 ▲米沢ニ而親七兵衛ニ忒

百石被下置、大坂御陣ニ御足輕五十人御預被成罷立候、其跡式実子

拙者兄勘左衛門ニ六拾石被下置、御奉公仕相果申候

一、拙者儀は宮越名字相続仕、御扶持方組之御奉公仕罷在候処、

兄勘左衛門実子無御座付而、拙者家督被 仰付、六拾石被下置、御馬

廻之御奉公三十七年相勤申候、已上

長彦兵衛由緒

一、宗心様御時より長次左衛門御膳部被召仕候、次左衛門果申、実子

三左衛門家督仕候、三左衛門果申、拙者後家人仕、蓮心様御代ニ

御馬廻組江被召加候、私儀上野内膳次男御座候、次左衛門より以前之儀一切存不申候、以上

河野与右衛門由緒

一、親河野与右衛門、拙者幼少之時分死去仕候付而、猪苗代組之内小泉

彦左衛門と申者陣代ニ頼申、三十五年已前より拙者御奉公仕候間、

先祖之儀一切存知不申候、信州之者ニ御座候由申伝候、以上

若林三右衛門由緒

一、私曾祖父右近、於越州御馬廻ニ被召仕候、先年御館御取合之

時分、嫡子從類迄為囚人被召取付而、次男喜六幼少ニ候故隱置

申候、夫を相捨春日山江有詰御奉公申上候事

一、新発田最前御出馬之時分、於御眼前天正十年九月二日ニ

八幡口と申所ニ而討死仕候、就夫曾祖父跡式祖父喜六ニ被

仰付候、因之若輩故様子睨と存不申候事

一、祖父御奉公之儀、新発田落城之時分、実城橋を引申所、堀を越

諸勢先掛仕候、其頃喜六十八歳ニ罷成候、委嶋倉孫左衛門被存候事、

一、仙北鍋倉之地御攻之時分御供仕、堀塀最前ニ越働申儀、小倉

民部被存候事

一、奥御陣菅名江被為寄御馬候時分、二重之堀を越本丸江押込

働申儀、富所隼人其外傍輩中存候事

一、大坂弑度之御陣は不及申、右度々相働之处、先年祖父代二御尋

付而、元和弑年委細申上候事 ▲祖父若林九郎左衛門死去仕、

跡式叔父源兵衛二無相違弑百石二被 仰付候、源兵衛二兼而被下

置知行、九郎左衛門三男某親与一左衛門二被下置候、親死去仕、八年

已前二私家督被 仰付候、証文等紛失仕候間、委細不申上候、以上

福嶋久左衛門由緒

一、祖父福嶋左右衛門八福嶋大炊之助弟二御座候、越後琵琶嶋二罷在

御奉公申上候、越後より会津江致御供、会津より米沢迄供奉仕、六拾

石二而御奉公申上候、祖父杳右衛門実子無御座候付而、五十騎組之内

南雲茂左衛門甥南雲久左衛門聳名跡二仕候、然所二祖父杳右衛門

相果候刻、亡父久左衛門家督可仕を、芹沢三郎左衛門申様二は、拙者儀

杳右衛門為二は甥二御座候間、杳右衛門跡式二は芹沢三郎左衛門可罷

成由色々申廻、組頭三侯将監を以申上候得は、杳右衛門知行被

召上候而、無程亡父久左衛門相果申候、拙者儀久左衛門実子二御座候

付而、明暦元年 蓮心様御代二右之品々申立候得は被

聞召上、本知六拾石御返被下置、只今迄御奉公申上候、以上

下条と申者御馬廻二今は無、何れ頃御呵二相成候哉

下条武兵衛由緒

一、越後ニ而下条大学、後安閑齋と申候、実子無御座候付而、長尾和泉子刑部を聳ニ仕、名跡を譲申候、刑部跡式雅楽之助、是は岡村主膳子ニ御座候、刑部甥ニ御座候付而養子ニ仕候、其子伝左衛門直子某迄二代実子ニ而相続仕候、其前之代々他名より相続仕候ニ付而、委儀承伝不申候、私儀十ケ年以来御奉公仕候、已上

瀬下覚兵衛由緒

一、先祖松木将監と申候、越後之内古志の郡ニ罷在候、其後ひわ嶋ニ而将監ニ御足輕御預ケ被成候、其子与次郎代ニ御膳部ニ而御奉公仕、其時節松木岩見被申付、母方之名字瀬下ニ罷成候、其子喜兵衛代迄

二代御膳部 二而御奉公仕候而、喜兵衛代 二御馬廻 二被召出候、喜兵衛跡式
宮嶋与次右衛門弟某聲名跡 二罷成候故、瀬下先祖之儀委存
不申候、以上

鰐淵忠左衛門由緒

一、曩祖鰐淵主水、能州之者 二御座候、永祿年中 二 謙信様
能州江御出張之節御手 二属、七尾之城御退治之時分御案内
仕処、思召之通無程落城、御帰陣之御供仕、越後江罷越候而御奉
公申上候、主水実子次兵衛 二家督被 仰付御軍役相勤、御国替
会津 二而御馬廻組之御奉公仕候、実子忠右衛門 二跡式被 仰付、

米沢ニ而旅御作事之並ニ被 召仕候、 定勝様御代ニ御馬廻江被召
入御奉公申上候、 忠右衛門実子無御座付而、 古藤長右衛門弟清八郎
養子ニ仕、 忠右衛門儀は隠居之御訴詔申上候処、 無相違家督被
仰付御馬廻組ニ而御奉公仕候、 清八郎相果実子拙者ニ跡式被下
置、 万治弑年より廿ケ年以来御奉公仕候、 已上

水越三郎兵衛由緒

一、 水越左馬之助儀、 越中ニ罷在時分 謙信様より度々御攻被成ニ
付而 信長公奉頼御侘申上所ニ相叶、 左馬之助弟将監証人ニ指
上申候、 其後左馬之助儀、 景勝様江御奉公仕候、 右之証文

水越子孫宝曆之頃欠落ニ付名字

の絶

本来は前丁の水越の部分にあつたものか。

撮影時はこの部分に挟まっていた。

景勝様より被下置御書式通 信長公より被下御黒印式通于今所持

仕候 ▲左馬之助儀、庄内御陣ニ討死仕候、跡式実子左馬之助ニ無

相違被 仰付候、其已後高麗御陣ニ御供仕候、越後会津米沢迄

御供仕、大坂両御陣相勤申候 ▲隆心様御代ニ鎧御足輕五十人

被 仰付、御上洛御供仕候、其後隱居仕、実子与五左衛門ニ家督式

百石ニ被 仰付候、与五左衛門跡式実子与五左衛門ニ家督式百石ニ被

仰付候、与五左衛門跡式某ニ被 仰付候、拙者迄五代御奉公仕候、従

是以前之儀は存不申候、以上

一、越後二而本田岩見新山之城二被指置候、軍配之御団拝領仕候、其後

田切之城二罷在候而度々忠信申上候 ▲新発田御陣二も御宰配

拝領仕、数度走廻高名仕候御書数通御座候、同姓八右衛門所二

于今所持仕候 ▲石見相果、実子源右衛門二跡式被下置、米沢二而

式百石被下置、御馬廻組二御奉公申上候

一、源右衛門相果次男長八、後二源右衛門と申候、是二家督被 仰

付候而五十石被下置、御馬廻組之御奉公申上相果申候、跡式実子

拙者二被 仰付、十ヶ年以来御奉公仕候、以上

一、石川備後実子宮内、從越後御供仕米沢迄罷越候、知行四百

五十石被下置、侍組江被召入御奉公仕候、江戸御番ニ罷登、於江戸病死仕候、名跡男子無御座候故、跡式御立不被成候、

隆心様御代ニ石川名字親類就御尋、石川宮内孫ニ御座候故、

親加右衛門石川跡式被 仰付、御馬廻江被召加候、加右衛門相果

実子某ニ家督被 仰付、御奉公仕候、以上

榆井弥次兵衛由緒

一、榆井治部儀、於越後御軍役之品、鎧十五挺、籠式本、同腰指鉄砲
砲挺、金之前後御軍役仕候、実子修理儀は各二一騎一挺二而

御馬廻ニ被召仕候、則証文御座候 ▲謙信様御代、永祿六年亥癸

正月廿日、弍之分之地郡司不入、石坂甚助跡地被下置候、河田豊前

判于今所持仕候 ▲景勝様御代天正六年五月廿七日御感状ニ而

楡井修理二本領返被下置候御判形于今所持仕候 ▲天正八年八月

廿日、景勝様御朱印ニ而給人六人分、都合六拾弍貫文之處被下

置候御判、于今所持仕候、▲天正九年十月十日、景勝様御

判ニ而木之内分之地被下置候御判、于今所持仕候、於越後死去仕、

跡式実子織部相続仕、御国替之時分会津米沢迄御供仕、

無程御手明鉄炮組御預被成候、死去仕、跡式実子太兵衛ニ弍百石

被 仰付候、其已後御加増三百石ニ而御使番被 仰付候、病死仕、

実子三九郎幼少より 定勝様御近習ニ被召仕候、家督百石被下

置候、 定勝様御遠行以後御馬廻ニ被召加、無程病死仕、実子

無御座付而、伯父庄右衛門ニ跡式百石被 仰付、御奉公中死去仕、実

子無御座付而、室高左京末子某兼而養子仕付而、跡式被

仰付御奉公相勤申候

一、右之外先祖於所々相働、矢疵等之段被 御感御書御感状五通

于今所持仕候、以上

酒井新左衛門由緒

一、本名小田切豊前弟ニ御座候、酒井名跡ニ被 仰付、酒井新左衛門と申候、

篠岡ニ被指置候時分被下置候御朱印、于今所持仕候 ▲於大場御

一戰之刻、鎗老ツ討捕候御感状老通、于今所持仕候 ▲新発田逆心

之刻走廻足輕共引廻下知仕、敵共数多討取驗多聲差上候、其節

被為御感候御書于今所持仕候 ▲天正十四年之頃、在城弥堅固ニ相

守、昼夜粉骨忠信仕候付而、御書一通御座候、其後敵多討取候

付而、此時之御感状一通ノ二通于今御座候

一、篠岡之城ニ罷在候時分、御年頭献上仕候節、御返答之御書ニ通御座候、

右之通ノ七通所持仕候 ▲祖父新左衛門、高麗御陣ニも御供仕、

御帰陣迄相勤申候、越後より会津江御移之前年、惣御家中

知行高書上申御取被成所、高下有之由、舟山と申者表裏故御

勘気蒙候得共、御跡を慕会津江罷越候処、舅今井源右衛門猪

苗代之城二被差置候間、源右衛門二引添、為御合力十五人扶持被下置、

重而御知行可被下置候段、直江山城守被申渡候処、無程祖父相果、

跡式実子新左衛門、猪苗代並之御扶持二而罷在候、其後大坂兩御陣二

召仕壱人召連相勤申候、御帰陣之上為御褒美知行四十石被

下置候、親新左衛門跡式実子某二無相違被 仰付候、江戸御堀

普請御石垣之御普請、乍兩度相勤申候

一、蓮心様御代 二、松木石見右之忠信被存知付而、取成を以御

馬廻江被召加、御奉公申上候、以上

村山長八由緒

一、村山弥次郎源隆儀より村山与七郎儀信迄十一代、右之証文村山

長左衛門所ニ御座候、与七郎次男村山八左衛門御扶持拝領仕、八左衛門

嫡男八左衛門家督仕、御納戸之御奉公五拾石被下置候、則八左衛門

跡式拙者ニ被 仰付候節、御馬廻組江被召加候、先祖之儀委は同

姓長左衛門書上可申候、以上

本間門弥由緒

一、先祖本間蔵右衛門、信州柏葉鉢之城ニ被指置相果申候、其子蔵右衛門

跡式被 仰付候、其後百人ノ御鉄炮組頭被 仰付、新発田御

陣之時分御先乗仕由、五十騎組之内木村仙右衛門所ニ、寛永十三年

三月十日二 隆心様江差上候御軍配之書付扣于今御座候付而書上

申候、其後会津米沢江御供仕罷越候、其子主水二跡式被 仰付、

大坂御陣之砌手負申候、其働被為御感御掟を以直江山城守二

被 仰付、琵琶箱之御腰指揮領仕候、其已後百挺御手明

鉄炮組五十人被 仰付相果申候、其子主水二跡式被 仰付、

御近習二被召仕候、其節右之蔵右衛門、柏葉鉢之御城二被指置候由

隆心様主水二被 仰聞候、其子三郎左衛門家督相続、御馬廻組二

被 仰付候、三郎左衛門実子無御座付而、与板組之内塩井次郎左衛門子某二

跡式被 仰付候、以上

真嶋藤兵衛由緒

一、祖父真嶋民部隱居仕、知行親專右衛門 二相渡申候而、本知六十

石之内隱居免二分申儀は不罷成迷惑仕候間、平林藏人頼入信夫へ

罷越申度由申上候処 二、春日右衛門取成を以七人扶持御切米廿石

被下置、則御扶持方八寸筒組之將を石黒采女、祖父民部兩人 二

被 仰付、御奉公仕候、其後年寄申御奉公道不罷成候と申、右之

御預被成候八寸筒組廿石之御切米共 二指上申、七人扶持は拝領仕候而

罷在相果申候、右跡式拙者 二被下置、御扶持方並 二罷成、五十嵐

徳左衛門組 二而御奉公申上候処、廿六年以前 二御馬廻江被召加候、其砌

七人扶持之内式人扶持御切米 二直シ、五人扶持 二三石五斗拝領仕御奉

公申上候、委細之儀は同姓專右衛門書付差上申通 二御座候、以上

室高左助由緒

一、祖父室高十五左衛門子新六郎、宗心様御近習ニ被召仕候処ニ、
蒙御勘氣窄人仕候、隆心様御代ニ被召帰、御馬廻江被召加候、
其節十郎兵衛ニ罷成、御奉公申上候、以後御使番ニ被成、隆心様
御遠行之翌年、蓮心様御代ニ江戸御城役被仰付候、無程
病死仕候付而、跡式嫡子柰之助ニ被仰付候、其上拙者儀大小姓江
被召加候、其後中小姓ニ被召仕候、蓮心様御遠行之後、御馬廻江
被召出候、拙者御奉公は三十三ヶ年仕候、委細之儀は同姓勘之丞
書上申候間、右之通ニ御座候、已上

相浦権兵衛由緒

一、相浦主計次男藤左衛門儀、直江山城守江小姓奉公仕候、其後

御扶持方並ニ被召加、御奉公仕候処ニ、本来御馬廻ニ御座候付而、三十

年以前ニ御馬廻江被召入候、藤左衛門儀女子壺人御座候間、御馬

廻之内戸狩左門四男某聲名跡ニ罷成候、当年迄三十年御

奉公仕候、已上

蓼沼又兵衛由緒

一、拙者親中嶋又右衛門、御武具蔵預申候、池浦惣左衛門相役ニ御

座候、某母方之伯父蓼沼長右衛門弟分ニ幼少より養育仕、蓼

沼を名乗罷有候処ニ、蓮心様御代ニ蓼沼長右衛門御訴詔

仕、御扶持拝領御馬廻江被召加御奉公仕候、以上

朝岡惣左衛門由緒

一、祖父朝岡弥右衛門次男八郎右衛門、新小姓御扶持拝領仕、其後

直江山城江小姓ニ罷出、大坂兩度之御陣ニ罷立、其以後 隆心様

御代ニ御歩行ニ被召仕、亥ノ年寅ノ年御上洛ニ三十人之御撰

人ニ罷成御供仕候、其後御馬廻江三十年以前ニ被召入候、八郎右衛門

実子某家督仕、御奉公申上候、先祖之儀委細同姓吉左衛門

可申上候、以上

村山伝右衛門由緒

一、村山弥次郎 「」儀より親弥兵衛迄拾弍代ニ御座候、右之 「」

同姓長左 「」御座候、拙者儀は弥兵衛次男ニ御座候、隆心様

御部 「」御奉公仕、御扶持拝領仕候、其已後旅御作事ニ被

召加 「」馬廻組ニ被 仰付候、先祖之儀委細同姓長左衛門

書付差上可申候、已上

大竹文右衛門由緒

一、祖父大竹次郎右衛門、於越後段母衣之肝煎被 仰付、知行

拝領仕、会津御当地迄奉公申上候所ニ、大坂御陣ニ罷立候得由

被 仰付候得共、歳至極仕候故、嫡子五左衛門ニ被 仰付、十九歳ニ而

罷立申候、其後御守江被召加御奉公仕候、蓮心様日光御

参詣之御供之時分、下野之内壬生二而病死仕候、次男左衛門

跡式被 仰付于今御奉公仕候、私儀久左衛門惣領二御座候、三侯九兵衛

「」三侯隼人万事頼申度由申二付而、隼人所二被在

隆心様御目見度々申上候、拙者若輩二御座候得共、御扶持御切

米 「」組外役人並二被 仰付罷在候、其後 蓮心様御

代 「」被聞召上、三侯隼人頼二候は、御馬廻江被召加之由

被 仰付御奉公申上候、寛文元年三ヶ国江被 仰付被遣候、翌年

罷歸江戸□子申上候、首尾好御金拝領仕、奉得 上意

——切米拝領仕、于今御奉公仕候、以上

